

# 中国の ことばとところ

鹿島宗二郎著





至誠堂新書 29

250円

# 中国のことばとところ

鹿島宗二郎著







鹿島宗二郎（かしま そうじろう）

1904年 東京生まれ。

東京商科大学卒業後、巣鴨高等商業学校教授。

1936年 渡華、上海申報社論説部長。同時に蒋介石政権との直接和平工作に従事。

終戦後、愛知大学（豊橋市）専務理事。

1957年 国土館大学教授（大学院、「近代中国研究」担当）

#### 主要著書

『民衆の生活から見た中共』  
（東洋書館）

『上海無辺』（中央公論社）

『中国革命の百八人』  
（元々社）

『毛沢東における人間学』  
（経済往来社）

ほか



至誠堂新書 29

# 中国のことばとところ

鹿島宗二郎著



## 序にかえて

この本はかなり欲ばった目的をもって書かれている。まず中国語というものを全然知らない人びとが読んでも面白く、読んでいるうちに、しらずしらず中国語をおぼえてゆき、中国人と中国の現状に親近感をもたせるようにし、中国語がどんなに面白い語学であるかがわかるようにしたい。だが、実をいうと、こういう著者自身、中国語を学校でならった経験はないのだ。私は第二次大戦前に上海に渡り、フランス租界に住みついたが、ろくろく言葉のわからないうちに戦争にまきこまれ、中国に同化しないと生活できない破目になってしまった。そこで何をおいても中国語だけは自由に話せるようにならないと生命にもかかわると思ったので、自分なりに色々工夫しながら、一語一語自分のものにしていった。この生活経験ははじめて中国語を習う人にとって多少の参考にはなると思う。

私が中国で暮した日々は、抗日戦争を通じて中国人の民族的自覚が高まり、中国が完全な独立国として世界史上に復活する基礎をききつつあった時期である。中国語をまなぶことは、中国人の世界となんらかのかたちで交渉をもつことであるから、中国の歴史、とくに抗日戦争から中華人民共和国の成立にいたる、この国の民族運動についてだいたいの経過は知っておかなければ

ならないと思うから、それにもふれておいた。

中国語は文字があらわれてからでも四千年以上の歴史をもつ言葉であるから、そのながい歴史のなかでみがきだされた珠玉のような成語やことわざができており、そのなかに中国人の性格や習慣が浮きぼりされている。それゆえこういう成語やことわざもできるだけ解明してゆきたい。

つぎにこれまでに多少中国語をならったことのある人びとが、これを読んでゆくうちに、しらずしらず現代中国で使われている、これまでの中国語になかった用語の知識を会得するようにしたいと思った。たとえばここ三、四年間、中共の新聞によくあらわれる「下郷」(または下放)という言葉がある。字義は郷に下る、つまり都会をはなれて田舎に行くことであるが、これは中国の政治経済の最近の発展をしろないとほんとの意味はわからない。中共では幹部が民衆生活から遊離し、労働からはなれていると官僚主義、命令主義など、政治活動上の弊害がおこるので、時どき幹部を「下郷」させて農民のなかで生活させる。「下郷」した幹部は農民と同じ食べものをたべ(同吃)、同じ住居にすみ(同住)、労働をともした(同労働)、それゆえこれを「三同」といっている。

こういう言葉は学校でひと通り中国語をやってきた人でもわからない。最近の中国にはあとでくわしくのべるが、こういう特別の意味をもつ言葉が非常に多くなっている。これらの言葉はみなそれが生まれた政治的、経済的背景を反映しているので、それを集め、その意味をたどっていけば現代中国の発展の経過と社会経済の動きを実感的にとらえることができる。私の専門は近代



中国の政治経済の研究であるから、この分野に比較的多くの頁がささげられている。

最近米国ではこういう中国語の用語例から中国の実体を研究する用語学的研究 *terminological study* が盛んに行なわれている。中国ではほとんどすべての政策は大衆運動によって推進されている。当局が新しい政策を実行するときには、まず幹部の学習会をひらき、その運動に用いられる諸用語とその意義が統一される。それが終わると幹部は四方にとび、それぞれの受持区域で民衆を動員し、ただちにキャンペーンを組織する。そのときはその運動を促進する標語が工場や農場のすみずみまではり出され、民衆をその方向に向って教育する。それゆえキャンペーンのあることに新しい用語が生まれ、このキャンペーン用語をたどってゆけば、その運動の様相とそれが民衆の間にどういう反応をおこしたかを実感的に知ることができる。

現在日本にでている中国研究論文は、多くの場合中共の政策を、中共当局の声明や報告だけから説明しているので、それが民衆の實際生活において、いかに実施されているか、民衆がそれについていかに反応したかがよく伝えられていない。たとえば一九五八年のいわゆる「大躍進運動」のとき、日本では、それは民衆の自発的な創意から生まれた大増産運動であり、そのなかで農民たちは、公社のために私心をすて、わき目もふらず働いているかのようにいわれていた。中共の刊行物の宣伝や、政府報告の翻訳をならべただけでは当然そういうことになる。ところが、実際は農民の間に「苦心惨たん二、三年やつとの思いで貯えた少しの金が公社にいつちまう、それをみるのは心が痛む」(辛々苦々<sup>チンシンクク</sup> 鬧騰<sup>ナオテン</sup> 兩三年<sup>リャンサンニエン</sup>、好不容積累一些<sup>ハオブ ユンチレイイシエーチエシ</sup> 錢、眼<sup>イアン</sup> 看<sup>カン</sup> 歸<sup>グイ</sup> 公社<sup>グオシ</sup> 實在心痛<sup>シユオスフアイレント</sup>)と

か「働こうと働くまいと、一斤半——配給量——にはありつける」(幹不幹一斤半)とかいうような声があがっていたことを知れば、人民公社についてまったくちがった絵図が生まれるであろう。

もはや日本でも「官様文章」(クワンヤンウエンチャン) (政府声明などの公式文章) をなぜまわすだけの中共研究は止揚されてよい時期にきていると思う。そのために役立つ一つの方法は用語学的研究ではあるまいか。そういう意味で、本書は中国語を通じて現代中国の実態をさぐりあてようとする、この国はじめての試みでもある。

この本にのせたかずかずの写真は昨年八月筆者が中国旅行をしたときに撮ったもので、本文とは関係がない。それにかんりのスペースをさいたのは、現在の中国にも古い中国がかなりのことっていること、そしてそれが徐々ではあるが確実に変貌しつつあることを、中国語をまなぶ人々にお見せしたいと思ったからである。

昭和四十一年一月

杉並高円寺の偶居にて

鹿島 宗二郎



## 目次

序にかえて

第一章	中国語をまなびはじめた頃	9
第二章	その頃の中国と中国人	25
第三章	中国の古い文化と新しい文化	46
第四章	戦争と中国料理	65
第五章	中国の農村	81
第六章	中国語の世界——有教無類	100
第七章	中国語さまざま	125
第八章	中国の大衆運動と用語学的研究	147
第九章	毛沢東と中国語	166
第十章	用語からみた新中国発展史	186

## 第一章 中国語をまなびはじめた頃



中国語への 私が上海に行ったのは、今からちょうど三十年前の一九三六年の七月、日本  
第一歩 と中国の間に戦争のはじまる一年前のことだった。日本をでるようになった

わけは——理由をあげればAからZまでであるが、ほんとの理由はいつもMだという西洋のしやれのように——MONEYに行きづまってしまったからである。私は、ある思想事件にひっかかって、つとめていた学校から追い出されてしまった。その頃は一度思想事件にかかずらったようなものに、まっとうなつとめ口などはなかった。このまま手をつかねていたのでは家族三人をかかえて路頭にまようほかはない。その上時勢はだんだん悪くなるばかり。ともかくもう少し自由にいきのつける、ひろい天地にゆきたいと思った。中国の留学生に知り合いがあったので、相談してみると上海にきたまえ、なんとかなるさといってくれた。このとき、はじめて見たこともない中国に行く気になったのである。

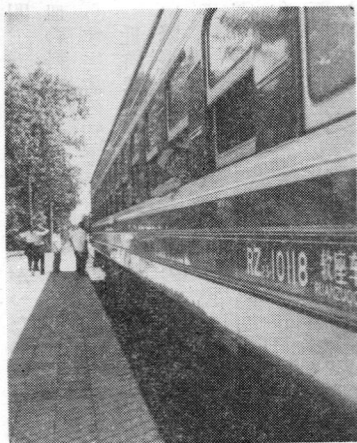
私は一つ橋出で、英語とドイツ語はすこしやったが、中国語は全然しらなかった。船が棧橋につくと、なんともいいようのない、するどい声をあげてわめきたてる黄包车(人力車、北京では洋



車<sup>クルマ</sup>、日本人はこれを「やんちょ」といっている）にかこまれ、思わず呆然とたちすくんでしまった。

日本から一緒に来てくれた中国の留学生はなれたもので、たちまちかれらを撃退し、どこから雇ってきた一台の馬車<sup>クルマ</sup>に手ぎわよく私をのせてくれた。その馬車が動きだすと、ようやく周囲に目をやる心のゆとりがでてきて、私ははじめて見る異国のめずらしい景觀に目をうばわれた。

それぞれの国旗をひるがえした各国の建物がずらりとならんだバンド（外灘<sup>ワイタナ</sup>）には、万トン級の外国船がいくつも横づけになり、その間を奇妙な形をした中国の小さなジャンク船が川波の上をとびあがるようにゆられている。南京路では二階だてのバス（公共汽車<sup>クンゴンチーアツエ</sup>）や自動車（汽車<sup>チーアツエ</sup>）が、黄包車や荷車（大車<sup>タイツエ</sup>）とならんで、中国流にいえば川をのぼる鮒（過江之鯽魚<sup>コウキヤンツツユエ</sup>）のようにはしっているかと思うと、両側に醬油（日本のしょうゆである）のかめをつんで、腰で平均をとりながらよたよた押している時代ばなれた一輪車（小車）もある。馬車が南京路からエドワード路（上海名は愛多亜路<sup>エドヤル</sup>）にはいると、街は目だって汚なくなり、これ以上汚なくなりようのない、垢だらけの中国服をきた男と女が、わけのわからぬ言葉でわめきあっている。はじめてきく中国語の発音のかんだかさ、いや、あとでわかったことだが、これは上海語で、学校で教えているいわゆる中国語（国語<sup>ゴクゴ</sup>）とはまったくちがった、きたない発音だった。今日からはこれらの人びとの間にはいつて暮さなければならぬと思うと、好奇心よりもまず懐ろのかるい心細さがさきにたつ。宮崎滔天<sup>みやざきたうてん</sup>がはじめて上海をみたとき「余は船首に立って顧望低回して、遂に泣けり。其の何の故なるかを知らざるなり」といっているが、彼も私同様懐が軽かったにちがいないと思った。



新中国紀行① 深川駅。「軟座車」というのは一等車のこと。

こうしてやっとおちついたのがフランス租界(法租界、国語の発音フアツチエー)の震旦大学に近い、ユダヤ人の貸部屋だった。当時は排日運動がつよかったので、中国人の家よりも、この方がいいという友人の心づかいからだった。貸部屋といえば悪い言い方はいいが、やはりようは天蓋から日がさすだけの屋根裏なのだ。夏だったので日中はうだるような暑さ。その日から私の上海におけるエトランジェの生活がはじまった。

朝食は大餅(タービン)というフクラシ粉のはいらない焼パンと、油条(ユディアオ)という油であげたうどん粉のねじ棒。大餅の間に油条をはさんで二つにおりまげて食べるのが常法。それに豆乳(トウニウ)にがりを加えない豆腐(ツ)の汁があれば結構おいしく食べられる。ときには粢飯(ツハン)という、蒸したもち米のおにぎりのなかに油条をいれたものもやる。昼と晩は食券制度の学生食堂にかよった。これは一元(ユアン) (当時は日本の一円とほぼ同価値)で、七枚つづきの飯票(ハンビヤオ)(食券)を買い、一回の食事に一枚わたせばよいのだから、十四銭三厘にしかあ

たらない。食事はとても豊富で、一汁一菜だが、飯は食べ放題である。たいてい友人のグループ四、五人が、めいめいちがったお菜を注文し、一卓をかこんでたべるから、十四錢三厘で四、五皿の料理が食べられるわけである。そこには中国人の、貧しければ貧しいなりに結構ゆたかにくらす生活の知恵があった。

近所にフランス公園（中国語では<sup>フランクフルト</sup>花園）がある。朝食をすませるとよくそこに行った。激し

い緊張の後にくるころの虚脱状態からまだ抜けきれなかったので、よく公園の池のほとりにあるベンチにもたれて、ただ漠然と空を見つめている時間が多かった。朝が早く草の上にしっとり露がおりていて亜熱帯の太陽が露の玉を珠玉のようにきらめかせていた。草地がごくゆるやかな勾配で次第に低くなり、いつの間にか池にはいつてしまう。池の金魚は少しも人間を恐れず、水面におちたパン屑などを争ってたべている。かわせみが池のふちにとまって「<sup>オプツ</sup>我不吃金魚」（私は金魚はたべません）というように、きょとんとこっちを見ている。池の向うの木立から若い男女のアベック——中国語では<sup>イトワイナンニユイ</sup>一對男女——が手を組みながら出てくる。こういう楽しそうな人びとを見ていると、いままで忘れていた何ともいえない孤独の淋しさが迫ってくる。友達のない淋しさだろうか、妻がそばにいない淋しさだろうか。いな、上海は世界五十三カ国の人間の海、そのなかに解けきれない異質の分子、それが今の自分だという感じが一番淋しかったのだ。一日もいや一刻も早く上海に同化したと思うぬ日はなかった。友達と自由に話し合うことのできない悲哀、言葉の通じない悲哀をしみじみ味わった。

多種多様な音

上海に同化するには中国語だけは早くなんとかしなければならぬ。しかしその言葉のむずかしさ。忘れもしない四馬路スーヤルの古本屋でアルドリッチという

人の書いた「華語須知」ハワイーシユ Practical Chinese という英語で書いた中国語の独習書を探し出し、発音を

たどりと独習をはじめた。もちろん友人がくれば、早速つかまえて、一字一句の発音をきい

た。だが同じ字の発音が一人ひとりみんな少しずつちがっている。その頃私の周囲には山東人サントレン。

湖南人フナシ、四川人スツァンなどの学生がいて、それぞれの言葉に各地方のなまりがあったからだ。かれら

の間では国語コニユイで話していたが、ふだん使わない単語などは地方なまりのために、一ぺんいったの

ではわからず、お互いによくきかえているのを知った。四川からきた人からならった発音で

いうと、山東人は、それはほんとはこういうべきだと教えてくれたが、その山東人の発音もまた

別の人にきくと、ほんとうはこうなのだと教え直してくれる。結局、私は発音の小さなちがいに

神経を使わず、文章全体の意味が相手にわかればよいのだという考え方になり、一字一句の発

音、四声（中国語には同じ発音がたくさんある。買もマイなら売もマイだ。そこで音の上げ下げによって

区別している。北京語では四つ。広東語では六つの区別）にあまり多くの時期をかけず、なるべく多

くの人に接して、実地で中国語の耳をならし、なるべく多くの本をよんで、できるだけ多くの語

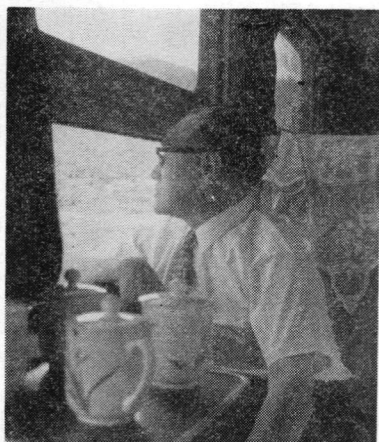
彙をおぼえこむという方針にかえた。ともかく私は早く中国語がはなせるようにならないと「お

まんまが食えない」（飯碗フワン有問題ユエ）のだ。

新しい語学をならいはじめた人は、一字一句おぼえこむと、すぐそれを使ってみたくなるもの

である。しかし私が独習した国語（コーノイ、ブトンハア）（普通話ともいわれ、大体は北京語である。国は「P.O.」と発音するのがほんとうだが、国語とつながる場合コーで結構通ずる。要はあまり気にする必要はない）などが、上海語だけをなしている上海人（サンヘーニン）（北京語の発音ではシアンハイレン）にわかるはずはない。そのためにどんなに腹立だしい思いをしたことか。黄包车（ホワンパオウツェツェフ）の車夫は私が上海に来たばかりの日本人だとみて、中国人のお客の二倍もの賃銀を吹っかける。風呂屋（ユイチ）（浴池）に行けば「擦背（ツァーベイ）」（さんすけ）が法外な心付けを要求する（心付けのことは小費（シヤオフエイ）であるが、上海人はカミサンという。字はどう書くか知らないが、明らかに英語の Commission がなまったものにちがいない）。ものを買おうとすればかならず二、三割高いものや、悪いものを売りつけられる。文句をいおうとしても、相手をやりこめる言葉をしらない。それに若い身空で女の子とも遊べない上海の生活がつくづくいやになってきた。しかしよく考えてみると、三百万の人びとがこの人の海を恐れず平気で生活しているのに、私だけがここに落付けないというのは、この町が悪いのではない。私が悪いのだ。ここに落付くためにはどうしても自分が日本人であってはいけないのだ。それから私の中国人になりきろうとする生活がはじまった。

「大世界」での　そこでまず言葉をおぼえるために中国語の本による学習をやめて、毎晩のよ  
中　国　語　うに愛多亜路（エトヤル）（北京語の発音ではアイトアル）と西藏路（シヤンアン）の交叉点にある「大世



界」(北京語ではター・ス・チエー)に通つて北京語や上海語の芝居を聞いて耳をならそうとした。中国の芝居には日本の歌舞伎にあたる京劇チンチと新劇ホワチにあたる話劇があるが、話劇では現代語がはなされるので大いに勉強になった。はじめは何をいつているのかさっぱりわからなかった中国語が、二カ月程通つているうちにどうやら言葉の感じだけはわかるようになってきた。中国の友人と一緒に街を散歩するときなどは、看板に書いてある字の発音を一つ一つきいた。電信柱デェンカン(電桿)にぶつかれば、これは中国語ではなんというかとたずねた。乞食ホワツ(花子)がしっこく金をせびりに来ると、これはよい老師せんせいとばかり、なにを話すか耳をすませて聴く。こうした勉強が私の上海生活を緊張させ、郷愁を追い払ってくれた。言葉もどんどん上達し、友人もふえてきた。

それからは上海の生活は日増しに面白くなり、この街を改めて見直すようになった。どうみてもきたない街である。ここの貧乏はまったくむきだしで、



外観からでは乞食と普通の貧乏人との区別がつかないほどだ。その反面金持と貧乏人とはけたはずれにちがっていた。資本主義社会の矛盾がこんなに表面に露出している都会はあるまい。この街にうごいていている複雑な諸關係をはっきりさせ、中国社会の実体をつかむのはいつのことだろうなどと考えながら、私はよく街を歩き回った。

そのときの友人の一人に鐘チユンという男がいた。かれは高等学校を途中で飛びだし一九三二年の前上海事変のとき十九路軍にとびこんで日本軍とたたかった。その翌年の熱河戦に参戦し、さらに福建人民革命（蔣介石に不満をもった十九路軍が主となつて一九三三年福建でおこした反蔣革命）に参加するなど、なかなかの情熱家だった。そんなことから友人たちはかれを丘九チユウキウと呼んでいた。中国語で兵隊のことを丘八チユウパという。「兵」の字を上下二つに分ければ丘八になる。だがなぜ彼が丘九チユウキウとよばれるか、私にはわからなかった。別の友人にたずねると、かれは学生だが、実際は丘八チユウパに毛がはえたくらいだから丘九チユウキウさと教えてくれた。仲間にはあまり重んじられていないようだったが、私はこの丘九の朴訥さを尊敬していた。当時かれは楊樹浦ヤンシュプ（上海東部地区）の労働者街にある補習学校ヤクガク（中国語では業余学校ニユイシエリヤク、仕事をおわつてからの学校）の教師をやっていた。ぜひ一度遊びにこいというので、その学校にいつてみた。普通の長屋を二軒つぶして、部屋のかなに幅のせまい板をわたし机がわりにした、およそ日本の学校の概念とはかけ離れたものだった。この学校の校長は任崇高レンツウカウといって、救国運動チユウクオユントン（日本の侵略から中国を救う運動）ではその頃名のある人だった。

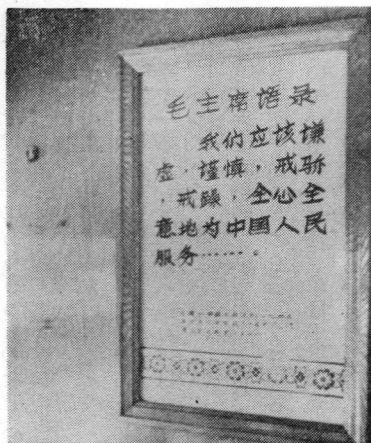
工人<sup>クレン</sup>の暮らし 生徒の多くは労働者で、みな熱心に鐘さんの話を聞いていた。鐘さんは、授  
 のなかで 業が終わると、私を附近の労働者街に案内しながら、かれらの生活について  
 話してくれた。月収三十円にみたないかれら労働者の生活は、苦しいことは苦しいがなんとか  
 やってゆける。ともかく「没有法子<sup>メウフフツ</sup>」（どうにもならない）ではなく「有弁法<sup>ユウベンフフ</sup>」（なんとかなる）そ  
 うだ。かりに一日八十銭の日収のある労働者なら、猪肉<sup>フエー</sup>（ぶたにく。肉の発音は「ロ」だがこれをジョ  
 ーなどと発音したら通じない。どうしても発音は実際に先生からならうこと）十銭<sup>イマオチエン</sup>（一毛銭）、塩一銭<sup>イ</sup>（一  
 分）、油四銭、大餅十銭、野菜五銭、それに米を少し買えば、親子三人ぐらいいは食べてゆける。  
 そのうえ月に一度くらいは安芝居をみる事ができるといふ。しかしこの一カ月二十五円の仕事  
 でも、上海では血まなこの奪い合いである。この街の西南北に拡がる大地のどこかで、毎年くり  
 かえされる内乱、洪水、旱災、饑饉、そのたびに土地を追われた農民がこの街にながれこみ、ど  
 んなやすい仕事にもとびつこうとしているからだ。

鐘さんの生徒の一人である労働者（工人<sup>クレン</sup>）の家に行つて、なかを見せてもらうことにした。割  
 合に大きな煉瓦造りであるが、中にはいると部屋の壁に木の棚が四段につくられ、それぞれがベ  
 ッドになっている。その部屋はその労働者が借りきっているのかと思つたら、そうではない。か  
 れはただベッドだけを借りているもので、その部屋にはその外に三家族住んでいるときかされた。  
 それでも一人で一つのベッドを使えるのはまだよい方で、なかには一つのベッドを昼間勤務（日  
 班<sup>ジバン</sup>）の労働者と、夜間勤務（夜班<sup>イェバン</sup>）の労働者が共同でかりているものがあるそうだ。

その街にはこれらの労働者たちを相手にそれ相当の小商人が群がっている。かれらのお店は、首に紐をかけて胸のところにつるした箱である。その箱の上にわずかばかりの日用品がならべられている。煙草を一箱買う能力のない人びとが顧客なので、一箱単位ではなく、一本いくらで売られている。落花生を買うにも目方ではない。一粒いくらで、粒の大きいのかからえらばれる細かさだ。附近では丸裸かの子供達（小孩子們）が道にながれる水道の水のなかで嬉々として遊んでいる。その水は道端の消火栓をなにかでこじあけて流したもので、大勢の男女が手にバケツや桶を持ってくみこもうと騒いでいた。

青い顔をして素肌きたない長衫（ワンプイスのながい中国服、普通下にシャツと褲子をきて、その上にきる）をつけ、ところどころの穴から肉体のすいて見える女が通る。鐘さんが、あれは「無褲子」といつて労働者相手の淫売ですよ、相手は大低十銭か二十銭で、夕方から夜中にかけて露路のおくなどで直ぐ取引ができるのですと教えてくれた。無褲子というのはパンツをはかない女の意味だというから、日本の田舎ではたいいてい女は無褲子だといったら鐘さんは目を丸くした。その頃まだ日本では腰巻をしている女の人が多かった。鐘さんにそのわけを説明してやると、鐘さんは「それはわれわれ男性には大へん都合がいいですね」（那於我們很便宜！）といった。

話がすこし下の方にさがってきたついでに中国のこの方面の社会学を講義しよう。私の上海社会学の第一課は前にもいったように「大世界」という学校で教えられた。なにがここを選ばせたか。第一に月謝がやすいからだ。入場料両毛銭（二十銭）、しかも「買一送一」といつて、入場券



新中国紀行③ 広州行事内。毛沢東のことば、意味は、「我々は謙虚謹慎でなければならぬ。驕をいましめ、全心全意をもって中国人民のために服務しなければならぬ」

一枚買えば別に一枚「送」ってくれる。つまり一枚十銭ということだ。それならはじめから入場料十銭とすればよさそうなものだが、そうしないところに中国人の巧智がはたらいっている。入場

料二十銭とすれば格が高い。その上もう一枚の切符は家にもって帰っても、つぎに来るまでになくしてしまうものがある。だから名実ともに劇場の得になる。中国語でいえば「名利双收」(名、利両方を獲得する)ということになる。

相<sup>シャン</sup>公<sup>タン</sup>と 大世界を一口に劇場といってし  
野<sup>ヤ</sup>鶏<sup>チ</sup> まってはその概念がつかみにく

い。ここは木造だが、大きさはスキヤ橋の日本劇場を八つ合わせたくらいの敷地に、建物がぎっしりつまっていて、そのあちこちにありとあらゆる種類の寄席や芝居がかかっているのだ。中国には乞食が家の食い残しを集めて煮こんだといわれる「萬家福」という料理があるが、これは正に寄席と演劇の「萬家福」である、「京劇」があり「昆曲」(江南からおこった劇曲)あり、「話劇」あり、手品あり、軽業あり、

万才ありで、まさにあらざるものなし（応有尽有<sup>インヨウジュウヨウ</sup>）といえる。あれはなんというのか知らないが、女が長衫<sup>チャンツァン</sup>をきて客の前にでて挨拶しそのままじつと立っていると、だんだん周囲が暗くなり、やがて着ているものが薄くなって、ついに丸はだかになってしまふ映画応用のトリック、そんなものを端から端まで見たりきいたりしていると十銭で一日は楽に遊べる。

「京劇<sup>グンキョク</sup>」のいきれから逃れてばやと廊下に出る。廊下は建物から建物へわたる橋のような回廊になっていて、そこを歩いていると、よくずるような顔をした男が、にやにや笑いながら近づいてきて声をかける。「won chi boy?」これはケンブリッジ大学を出た人で、もちょっと首をかしげる英語である。Won't you boy? らしい。私はかつてその種の「少年」のひとりだろうついているのを見た。年は十五、六、顔に薄化粧をした綺麗な子だ。北京語ではこれを相公<sup>シャンゴン</sup>といい、上海語では屁精<sup>ピーチン</sup>という。どうして屁<sup>ヘ</sup>の精<sup>エキス</sup>かと友人に問うたら、この場合中国語では屁<sup>ヘ</sup>とは氣體ではなく固体だそうだ。本来女性のものは尻<sup>ビ</sup>と書くがこの場合発音の同じな屁を以て尻に代用するのはそれ以上の意味がありそうだ。中国では昔から斯道がさかんで三史五経のなかにある「頑童」「外寵」「倂幸」などはみなそれを意味している。日本では弘法大師がこの習慣をわが国につたえたという俗説がひろくつたわっている。それを知らない「弘法は裏、親鸞は表門」という古川柳の意味はわからない。中国では京劇の女形は素性を洗うと相公出身のことが多い。すつとあとのことだが上海で、「秋海棠<sup>チウハイタン</sup>」という「話劇」が大当たりをとったことがある。華北の軍閥のひとりが秋海棠という名の女形を寵愛していた。この軍閥はよほどやにっこい性格だと

見え、その外にも女性、の愛妾をかこつていた。ところがこの女形と愛妾がひそかに愛し合い密通した。その現場をおさえた軍閥が怒つて、秋海棠の目をくりぬいて追い出してしまふ。十数年後、その軍閥は倒れ、めくらになった秋海棠と色香のあせた愛妾とが、路上で相遇うという筋だった。

上海に上陸するバイタリテイのつよい外国の水兵などは、こういうギリシャ趣味の愛好者が多いという話だ。ギリシャ趣味が変だと思う人はプラトンの饗宴パンクニョトをよんでみたまえ、アルキピアデスアルキピアデスがその男性美をもつていかにソクラテスを誘惑しようとしたかを。私にはそういう趣味がなかったので、折角のおすすめではあったが、いつも御辞退申しあげた。

その回廊の両側には歳のころ十六、七の街の「観音」たちがずらつとならんで客をひっぱつていた。英語では street angel だが、この女たちは厚化粧で顔がこわばつていて、一向に表情がないから、木彫の観音といった方が「名副其實」ミソフツシ（名実相ともなっている）なのだ。彼女らは上海語では野鷄ヤチとよぶ（北京語では暗面子アンメンズ）。野鷄は雉のことだが、この鳥は中国ではきまつたねぐらを持たない鳥とされているから、こう呼ばれたのであろう。私はその頃長い間人倫の道を遠ざかつていたので、彼女らの一人に恋をしようとした。もっとも私がここで「恋をする」という意味は英語の make love であり、フランス語の faire amour である。その妓おんな（妓女ツメユイ）は、内地にのこした女房にやや似たところがあった。と、まず自分にこういいきかせて良心をねむらせる、と、勃然と好奇心がおこつてきた。だが、いざその妓のそばに行く、と好奇心が後ろにひっこみ、



氣後れが先にたつ。そばをはなれると、こんどは好奇心が前にでてくる。こんなことをくりかえしているうちに決心がつき、いよいよ戦闘準備となった。

上海のその方面の病氣のおそろしさについては随分きかされている。一晚で眼がつぶれてしまったとか、首——人間の首じゃない亀の子の首です——がおっこちてしまったとか。そればかりじゃない、街角でよくその実例らしいものにも出会っている。どうしても予防策を講じなければいけない。それには化学的方法と物理的方法がある。私は上海の化学を信じないから、ある日薬屋に行つて物理的方法を求めた。外套の套の字と孔子の子の字を合せると、中国語でそういう物品の名になると聞いていた。私はその外套を買おうと思つて盛んにあせつたが、私の発音ではどうしてもこの言葉が先方に通じない。薬屋の小僧も困つてしまつて、しまいには英語で「それは一体何の薬ですか」と問うた。この質問に氣取り屋の私はしどろもどろになり「やはりアスピリンのような熱さました」といつて逃げ歸つてしまった。

そんなことで私の Spring fever (春の熱病) は名医にもかかることができず、そのまま内攻してしまつた。外によい方法もないので私はただできるだけ肉体を使い精神を疲らせて、その方面を考ふる余地のない生活をしようと思ひ、昼間は好奇心の動くままに街から街を歩きまわり、夜はおそくまで夢中になつて中国語の勉強をした。その結果上海に來た時は何も知らなかつた中国語も、四、五カ月のうちにも大概の会話ができるようになった。一度などは簡単な卓上演説をやつて拍手されたことがある。もっともこれは後で聴衆の一人にきいたら、「何をいつているか少し



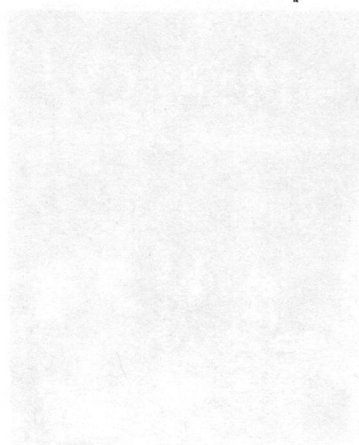
新中国紀行④ 広州駅入口。標語は日本から来た青年を歓迎するためものである。

はわかるところもあったよ」という返事だったからあまり自慢にはならない。しかし文章の方は進歩が早かった。これは私の中学校が漢文のひどくやかましい学校だったせいだ、二、三カ月で毎日の新聞紙が読めるようになり、四、五カ月すると字引きを引き新聞の文芸副刊（中国の新聞には文芸欄の一面がありこれを副刊とよんでいた）まで読むようになった。本文の方はきまりきって面白くなかったが、文芸副刊の方は抗日文学華やかな時代だったので、興味津々たるものがあつた。

当時は新生活運動の影響で、普通の中国人の家ではお茶のかわりに開水瓶（カイスイビン まほうびん）に入れた白湯（サイユ）を飲んでいたが、朝飯後湯気のほのかに立ち上る白湯のコップを前にして読書や看報（カンポウ 新聞を読むこと）は、たしかに乏しい生活の中の喜びだった。

啄木の「なつかしき冬の朝かな湯をのめば湯気やわらかに顔にかかれり」という落付いた気持をしみじみ味わった。私がこの白湯の味と一緒に魯迅（ルンペン）や茅盾（マウデン）の文章の味をやや理解するようになったのはやは

りこの頃だった。



（以下、縦書きの文字が非常に淡く、ほとんど読み取れない。おそらく本文の一部である。）

（以下、縦書きの文字が非常に淡く、ほとんど読み取れない。おそらく本文の一部である。）

## 第二章 その頃の中国と中国人

魯迅の 魯迅が亡くなったのはその年の十月十九日である。かれの告別式の日、ひとりの友人が私の下宿にあらわれて、ルーシユンさんのお葬式があるので、こ

れから膠州路（国語ではチャオツウル）の萬国殯儀館（葬儀場）に行くところだが、一緒に行かないかという。ルーシユンとはだれなのかわからなかったもので、字で書いて貰い、はじめて魯迅とわかった。そこでなかば好奇心から友人について行くことにした。

殯儀館は大変な人出だった。林語堂のやっている「論語」という雑誌に、中国人は一人では国家の前途を悲観して沈黙考し、二人になると、ひそひそもうけ話になり、三人あつまると、日本の侵略に悲憤慷慨し、四人あつまるとマージャンをおっぱじめる、と書いてあったが、そこにあつまった人びとはみんな奇妙に静まりかえっていた。上海でこんなに大勢の人が集まって、静かにしているのをみるのは不思議な感じだ。それだけでも荘嚴な空気である。

入口で署名をすませ、両側に並んでいる人びとの間を通って進んで行くと、地味な藍色の長衫を着た魯迅が、たくさんの花輪にかこまれて行儀よく仰臥していた。読書につかれて今しがた寝



入ったばかりとでもいうような安らかな死に顔だった。私はまずその顔容の端正さに打たれた。上海にもこういう美男子がいたということが不思議にさえ思われた。じっとその莊嚴な顔を見つめてみると、色々な想いが去来する。あの眼が見開いていたときには、きっと世の中の愛憎の果てを見つくしたもののだけがもつ、あの優しきで瞬いたであろう。あの口が開いていたときには、きっと世の中の道理を知りつくしていたものだけがもつ気安さで真理をかたつたであろう。そう考えると生前になぜ一度お目にかかっておかなかったのかと今更ながらくやまれた。

魯迅の傑作はなんといっても「阿Q正伝」であろう。阿Qという人物は東洋の革命家きどりによく見受けるタイプで、ただ人のあとについてむやみやたらに騒ぐだけ、自分の信念というものがなく、実行力もない。魯迅はこの男の性格を描写しつつ、中国革命の現実のなかにある悲喜劇的要素を見事に摘出している。

なんでもかんでも景気のいいことばかり書くことのすきな左翼文学者は、中国革命の現実にたいて批判的な魯迅の作風にあきたらず、魯迅に「反動分子」「プチブル文学」「感傷文学」などというレッテルをはりつけた。もっともこれには魯迅を中心とする文学研究会系と左翼文学者の創造社系との、中国文壇での対立がからみ合っていた。左翼文学の周揚（現在中共の文化部副部長）、艾思奇などが魯迅攻撃の先鋒だったようだ。かれらはその前年の五月頃から上海救国会の抗日救国運動と歩調を合わせて、「国防文学」（抗日文学）を提唱していた。だが、魯迅、茅盾らは胡風という作家（この作家は一九五三年、いわゆる「胡風事件」で周揚らから批判され追放されてし



新中国紀行⑤ 広州駅。正面にベトナム人民の斗争支持をよびかけた絵看板がみられる。

まった。今頃はどこかで「労働改造」をうけていることであろう」の提唱した「大衆文学」を支持していた。魯迅の亡くなる五カ月前には、これまで対立していた文壇の二系統が合流して、あらた

に「文芸家協会」が生まれたが、魯迅はこれには参加せず、別に少数派の「文芸工作者」ウエンイクトンツァオツエを率いて立った。これはかならずしも魯迅が「国防文学」に反対したためではない。ただ政治スローガンをつぎまわって、騒いでいる阿Qどもの手によって、文学が一種の政治的宣伝の道具に墮落することをにがしく思ったからであろう。そのため魯迅にたいする左翼からの批判はごうごうたるものがあつた。このとき魯迅は自分の心境をこううたっている。

眉を横たえて冷やかに  
千夫の指さすに對し  
首を俯して甘んじて  
儒子の牛とならん

ホワンミョーランドワイ  
チエンツァ  
フシユウカンウエイ  
シュウツウニョウ  
横眉冷對  
千夫指  
俯首甘為  
儒子牛

はじめの句は、俺は多くの人からなんといわれようと、冷静にそれに耐えようという意味だが、あとの方は、**儒子**すなわち赤ん坊を中国民衆と解して甘んじて民衆のために乳（精神的糧）を生む牛となろう、という解釈もあり、また、ただ首を下げ甘んじてかれら儒子らに御される牛となろうという解釈にもなる。儒子という言葉は中国では「**儒子**なんするものぞ」というようにやや輕侮の意味をふくんでるので、中国民衆をさすというのはあたらなひではないのであるまいか。むしろ「周楊らの小僧つこども」と解して、今は奴らに軽くあしらわれているが、やがて俺の文学の前にひれふすときがくるぞという意気込みがかんじられる。この詩は現在毛沢東の座右銘になっているという話だ。

魯迅にはこういう言葉がある。

「もし孔子、釈迦、キリストがまだ生きていれば、これらの教徒は恐慌を免れまい、これらの教主先生は、かれらの行動にたいし大いに慨歎したにちがいない。かれらが生きておれば、ただ迫害あるのみだ。偉大な人物が化石となり、人びとが彼を偉人と呼ぶときがくれば、かれはすでに**傀儡**に変わっているのだ。」

この言葉は死後の彼の立場を予見していたかのである。生きてるときあれば周楊らから攻撃された魯迅は、今では彼らの手によって**傀儡**にされてしまった感がある。かれは今「中国のゴリキー」とよばれ、上海には魯迅記念館がつくられている。しかし、いま魯迅が生きていたとしたら、プロパカンダ文学以外に文学を考えない中共文壇の現状をみて、はげしい批評をおさ



えることが果してできたであろうか。

### 周作人のうれい

魯迅はペンネームで、かれの本名周樹人ツウシュオレンの方はあまり知られていない。しかし彼の弟の周作人はその本名でよく知られている。かれも兄とともに日本に留学し、国外から祖国のあわれな姿をながめているうち、身内に救国の熱血がたぎってきた。かれは兄とともに当時神田新小川町にあつて、愛国者のたまりになつていた民報社に章太炎チャンタイエンを訪ねて、その教えをうけた。章太炎しょうたいえん、本名章炳麟しょうへいりん、中国音韻学の大家であり、現在の中国語の発音記号は大半かれがつくつたものだ。彼はその博学と国粹的愛国主義をもつて、中国の愛国青年の間に非常な人気があつた。福本日南（明治の史論家、新聞「日本」二六）にあつて文名たかし。大正十年歿）と会ったとき、日南から日本では章魚（中国でも同じ、チャンユイ）と書くことだが、君は章炳麟ではなく、正に章魚たこだといわれ、ブンブンおこつて帰つていった。しかし日南はかれがなんでもできるから八足だという意味でそういったのである。民国革命後この国を「中華民国」といったが、その国号も章太炎がつけたものである。

かれの門下からは民国革命に活動した数多くの革命家を輩出している。しかし周作人はその兄と同様かれらとは行動をともしなかつた。かれのつぎの国語詩をみればかれが文学をもつて祖国に貢献する道をえらんだことの賢明さがわかるであろう。

ツワツクアレ タイフエイアイ  
中 国 人 の 悲 哀

ツワツクアレ タイフエイアイ  
中 国 人 の 悲 哀 呵

ウオレシ ヌオタシ ヌオツウツクアレ シタフエイアイ  
我 說 的 是 做 中 国 人 的 悲 哀 呵

(的は輕くよむときはタ)

イエブ シ イシウエイワイクアレ シフリヤオウ  
也 不 是 因 為 外 国 人 欺 侮 了 我

イエビンブ ツ ツオシシ ミンヤオダ ウオ  
也 並 不 指 着 姓 名 要 打 我

イエビンブ ハンツオシシ ミンライマ ウオ  
也 並 不 喊 着 姓 名 來 罵 我

タヅレ ウオ トウイミ エンフオウ  
他 只 是 我 對 面 走 來

ツオリ ヘンツオレ エシエマ ヌイチイア オイ ツクオチユイラ  
嘴 裏 哼 着 些 什 麼 曲 調 一 直 過 去 了

ウオ スイッ アイチヤ リタシホ  
我 睡 在 家 裏 的 時 候

タ ヌツ アイチヤン ワイタ タイユアンツリ  
他 又 在 牆 外 的 他 的 院 子 裏

フア チヌワン シヤン タボ  
放 起 雙 響 的 爆 竹

中 国 人 の かな し さ

中 国 人 は かな し き かな、

私 が い っ て い る の は 中 国 人 と 生 れ る こ と の かな し さ な の だ。

と は い え、外 国 人 が 私 を ぶ べ つ す る か ら かな し い ん じ ゃ な い。

ま た 名 前 を さ し て 私 を な ぐ ろ う と す る か ら で も な く、

名 前 を よ ん で 私 を の の し る か ら で も な い。

あ い つ は た だ 私 の 方 に や っ て き て

口 の な か で な に か う た の 文 句 を う た い な が ら、  
そ の ま ま 行 っ て し ま う、た だ そ れ だ け な の だ。

私 が 家 の な か で 睡 っ て い る 時、

あ い つ は ま た 塀 の 外 の 自 分 の 庭 に、つ づ け ざ ま に 音 を た て る 爆 竹 を 擲 り だ す の だ。



新中国紀行⑥ 標語は「マルクス・レーニン主義万才」広州駅のプラットフォームにて。

この詩はみられる通り美しい情感はない、ただ当時中国人の存在をまったく無視し我がもの顔でこの国にのさばっている外国人にたいする中国人の感情を淡々とのべているにすぎない。それ

にもかかわらず、この詩に異常な迫真力があるのは、かれらの日常生活で、そのような現実を、四億（当時は人口四億とも五億ともいわれていた）の中国人すべてが、いやというほど経験させられていたからだ。周作人は戦争中日本に結托したかどで一時監禁されたが、すでに故人となっている。

「均分主義」と 魯迅や周作人についてつい長話  
人 民 公 社 になつてしまつたが、私の方は

それから間もなく魯迅の告別式をおえて、萬国殯儀館をでた。そこには今日の人出を目あてに乞食や浮浪児が群がつて、告別式をおえてかえる善男善女を目あてに金をせびっていた。よくみる風景である。やはりこの告別式に來たらしいひとりの老人が、黄

包車に乗って私のそばを通り抜けた。そのとき、私のあとから浮浪児がひとりするつと脇をすりぬけていったかと思うと、黄包車の後から手をのばして、乗っている老人の冠りものをひつつかんで一目散ににげ出した。老人は「槍帽子！」（帽子泥棒！）とさけんで車をとめたが、もう追いつかない。周りの人は誰ひとり捉えようとしない。私は友人にそれをいうと、かれは「とてもつかまるものじゃないし、それに中国では他人の瓦の上の霜まで気にかける必要はないんだ。」（中国には「各人は自ら門前の雪を掃い、他人の瓦上の霜にかかわるを休めよ——各人自掃門前雪、休管他人瓦上霜」ということわざがある）といった。こんな小さな犯罪をいちいち気にかけていたら、この国では暮せないほど、当時の上海には浮浪児がうろうろしていたのだ。かれらは腹がへれば市場で食糧品を仕入れてかえる娘夷（上海語、おさんどん）の買物籠から食べものをかっぱらう。娘夷が地団太をふんでわめきだす。まわりの人はまたかといった様子で笑いながら見ているだけで、今日は自分の買物がとられなかったことに至極満足する。ダンスに疲れた人々が十二時すぎに南京路を通る頃には、かれらは看板すぎた料理店の前に列をなして、客の食べのこしを分けて貰っている。ともかくこうしてかれらは勇敢に上海に生きていた。

中日戦争がはじまって、燃料が高くなったとき、愚園路や河南路の交通ひんぱんな所には、かれらの一群が陣取っていて、石炭や薪をつんだトラックがやってくると、すばやく車台にとびつき、かれらの「通行税」を抜きとった。私はかれらがめいめい略奪物をもって裏通りに集まり、年かさの子供からそれを等分に分けて貰っているのを見て、その巧智におどろかされた。収入の

不定なかれらは「余力あれば以て相勞し、余財あれば以て相分つ」という墨子（黒濯、紀元前四—五世紀頃の人）の共產主義こそ、生活を保証する最良の方法だということを、生活の経験から知っていたにちがいない。収入の多い時に友人を助けておかなければ、収入のないとき友人から助けてもらえない。だから彼らは餓死を免れるためにふだん共產主義を実行しているのだ。これこそ原始共產体の原理だと思う。私はこの原理はいつも生存線すれすれの生活をしている貧民の多い中国の社会史をつらぬいている赤い線ではないかと思っている。孔子も「丘や聞く、国を有ち（たも）家を有つ者は寡きを思えず、均しからざるを思う。貧しきを思えず安からざるを思う。蓋し均しければ貧しきことなく、和せば寡なきことなく、安くば傾くことなし」（論語「季氏」）といっているではないか。私は昨年中共を訪れて、人民公社の現状を見、その説明を聞いたが、それはソ連の「コルホーズ」の原理から生れたというよりも、むしろ貧しいものが均分主義で生きるための制度のように思われた。

上海には当時浮浪児がどのくらいいたか、正確な数はつかめない。ともかく中国では毎年のようにどこかで戦争や、洪水や、旱拔がおこっていた。そのたびに避難民が洪水のようにこの都会にながれこんだのである。ここなら乞食をしても泥棒をしてもなんとか食えろ（「吃飯沒有問題」）と思うからだ。

だが、あとからあとからその数がふえるから、どんなに「均分主義」を実行しても食物は行きわたらない。当時上海で行倒れ屍体をと리카たづける慈善団体「普善山莊」が、一年間に取扱っ

ていた屍体数は大抵二万から三万だが、その半数以上が浮浪児の屍体だった。（一九四二年度の行倒れ屍体総数は三万一千七十体、そのうち浮浪児の屍体は一万八千八百五体）。そしてかれらの行きだおれの原因は、たいてい餓死か凍死にきまっていた。

寒い西北風——中国では秋から冬にかけて西北から名物のかわいた寒い風が吹く、華北ではそれが黄土のほこりをまきあげて「黄塵萬丈」の景を呈する——が吹きまくった翌朝などは街をあらくと、家の軒下などに、今しがたその小さな魂が天国に飛び去ったばかりのぬけがらによくぶつかった。どれもこれも手足をかじかめて行儀よく死んでいる。通行人は馴れたもので立止りもしない。ものの十歩も離れないところでは、屋台をおろした粥売りをかこんで、黄包車夫などがふうふう湯気をふきながらかれらの朝食をたのしんでいる。私はこういう風景をみて、中国の友人に「君はどう感じるか」ときいたら、「最初のうちは可哀そうに思ったが、今ではああいう子供は死んだ方がすべてのためになる。死んでゆくものは生きて行く苦痛をまぬかれるし、ひとり死ねばそれだけ社会のごみが片付くように考えてきた」と正直に白状した。

故「大鼻子的」この頃から上海の浮浪児に対する社会の関心が次第にたかまってきた。茅盾が浮浪児を主人公として書きあげた「大鼻子的故事」（はなでかのはなし）も大

成功だった。茅盾は本名沈雁冰（シェンアンピン、現在國務院文化部長）である。かれは魯迅とともに「文学研究会」の指導者であったが、「文芸家協会」が設立されたときには魯迅と行動をとみにせず、それに進んで参加し、その指導者となった。この作家も魯迅と一緒に左翼文学者



新中国紀行⑦ やはり駅にみられる標語の一つ。「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民主民族革命運動をしつかり支持しよう。」

から盛んに「ブチブル作家」とか「反動作家」とかいわれたものだが、皮肉にも左翼文学者の提唱した抗日文学で一番実質的な仕事をしたのはこの人だった。とくに「大鼻子的故事」はかすある抗日文学のなかでも一番光っている。「大鼻子」

と呼ばれる浮浪児の生活と心理をえがきながら、結局最後にはそれまでなんの関係もないような「打倒日本帝国主义」という政治スローガンにまでもっていくすじのはこびの自然さ、手法のうまさ、文学と政治の結合の問題について凡百の文学理論を読むよりも、この作品一つの方がずっとうなづけるものがある。論より証拠、茅盾について浮浪児の世界にちよつと足をふみいれてみよう。

「私はこの小説の主人公がなにに『坊』とかなにに『村』とかいう、三階建の高級住宅街（上海の住宅街は行きつまりの露路になっていて、その入口には鉄門があり、万宜坊とか緑宝村とかいうような名前がつけられている。これを上海では弄堂



といい、北京では胡同フートンといい、広東では街坊ガイハンというの鉄門のなかにこっそりはいりこんで、セメントのごみ箱にさがり、野良犬と一緒にかびのはえた御馳走を漁っているのによく出合った。かれは野良犬と肉のついた骨を争い、それを手にとってみて、ごみだらけの骨になにひとつ身になりそうなものが残っていないとみると、犬に投げてやる。偶然にも腐れ切った林檎とか大根の切れっぱしなどをみつけようものなら、もう有頂天になって痩せさらばえて真黒になった指先が少しふるえてくる。かれはそれをたべながら一層勇敢に野良犬の間に割りこみ、セメントの箱をひっかきまわす。そして犬たちと同じように地面に腹ばいになって、その痩せた顔をセメントの箱の下の方にある取り口に突っこむ。もしそのなかになにか光るもの——古い酒瓶だとか、坊ちゃんやお嬢ちゃんのすてた壊れた玩具など——が見つかるものなら、饑しさもしばらくは忘れてしまい、腕をのばしてそれを取ろうとする。そんな時になぜ身体ごと箱のなかにはいれないものかと恨めしくさえ感じるのだ。その時彼ののびきった腰を荒々しい革の靴がどしんと蹴飛ばす。かれは経験によってこの足が、この『坊』又は『村』の門番か巡捕が彼に与えた御褒美だということを知っている。そこでかれは尻尾を後足の間にはさんでこそそこそ逃げ出す野良犬と一緒に、例の鉄門から逃げ出し、再び別のところに行つて、その「冒険」事業をつづけて行くのだ。」

矛盾はまずこういう調子でなにげなく主人公の毎日の生活を紹介し、それから、かれの数々の

「冒険」談をのべ、かれがどうしてこういう境界におちたかということを説明し、次第に政治的な方向をあたえて行く。

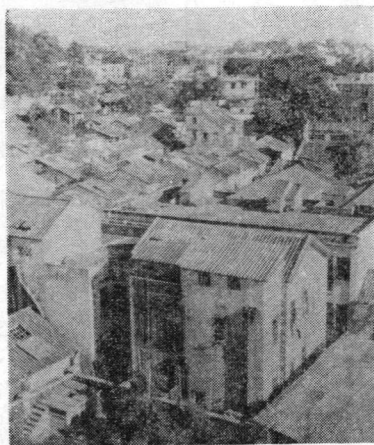
「彼とて生まれつき『家』がなかったわけではない。かれの家がどんな家だったか、彼は今ではまったく記憶がない。ただ彼の記憶に漠然と残っている家は——ある年忽然と上海に戦争がおこり、『大きな鉄の鳥』が小半日かず知れずの爆弾を撒きちらした。それは大きな家にもおちたが、もっと多くのものはかれの家があつた貧民窟におちたのだ。そして彼は家を失い、同時に親爺とお袋を失ってしまった。かれらがどんな風に死んだか、かれは知らない。親爺やお袋がどんな顔をしていたか、それもよく憶えていない。そのときかれは七、八歳位だったのだが、すこし幼なすぎた。親爺やお袋がいたときでさえ、かれは両親の顔をはつきり見ていなかった。つまり両親は朝から暗いうちに二人とも出て行つてしまひ。夕方おそくなつてからでなければ帰らなかつたからだ。しかし彼はどのように親爺とお袋を亡くしてしまつたか、そして誰がかれらの親爺とお袋をうばい去つたかを永久に忘れなかつた。」

茅盾はこのように一浮浪児の生活と「一・二八」<sup>フンペン</sup>（一九三二年一月二十八日におこつた上海事件）との關係をむすびつけながら、かれの生活をそんなに非人間的なものにした、その背後のものを読者の前にあばきだす。そして最後の場面にいたつて大鼻子は、家の近くを通る日本帝国主義に

たいする抗議のデモ隊について行き、学生たちが警官になぐられるのを見て、自分も思わず「打倒日本帝国主义」とさけんで、警官とわたり合うのだ。ここで読者もかれと一緒にいかりの感情を、その背後の力に向かって一時に爆発させることになる。その政治と文学を結合させた手法のうまさは見事というほかはない。

さて「大鼻子的故事」の最後場面は、毎年一月二十八日にくりかえされる「一・二八」記念デモを描いたものだが、確かこの年の九月十八日にも「九・一八」（九月十八日におこった満洲事変）を記念するデモがあったようだ。時局が時局なので国民政府は九月十七日から二十日まで、上海市区に臨時戒嚴令を布き、一切の集会、行進、ストライキ、休校、ピラ（伝単）（フテンタン）まきを禁止すると発表した。この頃中国の各地で日本人にたいする暴行殺害事件がひんばんとおこっていた。まず七月十日には萱生という日本人が殺され、八月二十四日には成都で日本の新聞記者が殺傷された。つづいて北海でも漢口でも日本人の殺害事件がおこっている。日本側では中国政府には排日取締りの誠意がないとして、干渉の機会をねらっていたので、国民政府はこういう用心ぶかい措置をとらざるをえなかったのだ。したがってその日の抗日デモは租界警察当局からやっと許された法大馬路（フランス租界の大通り）だけを行進したようである。

抗日救国会の というと、まことにあいまいいかたで申し訳ないが、実をいうと私はこの日一文なしで外に出られず、家にくすぶっていたのだ。しかしそのデモの



新中国紀行⑧ 広東、羊城ホテルからみた町なみ。

先頭に抗日救国会の婦人指導者史良女史（中共になってから最高人民法院々長をつとめた婦人）の騎馬姿があつたことと、「大鼻子的故事」にあつたように、この女史が警官隊とつ組み合いの大喧嘩をして怪我をしたことだけは確かである。とい

いきるわけは――

それから一、二日たったある日のこと、私が部屋でくすぶっていると友人の一人が入ってきて、史良女史が抗日デモで大怪我をされたから一緒にお見舞いに行こうといい出した。かれのいい分によると、彼女はいわば日本のために怪我をしたようなものだから、日本人のひとりたるお前が贖罪の意味でお見舞いに行く義務があるというのだ。この論理に承服したわけではないが、噂にたかい史良女史というのはい体どんな女性だか、ひとみみるだけでも見得だと思つたので、さっそくこの友人について行くことにした。

史良女史は救国会七人の領袖の紅一点である。救国七領袖というのは沈鈞儒、章乃器、沙千里、

王造時ワンゾウジ、李公撰リクンペン、鄒韜奮ズオウフン、史良スリーヤンで、当時救国の七君子とよばれていた。

残念ながらその日の女史は安静を要したので会うことができなかった。それから四、五日たつて、私自身こんなことをすっかり忘れ去っていたある日の昼下り、下宿のボーイがにやにや笑いながら階下に二人の中国女人ツワングオニユーニン（北京語では女人ニユーレン）が訪ねてきていますと知らせてくれた。私は上海に來てから日も浅く、部屋に訪ねてくれるような女性と知り合いになったはずはない。なにかの間違ひだろうと思ひながら、部屋着をひっかけて見に行こうとした。そのときドアがつよくノックされ、こつちからろくに返事もしないうちに二人の婦人がつかつかと入ってきた。つかつかというといかにも部屋は広そうに聞えるが、実はつかと一步はいるとすぐベットにぶつかつた亭子間テインツチエン（階段のわきにある部屋で、当時中国の貧乏作家はみな亭子間に住んでいた）、左翼文学を亭子間文学などともいっていた）。そこに私は鰥寡孤独カンカコドク（鰥は男のひとりもの、魚は水のなかで目をあけてねる、ひとりものも夜ねられないで目をあけているという字）の気安さから半裸体でごろつとしていたのである。先方もすっかりあわててしまったらしい。その一人が史良女史だとわかったのは、私が部屋着をひっかけて、座が改まってからだ。もう一人の女性は広東人で、東京にながく留学していた人、女史が通訳にたんだという。

私は目の前に男まさりな女史のがっちりした体格をみると「むべなるかな」と思った。彼女が警官と取組み合いをしている現場を見たら、私はむしろ警官に同情したかもしれない。だが話しているうちに眼が優しくかがやき、意志の強そうな顔がほぐれて人のいい世話ずきのおばさん気

質がのぞく。女史は私に大体こんなことをいったようにおぼえている。

「日本の人びとはわれわれ中国人が日本人全体をうらんでいるように思われるかもしれませんが、私たちは決して日本の人民には敵意をもってはいません。私たちは日本の人民が軍閥のためにあらゆる自由をうばわれていることをよく知っています。でも日本の人民はどうしてももっとよくならないのでしょうか。どうして軍部の横暴をゆるしておくのでしょうか。それは中国人がいつもはがゆく思っているところです。」

私はそこで、日本のインテリだけでは、とうてい軍部の中国侵略を食いとめることは不可能だから、あなたがたの力を借りなければならぬ。この仕事は中日知識人の共同の仕事でなければならない、とか何とかいって、お茶をにごしておいた。

この答えはあまり史良女史の御氣に召さなかったらしいが、多少の印象は与えたらしい。それから間もなく救国会の人々が私のためにささやかな歓迎会を開いてくれた。その席には救国会の七君子のうち沈鈞儒、章乃器、沙千里（中共になってから國務院輕工業部長）その他文化界の知名の士がみえていた。

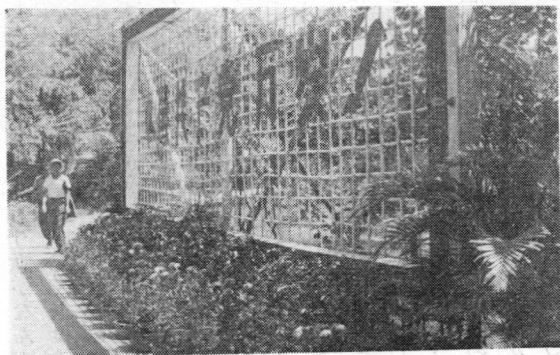
沈鈞儒（中共になってから最高法院院長になったひと、今は故人）は清朝最後の翰林（学士）で当時上海の弁護士会々長だった。史良さんも沙千里さんも皆この人のお弟子である。頭がつるつとはげて、よくかがやいている工合が、いかにも学者らしい。中国のふるい読書階級 *Literati* のもつ教養がその人柄によく現われている。興にのってくると話しながらしきりに頭を左右に振り

たてる。中国人にこういう「搖頭」<sup>ヤオタウ</sup>の癖はざらにあるが、この人の振り方はすこぶる特徴がありいかにも情熱が身うちにあふれた老愛国者の感じがでていた。かれは年はとっているがいつもその時代の若い世代とともにたらく珍らしい人だ。正に「年老心不老」<sup>ニエンラウシンラオ</sup>、春花老来紅<sup>チュンハカウラウイホン</sup>である。

章乃器氏（中共糧食部長、一九五七年以後「右派」として失脚）は身長五尺七、八寸の偉丈夫で、見るからに理智的な顔をした四十男だった。当時浙江実業銀行の副經理だったが、別に自分で経済研究所を開き、そこに多くの青年学者を擁していた。彼自身はマルクス主義者ではないが、その青年学者にはマルクス主義者が多く、かれらを通じて彼の活動は共産党とむすびついているといわれていた。そこで世間ではこの人を「左傾資本家」とよんでいた。

抗日戦と内戦の この当時救国会をとりまく国内情勢は非常に複雑なものがあつた。抗日救国  
うずのなかに 会にあつまつたものは学生、労働者、中小資本家で、政府や大金融資本はかれ

らの動きにはすこぶる警戒的だったのだ。当時国民政府は江西省の「剿共」<sup>チョウコウ</sup>（共産党討伐）に一応成功し、中共を遠く陝西の山のなかに追いこんでしまった。もし日本がよい妨害をしなれば、蒋介石はもう一息で国家統一を完成するところだったのだ。だが日本は中国が統一されれば「満洲国」を承認するはずはないと思つたので、すでに自分で「討共」<sup>トウコウ</sup>をやっている蒋介石にたいして、「共同」で討共しようと要求していた。もちろん蔣は日本の強要の「うら」をよく知つていたので、日本に口実をあたえないためにぜがひでも中共を掃討してしまおうと決心していた。そこでかれは「対外先安内」<sup>トワイフイェンアンナイ</sup>（外国にたいするには先ず国内を安定するのがさき）というスロ



新中国紀行⑨ 羊城ホテルの入口花壇。うしろのスクリーンに中国共産党万才の文字がみえる。

ーガン<sup>①</sup>をだし、共産党が健在するかぎり、中日戦争に動機をあたえるような救国会その他の活動は一切抑圧しようとしていた。だが中国の事態はかれのプラン通りにはすまなかった。日本の

要求がだんだん度をこえてくると、共産党の「中国人は中国人を打つな」(中国人不打中国人)<sup>フランクオレンジ・タックオレンジ</sup>というスローガンは国民の間に大きな反響をよびおこした。それが日本軍によって故郷満洲を追いだされ、現在同じ中国人の共産軍と無理に戦わせられている張学良の東北軍の兵士の間に異常な影響をあたえた理由は充分うなづける。たしかその年の十一月一日頃のことだったと思う。章乃器氏が私の部屋を訪ねてきて、いつにないしんみりした口調で、中国の現状についてこうかたてくれた。

「綏遠事件<sup>すいえん</sup>(中国語の発音はスイユアン、日本の特務機関が蒙古軍にまじって綏遠で反乱をおこし、失敗した事件)以来張学良の兵士たちはもうすっかり内戦を嫌がっております。剿共戦線から武器を放棄して逃亡する兵士も続出しているそう



です。中国ではもう誰がなんといっても、中国人同志お互いに戦わせることが不可能だということがやがてわかるでしょう」

私はいまでもこの言葉だけははつきりおぼえている。あるいはそれからつづいて起こった事件と、かれの話を思いあわせて、頭のなかで幾度もいくども反芻した結果強く印象にのこっていたのかもしれない。

その翌月の十二日張学良の兵士をかつて中共軍と戦わせようとした蒋介石自身、かえってかれらのために西安の華清池という温泉場で監禁されてしまった。これが中日戦争を決定的なものにした西安事件だ。それからのいきさつは周知の通りである。

蒋介石は十二月二十五日のクリスマス（セントサンチエー聖誕節）の日にある約束をかれらにあたえて「釈放」された。もちろん表向きはかれが張学良を改悟させて、南京につれてきたことになっている。こうして彼の面子は一応救われたが、しかしこれで抗日戦争はもはや時間の問題になってしまった。

その前夜、私はこの町のクリスマス・イーヴの景氣をみようとして、中国の友人たちに誘われて洋服のよこれを気にしながら、はじめて上海のダンスホール（フーティン舞厅）にいった。跳舞のできない私はホールの片隅でお茶をすすりながら、人びとの踊りをみているだけだった。ここでいま陽光な光とリズムのなかで踊っている人びとも、家にかえればみなそれぞれの悩みをもっていることだろうが、（中国のことわざに「チャーチャード・ユナナチンチユイ家家都有難唱曲」家ごとにみなうたいずらい曲がある。というのがあ）こういう場所にいるエティケットとしてほんとに人生を楽しみきっている顔をしている。私

はふとかたわらの友人にこんな質問をしてみた。戦争になってしまったら、このひとたちは一体どうなるだろう。友人は私の質問の意味をすぐ理解したらしい。

「君は中国人が戦争になったら団結しないかも知れないと考えているんだろう」

「だが」とその友人はこうつけ加えた。「だがしかし、どんな人間でも自分の国が亡び、自分たちが日本人のけらいあつかいをされるとわかれば、立ちあがるよ。だから抗日戦争はどうでもこうでも中国を団結させる民族戦争になるのさ」

私はこの友人の自信とその言葉のもつ真理にすっかりおされてしまった。こうして一九三六年は息づまる緊張のうちにしづかにくれていった。

### 第三章 中国の古い文化と新しい文化

#### 上海の正月

上海に来て初めて迎えた冬は私にとっては楽しい思い出である。夏の間あれに変わった。私は暖炉の上でコーヒーをわかしパンをやくぜいたくをおぼえた。コーヒーポットのコーヒーがコトコト音をたてる。床の上にねそべって中国語の本や新聞を読みながら、ものぐさく手を延ばして暖炉の上のパンをひっくりかえす。そのうち誰か友人がやってきて床のへりに坐り、一緒にコーヒーを飲みながら話しこむ。中国語の勉強がすすむにつれ、私の中国に関する好奇心は、海綿が水を吸いこむように、あらゆる友人から知識を吸いとった。

こういう友達のなかに林林<sup>リンリン</sup>という詩人がいた。かれは現在、中国人民対外文化協会副秘書長で日本にもきたことがある。昨年私が中共にいったときは会わなかったが、「人民中国」八月号に載っている彼の写真をみると、昔とちつとも変わっていない。

はじめてむかえるこの国の正月は、ふだんとちつとも変わらなかった。中国の本当の正月はそれから一カ月あとの旧正月である。この日、中国の商店街はみな大戸を閉ざし、門口には春聯<sup>チュンレン</sup>



をかける。春聯というのは細ながい赤い紙に正月を迎える縁起のいい文字を書いたもので、その文句は、

花開富貴ホアカイフクケイ

花は富貴を開き

竹報平安ツクホウヘイアン

竹は平安を報ず

というように、すに風流めいたものもあるが、たいていは、

発福生財ハツフショウサイ

福を發し財を生じ

大吉大利ダイキチダイリ

大吉大利　とか、

黄金萬両ホアンチンワンリヤン

黄金萬兩

日進斗金ニチシントウキン

日に斗金を進む

とかいうような慾ばったものが多い。

それから爆竹バウツである。これは「接神チエーシエン」といつて妖氣をはらつて神をむかえるためのものだ。火

藥のない頃竹を火にくべて音をだしたところから、この言葉がのこっている。おもやツエツファン（正房）の

中央の部屋（正庁フエンテウ）には、天上から降つたはずの神々のすがたを印刷した紙をはる。その前にお供

物を盛つた供卓クンツァオが置かれ、主人や家族が、礼装で叩頭カウトウ（頭を地につけての礼拝）する。礼装は旗袍チベオ

（ワンピースですそのながい着物）の上に、日本の羽織に相当する馬褂マフ児をはおる。年始の客がやつ

てくると、旗袍のない袖のなかで両手をかさねたまま上下にあげさげし「恭禧恭禧！」（おめでと

う）または「恭禧發財！」クンシフアツアイといいながら頭をさげるのだ。外国人の私からみるといかに大時代

でコミカルにさえ見える。それがすむと、親しい間がらならば家族をまじえて「サイコロばくち」などをはじめめる。正月だけは「面子ミエンツ」のある紳士淑女が「面子」を失うことなく大つびらでばくちができるのだ。その方法は、三個のサイコロを茶碗にいれてころがし、さっと卓上になげる。そして二つ同じ目が出たとき、のこりの一つのサイの目の大小によって勝負をきめる。たとえばなげたサイの目が三、五、二とであればやり直し二、二、五とであれば、五が勝負の目となる。やがて六、六、四とふったものがあれば、彼の目は四だから、五を出したものがかけ金をとる。上海語でこれを四五六ネウシロとよんでいる。日本の雙六オウロクという言葉もこれからつたわったものであるう。

上海ではこの日、もと上海京城だった南市の中心にある城ツエンノイミヤオ内廟ツエンホアンミヤオ（城隍廟ともいう）にお詣りし、紙銭を燃やして——これを放鈔フアンシヤオという——一年の「発財フアツアイ」（財産をつくること）を祈る。この国では発財即幸福とわりきっているのだ。紙銭というのは銀紙でつくったお金で、これをやいて煙とすれば人界から神界にとどく、いわば神様への電報為替のようなものだ。天上の神様はこの電報為替をうけとり、その多寡によって、それぞれ差出人に福をさずけてくれるわけである。まさにえびたいである。もつとも中国語では「えびでたいを釣る」というところは「えびでちようざめをつる」カシエーティナオシムイ（蠓蝦釣鰈魚）という。たいは海鯽魚ハイツユイ（海のふな）といってあまり珍重していない。廟宇の扉には大てい「祭神如神在ツアイシエンヤシエンツァイ」（神を祭るに神在すが如くせよ）というきまり文句が書いてある。もつとも参詣人はこんな文句をまともにはうけとらない。中国人のほんとの気持ちはア



「サー・H・スミスがあげている次の文句通りだ。  
「神様の在すつもりで拝みましょう。御利益に変わりはないけれど。」

神様の在すつもりでさがみましょう。頓着はどっちもなさらずにぬけれど。」

新中国紀行⑩ 広東の道路工事夫。

芥川龍之介 南市の城壁は一九一四年に取壊  
の見た上海南市 されて、いまは幅の広い大通り

ができ、その上を電車がはしっている。この電車通りをひとまたぎすればすぐに租界だ。

南市に足を踏みいれると、商店のとり扱う品物が租界とはがらりと変わってくる。多くは中国のふるい手工業の土産品で、銀細工、竹細工、吊洋燈、麻雀牌、象牙細工、印材、石細工といった類が多い。城内廟に向う狭い道路にはいると、それが一層目だってくる。

この辺の道路は角のある小石を雑然と並べた石畳みで、租界の二十世紀にあきあきした旅行者がよく通る。少なくとも大正十四年四月の某日、芥川龍之

介が上海在住の詩人島田四十起を案内にたてて、ここを通ったことは保証しよう。ここに芥川龍之介の書いた当時の案内記がある。

「その狭い路の両側には麻雀の道具を売る店だの、紫檀の道具を売る店だのがぎっしり軒を並べている。そのまたせせこましい軒先には無暗に招牌がぶら下っているから空の色を見るのも困難である。そこへ人通りが非常に多い。うっかり店先に並べたてた安物の印材でも覗いていると、忽ち誰かにぶつかってしまう。

しかもその目まぐるしい通行人は大抵支那の平民である。私は四十起氏の跡につきながら滅多に側眼もふらない程恐る恐る敷石を踏んで行った。

その路地を向うへつき当ると噂に聞き及んだ湖心亭、といえは立派らしいが、実は今にも壊れ兼ねない荒廃を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まっ蒼な水どろが浮んでいるから水の色などは殆んど見えない。池のまわりには石を畳んだ、これも怪しげな欄干がある。我々が丁度其処へ来た時、浅葱木綿の服を着た弁子の長い支那人が一人——その一人の支那人は悠悠と池へ小便をしていた。陳樹藩が叛旗を翻えそうが、白話詩の流行が下火になろうが、日英統盟（日英同盟）の期間がきれてそれを続けるかどうか問題となっていた——著者註）が持ち上ろうが、そんなことは全然この男には問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔にはそうとしか思われない長閑さがあった。曇天にそば立った支那風の亭と病的な緑色を拡げた池と、その池へ斜めに注がれた隆々たる一条の小便と——これは憂鬱愛す

べき風景画たるばかりじゃない。同時にまたわが老大国の辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿にしみじみと少時眺め入った。が生憎四十起氏には、これも感慨に価する程珍しい景色じゃなかったと見える。

『御覧なさい、この敷石に流れているのは、こいつはみんな小便ですぜ』

四十起氏は苦笑を洩した儘さつさと池の縁を曲って行つた。そういえば成程空気の中にも重苦しい、尿臭が漂っている。この尿臭を感じるのが早いか、魔術は忽ち破れてしまった。

湖心亭は畢に湖心亭であり小便は畢に小便である。私は靴を爪立てながら匆々四十起氏の跡を追つた」

湖心亭のほとりの  
思 い 出

ここで少し私から臭い註解を加えて置きたい。南市は租界とちがつてまつた。夜が明けると糞車ががらがらやってくる。それを待ちかねたように阿媽（女中）たちが馬桶のなかに一晚中蓄積したものをそのなかにざあつとあける。それからささうで馬桶をがらがら洗う音があちこちで聞え出す。それからまたざあつと音がする。今度のざあつは前のとちがつて道ばたの溝へ馬桶を洗つた水を流す音である。その溝は家々の前を通り、我が湖心亭の池にも通ずるのであるから、異臭の漂うのも無理はあるまい。話に聞く中世紀のヨーロッパの都市もざつとこんな状態で、家々の汚物が下水のなかに流れ放題だったらしい。だから旅人が都市に近づく



と、五マイルさきから臭氣でわかったそうだと。この点から見ると南市は十八世紀よりさらに中世にちかい存在らしい。

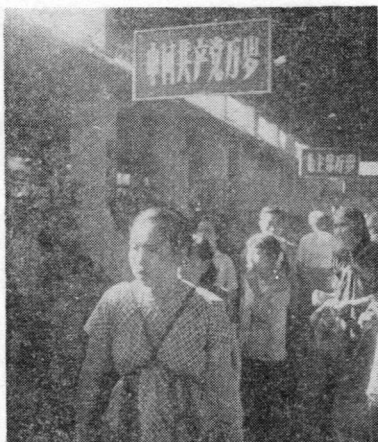
湖心亭の周りには乞食、占い師、藥草売り、いかさま香具師が、それぞれつましやかな店をはっている。盲目の老乞食は敷石に白墨で、かれの悲惨な一生を達筆にかき、最後に善男善女に、自分に錢をめぐんで下さればかならず応報があるとむすんでいる。一体この代書は誰がするのかなどと思いをめぐらす必要はない。すぐわきに姓名判断の攤みせ(タンと読む、屋台)を出している算命先生スワンミンシエンシヨソ(運命を算うらなう人)がそれだ。かれは乞食のために代書もやれば、野鷄ヤイチのためになじみ客(熟客)に出す無心状も書く。金額の如何によっては強盜一味の脅迫状も書きかねない。字もなかなか達者だが、それよりも彼の縦横無尽な出鱈目は、下手な講釈よりも面白い。彼は勿体らしく紙の上に「洪秀全ホンシユウツァン」(太平天国の乱をおこした天王)と筆をふるいながら、おもむろに口をひらく。「この洪秀全こうしゅうぜんの全という字を見なさい。これを上下二つに分ければ人王になる。つまり洪秀全は秀でたる人王を洪水で押しながすということ、この名前のなかに太平天国の乱をおこす命があるのじゃ。では洪秀全が失敗したのはなぜだろう。それは清朝側に曾國藩ツェンクオファンがいたからだ。國藩即ち國の藩屏、洪秀全は人生を押し流そうとしたが、藩屏にさえぎられて失敗したのだ。文字の威徳とはこういうものじゃ」とかなんとか結んで、じっとお客を見つめる。

こんなうそつばちにうっかり感心していると、いつのまにか懷中物がなくなってしまう。中国では仕立屋銀次の一味のことは壽シユオと書く。日本ではすり(扒手)ベシユオは手が少しながい位だが、中国

では手が三本ある怪物である。

中国人はこういう判じもの様な文字をいくらでもつくってゆく才能を持っている。雷、有、丘

新中國紀行⑪ 広東の市場。市場でもあちこちにスローガンがぶらさがっている。「中国共産党万才」



兵、泵、禽。圖は本を本箱でかこっているから、 書館、有は有の中にあるべきものがないから無という字（国語では使わない）これは広東語ではよくつかう、たとえば有関係（かんけいがない）というように。  
兵兵は兵の音と玉があちこちする形からできた字、  
泵はポンプのこと、これは新中国になってからの造字、なぜ石の下から水がでるのがポンプなのか私にもわからない。禽、これはちょっと説明しにくい。  
文字の形から見れば肉に入っていくわけである。どこの肉にはいつて行くかは、大人の世界では説明はいらない。この文字は「禽儻媽」（こんちくしょう）とか、禽なんとか戻とかいうような相手をののしる言葉によくつかわれる。この逐字訳はわが面子にもかかわるからおあずけにしておく。中国人は禽や戻というようなかたわらしい字はわざと書かずに「他

媽的！」（こんちくしょう）ですましている。

中国の文字はもともと単純な象形文字であり、さらにそれを組み合わせてできたものであるから、その造字の原理を応用すればいくらでも新しい文字ができるわけだ。

私はあるアメリカ人で中国文字の研究をしている人から「妹」という字を書いてこれはなんとよみますかときかれたことがある。こんな字は漢字にはないと思ったのであつさるかぶとをぬぐと、これは「エレベーター・ガール」とよみますといわれたときには、なるほどと思った。そのうちにこんな文字も使われるようになるかもしれない。

### 麥革期の知識人

#### 辜鴻銘のころ

さて私がこの城内廟あたりをうろちよろしたのは一九三七年、戦争のはじまるちよつと前だが、その頃よくはいった肉饅頭屋には、真黒によれた四角

な卓子おぜんがあつて、下町の兄いどもがよくとぐろをまいていた。私はかれらを見ると、例の「水滸

伝」にでてくる九紋龍史進が魯達と一緒にのんだ潘家酒店の情景を思い出した。あの時代にもか

れらは、あの朱泥を塗りたくったような醬チャンチ鶏（とりの丸やき）をむしり、酒をちびちびやっていた

にちがいない。あの頃の中国人——といっても相手は小説の人物だが——と現在の中国人の生活

様式にどれ程の変化があるだろうか。思うにこの一千年間中国人の生活様式には劃期的変化というものはなかったのだ。ちようとポンペイの廃墟のなかで、ローマ人の生活が化石になつてしま

ったように、中国の社会のなかには、かれらの様式を化石化してしまうような空氣があつたにちがいない。中国人のなかに、かれらの昔ながらの生活様式を無上のものとして認める人は少ない。水洗便所を使おうが、馬桶マツトを使おうが、それはただ生活の便不便の問題にすぎないじゃないか、一国の文化はそんなものできまるものじゃない。そこに生活している人間がどんな立派な考えをもっているかによつてきまるのだ。とうそぶく、辜鴻銘コウメイのような人がその代表である。

辜鴻銘コウメイ（東西八カ国語に通ずる清朝末期の大学者、当時ノーベル賞の受賞候補者となつた）はペナンの華僑の子として生まれ、ヨーロッパで教育をうけ、日本人の妻君をもち、北京大学の教授となり最後は北洋軍閥につかえた。そこで世人は彼をこううたっている。

生シヨウツァイナンヤン在南洋 南洋に生まれ  
 讀ドクツァイナンヤン在西洋 西洋でまなび  
 娶ウツァイナンヤン在東洋 東洋人（日本人）をめとり  
 職シヨクツァイナンヤン在北洋 北洋（軍閥）につかえた。

彼の奇行奇言は内外人の間に有名である。徐亮之という人が書いた「亮齋雜筆」という本にはこう書かれている。簡潔な旧体中国文の面白さを示すためにまず原文をおみせしよう。

「一日、有西人問鴻銘曰、異哉貴國風尚、乃崇多妻。先生有說乎？  
 對曰、君知衆杯翼壺之理乎！壺一而杯衆宜也、夫一而妻多、亦宜也。西人大笑而去。」  
 トワイエー ツユンツツオンベイイフツツリフ  
 フイアルベウオイエー フイアルチドウ イイエー  
 ホンミンシヨウイス  
 レンターシヨウアルチユイ

「一日、西人ありて鴻銘に問うて曰く、異なるかな貴国の風尚たるや、乃ち多妻を崇とぶ、先生説うことありやと。鴻銘笑つて時を移し、因くして對えて曰く、君衆くの杯の壺を翼むの理を知るや、壺は一にして杯衆し、宜きかな、夫は一にして妻多し亦た宜きかなと。西人大笑して去る。」

これだけでは一種の茶ばなしになつてしまふが、これにはあとがある。当時中国にはいやに西洋かぶれして、自国の風習はなにもかも時代おくれで、野蛮で、西洋のものなにもかもよいという——ちょうど終戦直後の日本のような——盲目的西洋崇拜の風があつた。彼はつねにそれにながにがしく思つていた。それ故かれは英文の著書「中国の精神」のなかで、この一夫多妻論にたいする反対者をこうきめつけている。

「クリスト教徒たちは中国の一夫多妻を攻撃しているが、かれらの国で売笑婦のいないところはな。かれらは一晩中自分が妻とした女を、その翌朝わずかばかりの金をやつて冷たい街頭にたたき出し、彼女が生きようと死のうとかまわな。この残酷な制度と、中国の一夫多妻とどちらが人道的であろうか。」

彼は中国の表徴として、死ぬまで辮髪を切りおとさなかつた。これもまた単なるレジスタンスではない。かれは一九一二年に出版した英文の著書「中国におけるオックスフォード運動の話」のなかでこういつている。

「上海の外国人は、新しい中国が袁世凱の下にその辮髪を切り落したので、ヨーロッパ文化



新中国紀行⑫ 広州の八百屋さん。手に持っている長い野菜はキョーリの一種。

を採用したといつて大よろこびである。だがかれらは、新しい中国の採用した文化がヨーロッパ文化ではなく、上海のヨーロッパ文明、ゲーテのいわゆる『アングロサクソンのたいはく文化 Anglo Saxon Contagion』である」とにまったく気づいていない。それは真のヨーロッパ文明の疾病のみが、現在の中国に発展しつつあるのだ。」

一度敗戦を経験した私たちは、この辜鴻銘の気持ちがよくわかる。この国にやってきた欧米人たちは、中国の風習や、中国人の考え方になんの理解もなく、この野蛮国に自分たちのすぐれた文化をおしえてやろうという思いあがった態度があった。国内にもそれに迎合して外国の風習をとりいれることが、中国の近代化だという考え方がはびこっていた。こういう環境において辜鴻銘の国粹主義はうたがいなくある意味をもっていた。外国の生活の末梢だけをまなびとろうとするのは近代化の表現ではなく、むしろ植民地化の表現だったからである。

しかし中国の若い世代は、外国の文化よりもむしろ辜鴻銘の擁護する中国の旧文化に攻撃を集中していた。一九一九年五月四日の新文化運動、いわゆる五・四運動がそれである。

**五・四運動の 闘士とその精神** 五・四運動は中国の近代化を目標とするルネッサンス運動だった。この運動

「試みに中国社会のなかを見よ、食人、掠奪、惨殺、人身売買、生殖崇拜、靈学、一夫多妻等々、およそいわゆる国粹なるもののどれひとつとして野蛮人の文化でないものはないではないか。」(魯迅「随感録」)

中国の古い習慣がこの国の年寄り連中(老輩<sup>ラオベイ</sup>または長輩<sup>ツァンベイ</sup>)や好奇心のつよい外国人からみてどんなになつかしく感じられようと、若い世代(晩輩<sup>ワンベイ</sup>)はそれに愛着を感じないばかりか、それこそ中国の現状をなさけないものにしてゐる原因だと考えている。そこでこの国粹文化の支柱と考えられる孔孟の教えに攻撃が集中された。

五・四運動は陳独秀(中国近代化の功績者、仲甫と号し、中国共産党の創立者の一人となる。老人たちからは排撃されて「陳毒獸」などとののしられた)の編輯する「新青年」雑誌を中心に展開したものだ。陳独秀はこの儒教攻撃の上に民主主義と科学によって新中国を建設することを提唱した。ここに彼の有名なテーゼがある。

「デモクラシー先生を擁護せんとすれば、孔教、礼法、旧倫理、旧政治に反対せざるをえない。サイアンス先生を擁護せんとすれば、旧芸術、旧宗教に反対せざるをえない。デモクラ

シー先生とサイアンス先生を擁護せんとすれば国粹と旧文学に反対せざるをえないのだ。

吾人はこの両先生のみが中国の政治上、道徳上、思想上の一切の暗黒を救済しうるものと考ええる。両先生の擁護に対する一切の政府の圧迫、社会的攻撃と嘲罵はもとより、断頭、流血も敢えて辞するものではない。」

デモクラシー先生とサイエンス先生は陳独秀の用語では徳先生と賁先生であるから、一時徳賁両先生は中国では非常に有名な人物となった。

陳独秀は賁先生（科学）を擁護せんとすれば、旧文学に反対せざるをえないといっていたが、五・四運動でこの方面の活躍者は北京大学教授の胡適である。

中国の古い文章、つまり漢文は、これまで二、三文例を紹介しておいたが、中国人でも特別の教育をうけないものにはむずかしすぎる。中国では、教育が読書階級に独占されていたので、民衆の大半は文盲だ。それ故文章を書くものはただそのなかから官僚を出す読書階級だけを対象としたので、やさしい口語体で文章を書くとしなかった。文章が民衆にわからないようでは科学や民主主義を普及化することはできない。またリアリスティックな小説をかいいたり、社会科学を敘述することもむずかしかった。そこで胡適は「今日の中国は今日の文学を創造しなければならぬ。中国に二千年来あったものはただ死文だけである」として、読みやすく、わかりやすい白話体で文章をかく、いわゆる白話運動を提唱したのである。陳独秀はこれに応じてこういった。

「私は敢然として、全国学究の敵となり、文学革命軍の大旗をかがげ、わが友（胡適）を声援



するため旗上に革命の三大主義を特筆大書するであろう。『曰く陳腐にしてかぎりたてた（鋪張的）古典文学を打倒し、新鮮にして偽のない写真文学を建設せよ。曰く迂晦難渋の山林文学を打倒し、明瞭にして大衆的な社会文学を建設せよ』

この文章のむずかしさ、不明瞭さは、それ自体古文体の影響から脱却することのいかに困難であるかを示している。白話文をいくら提唱しても、白話文で書いたすばらしい文学が生まれないかぎり、白話文は普及せず、その提唱は空念仏におわるおそれがあった。しかしこれも与うるに時日を以てすれば、明るい見透しがあった。

白話文の古い漢文のなかにも、その当時の白話体で書かれたよいものが多い。「詩經」  
こころみ「国風」なども、紀元前二千五百年から三千年前の諸国の民謡をあつめたもの

のだが、その当時の口語文体なのである。たとえばそのなかの「卷耳」の一節はこうである。

陟彼砠矣　かの砠（陰）に陟れば

我馬瘠矣　我が馬は瘠み

我僕痛矣　我が僕は痛む

云何吁矣　云何せん吁

このなかにある瘠とか痛とかいう難かしい文字は、これを病という現在の字にかえれば、その解釈も容易であり、文体も単純である。ずっと下って唐、宋の通俗小説や元代の「水滸伝」「三国志」もまた当時の口語体が基調となっている。口語体であるから、時代とともに多少ずつ変わっ

てくる。たとえば「水滸伝」のなかでよく使われている言葉で「火速」というのがある。意味は「はやく」ということだが、現在の中国語では「快」<sup>クワイ</sup>であるからちよつとわかりにくい。だが上海語では「火速」という言葉は今でもものこつていて、早く早くというときには、火速、火速<sup>オソソ</sup>という。日本人の耳にはこれが「オソソ」と聞える。私は、在留邦人が黄包車にのり、車夫に向かつて大声で「オソソ、オソソ」とどなっているのをきいてびっくりしたことがある。

それ故白話文ではよい文章は書けないというのはうそになる。古文は数千年の間に洗練され、琢磨された珠玉のように、簡潔で含蓄のある言葉をつらねた文章があるから、白話運動の人びとが、白話文を普及するためには、それを上まわるような文章をぞくぞく発表しなければいけない。それを実行したものが魯迅であり、周作人であり、胡適だった。前の二人についてはすでにその文体を紹介しておいたから、ここでは胡適の白話詩をひとつ紹介しよう。

人力車夫

人力車夫

警察法令、十八歳以下、五十歳

以上皆不得為人力車夫。

「車子、車子！」東来如飛

客看車夫、忽来中心酸悲

客問車夫「你今年幾歳？拉車拉

警察の法令、十八歳以下五十歳以上のものはすべて人力車夫たるを得ず

「車屋！車や！」車は宙をとんでやってきた。

客、車夫をみて心にふとあわれを感じた。

客、車夫に問う「君はことしいくつになるね、

ラド シャオス  
了多少時？」

車夫答客 「今年十六、拉過  
三年車了、你老別多疑」

客告車夫 「你年紀太小、我不坐  
你車、我坐你車、我心慘悽」

車夫告客 「我半日没有生意

我 又寒又飢。

你老的好心腸、飽不了我的肚皮、  
我年紀小拉車、警察還不管、  
你老又是誰？」

民國六年十一月九夜

この詩には古詩のもつ美しい韻律はない。だがそれだけにリアリズムがよく生かされている。第一次歐洲大戰がおわり、ヨーロッパのリアリズム文学がこの国にとうとうといってくる、白話文は次第に力を得、やがてはその作品が中国文壇を占領していく。

もうどのくらい車引きをやっているかね？」

車夫、客に答えて「今年十六、もう三年車をひいてます。お客さんなぜそんなにねほりはほり

きくんです」

客、車夫に告ぐ「君は小さすぎるよ、私は君の車にのれない。かわいそうでかわいそうでたまらないんだ」

車夫、客に告ぐ、「私は半日仕事がなかったの  
で、さむい上に腹もへってます。

あなたの善意じゃ腹はくちくなりません。私は  
歳よわで車をひいてますが警察でもなにもいい  
ません、あなたはいいなんですか？」



新中国紀行<sup>13</sup> 西湖畔「花港観魚」にて。楊柳の美しさ。  
湖上をわたる風のやわらかさ。

五四文化運動は、列強の半殖民地的地位にある中国の現状に憤激した青年たちが立ちあがって、まず国内の古い文化を一掃するためにおこしたものである。それゆえ本質的には日本の明治維新と同じように、この国の自主独立をめざすナショナリズム運動であった。それに加わったものも多くはプロレタリア、農民ではなく、ブルジョアや富農の子弟たちだった。陳独秀ははっきりと、「現在吾人がデモクラシーを実行するためには、英米を以て模範としなければならない」といつていた。だが時代がすでに帝国主義時代であり、列強は結局において中国という大市場を失うことになる運動には同情しなかった。それ故五・四運動の指導者は英米のあとを追うことをやめ、結局その後間もなくおこったロシア十月革命とむすびつくようになったのだ。毛沢東は「五・四運動以後における新文化は新民主主義的性格の文化であり、世界プロレタリアートの社会主義的文化革命の一環である」（毛沢東「新民主主義論」）といっている。

城内廟への散歩から話が十分、むずかしくなってしまったが、私も中国人のおくれた生活様式をみるにつけて、中国の近代化が容易でないことがわかりかけてきた。この近代化の鍵をにぎるものが結局中国を支配するにいたるだろう。そして来るべき抗日戦争で国共両党のうち、どちらがその鍵をにぎるかが決定されるだろうと思った。

この年の二月頃中共地区の交通がひらかれると、私の周囲の友人たちはぞくぞくと陝北（陝西省北部、当時紅軍の根拠地がここにあった）への旅に出た。ある日友人の一人で、日本語のよくできる小張（中国では自分より若いものは姓の上に小をつけてよぶ。張さん）が現われて、北方に行くのでいとまごいにきた。わたしはかれのいう北方がどこだともきかなかった。小張の日ごろの言動から大体見当がついたからである。小張は私が上海にきて以来ずっと私に中国語の指導をしてくれた人である。この人が急に居なくなると思うと、自分がこの上海にひとり放りだされたように感じられた。私たちは改まってなにもいわなかったが、お互いにもう二度と会えないことを知っていた。小張は出発までにまだ二、三日余裕があるとはいっていたが、その翌日かれが二人の友人とともに天津行きの船にのったことを知らされた。私は中国人の用心ぶかさに改めて感心させられた。

## 第四章 戦争と中国料理

中日戦争 日中両国の間は、その年の七月にはいると、にわかになだらぬ気配を示し  
前夜の上海 た。一九三七年七月七日北京郊外蘆溝橋で日中両国兵が衝突したのである。

この事件が上海につたわったとき、人びとはいよいよくるものがきたという感じをもった。中国人は「没有法子」(どうしようもない)という諦観からか、案外冷静にこのニュースを迎えた。

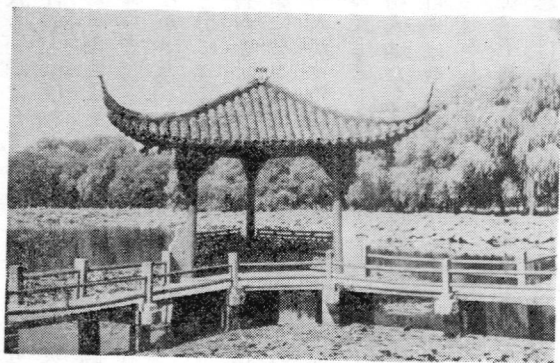
お尻に火がついたように騒ぎたてたのは日本人の方である。上海の日本居留民は、上海の東部「虹口」にかけただけの小さな殖民地社会をつくっていた。その中心地域は、呉淞路、海寧路、乍浦路、文路で、軒並みに日本人商店がならび、日本料理、カフェー、ダンスホールがあり、女郎屋まで揃っていた。それゆえ外国人はこの街をリトル・トウキョウと呼んでいた。ここには日本からふきとばされた人びとが、外国の壁にぶつかり、そのまま穴におちこんでしまったように、二万六、七千から三万ちかくも住んでいた。街全体が経済的にキャンプ・フロアー(軍隊のあとについてその需要をみたす小商人などの群)の性格をもっていたので、戦争には異常な関心があつた。これまでの経験からいえば、戦争は、かれらにとって「発財」のチャンスだったからである。蘆



溝橋事件のニュースが入ると、虹口の全市民は今度は上海でなにか起こるぞと期待しはじめた。

間もなく、八月九日、大山海軍中尉が租界外の道路で中国兵に射殺されるという事件がおこった。そしてその数日後には北四川路をはさんで日中兩軍の間に射撃戦がはじまった。この日は八月十三日だから中国人はこの事件を「八・一三」と呼んでいる。

そのころ、戦場からややはなれたフランス租界に住んでいた私は、その夜一晚中銃声と機関銃のカタカタいう音になやまれた。その上夜通し家のそとを避難民のながれがガヤガヤ通って寝つかなかった。銃声がやんで、ちよつとまどろんだと思うと、八時頃になっていた。亜熱帯の太陽が床の端まで射しこんでいる。窓の外から雑音に混って妙に抑揚のある呼び声がきこえる。耳をすますと、女の声で「要不要小孩子」(子供はいりませんか)と呼んでいるようにきこえる。ヴェランダからのぞいてみると、舗道と車道の間の溝のところに三十歳位の田舎女が、三つ位の男の子を前に座らせ、通行人に子供を買ってくれと叫んでいるのだ。おそらく上海の租界に逃げこめば安全だと聞かされて、ここへきたものの来てみれば知り合いもなく、食べものを買う金もないので、せっぱつまって、子供を売ろうとしていゝものであらう。中国ではこれを「売子」といって戦争や饑饉のときにはめずらしいことではない。「売子買猴」(子供を売って猿を買う——人の思惑はわからない)ということわざもあり、また「売子莫摩頭、摩頭眼淚流」(子供を売るとき頭をなげるな、頭なれば涙がたれる)という諺もある。いま売りに出されている子は前に座っていた。母親は「要不要小孩子!」といいながら、ときどき涙で語尾が消えてしまふ。戦争のむごさをま



さまざま見せられた感じがした。

新中国紀行⑭ 杭州西湖にうかぶ静かな湖心亭。どこをみても広告のみえないのは気持がいい。

空爆をうける  
市街地

その日は朝から中国飛行編隊の爆撃がはじまった。目標は黄浦

江に停泊していた日本艦隊の旗艦「出雲」だったらしいが、爆弾は全部的是はずしたようだ。その日の午後四時頃、再び中国機の来襲があった。こんども出雲をねらって爆弾をおとしたが、その一つは南京路バンドのカセイホテル前に落ちて、約百五十人が即死した。もうひとつの爆弾は私がよくあそびに行った「大世界」の前におちた。そこは避難民がこつた返していたので、この一発で約六百人の死者と一千人の負傷者が出た。

戦場で兵士の間で行なわれる戦争は勇壮に見えるかもしれないが、街や平和の村落のなかにもちこまれた戦争は残忍な人間虐殺以外のなものでもない。この血腥い事件をみて、ふだんおとなしい中国



人も一瞬にして悪鬼のようにたけりたった。租界では日本人とみればなぐり殺した。中国人でも日本人に似た広東人などはひどい災難だった。フィリッピン人もよく日本人と間違われた。日本にも来たことのあるマヨという拳闘家などは、群衆から二度も殴り倒されて、<sup>クワンピンチンチン</sup>広慈病院（金神父路にあるフランスの病院）にはこぼれたが、ふだんから殴られつけているので二度とも命に別条はなかった。

街には恐ろしい流言蜚語（<sup>ヤオユエン</sup>謠言）がとんだ。多数の「<sup>ハンジェン</sup>漢奸」（悪い中国人、国賊）が、日本軍の特命を帯びて租界に侵入し、家々に放火し、井戸に毒物を投下しているという噂である。夫が急病になったので、医者から薬をもらって帰ろうとする婦人が、群衆から呼びとめられた。群衆の一人がその薬瓶の中味は毒薬じゃないかときいた。それが群衆のうしろの方では「<sup>トウヨウ</sup>毒薬！」になつてしまった。そのうちに誰かが「<sup>ハンジェン</sup>漢奸！」とどなった。これで「<sup>ワンラ</sup>完了！」（おしまい）である。婦人はたちまち地上に殴り倒された。あとで事情がわかったときには、婦人はもう冷たくなり、群衆は散つてしまつていた。

しかしこういう民衆の一時的な興奮はながくはつづかなかつた。やがて日本軍の増援部隊がきて、上海の租界の周囲から中国兵を追いはらうと、中国人はもっと冷静にならないといけないと思いはじめた。中国人はこういう場合の利害の打算には機敏である。

占領下上海の 一九三七年十一月十二日、租界は海上をのこして中国の土地から切りはなさ奇妙な繁栄 された。それ以来中国人はなかば詠嘆的にここを「<sup>クオシャンハイ</sup>孤島上海」とよんだ。だが

この名称ほど上海の實質にそぐわぬものはない。上海は決して中国の戦場から孤立してもいないし、また世界から切りはなされてもいなかった。近代戦争が武器の戦争よりも、より多く経済戦であり、思想戦であるならば、中国が日本と戦ったのは奥地よりもむしろこの街のなかの戦場だった。

ここには戦争のはじめ申報、シエンペンバオ、大公报、タイクンペンバオ、新聞報、シンウエンペンバオ、時事新報、スーシスシンペンバオ、立報などが抗日の筆陣をはっていたが、上海陥落と同時にできた日本の新聞検閲制度をきらって、自発的に発行を停止してしまつた。これらの記者たちは以前から発行人の名義を外国籍にしていた大美晚报、タイメイワンペンバオ、大美報、タイメイペンバオ、華美晚报、ホアメイワンペンバオにうつって、再び対日宣伝戦を展開した。

放送界は戦争によって大きな影響はうけなかった。国民政府は直接ここに放送局をもたなかったが、米国系の大美電台タイメイワンエンタイ(放送局)、英国系の民主電台ミンツウデエンタイ、フランス系の法国文化電台が、それぞれ中国語放送の時間を通じて電波の対日共同戦線をはっていた。

こうして各国がばらまく宣伝工作費、各国駐屯兵のおとす金、戦禍をさせてここに逃げこんだ三百万の避難民がもちこんだ金、それらが上海に空前の戦争ブームをおこし、この街に畸形的な繁栄をもたらした。中国人はこの頃の上海の繁栄を皮肉って、上海は「六館の天下」になったといった。六館とは賭館、煙館、飯館、舞館、妓館、殯儀館の六館である。賭館は賭博をするところ、賭博は前からあった競馬場ペンバウマウ(跑馬廳)、ドッグレースペンバウグレース(跑狗場)、ハイアライハイリチムウ(回力球、壁に球をぶっつけ合う後むきのテニスのようなゲーム)のほかに、日本軍の勢力範囲の滬西ヒセ(滬は上海ということ、

上海租界外の西部地区）や南市には、さ、い、こ、ろ、賭博の賭館が続々とできてきた。これら賭館のわきには「戒煙所」とか「談話室」とか、人ぎきのいい名前をつけた阿片吸飲所（煙館<sup>イエンクワン</sup>）が林立していた。舞館<sup>ウクワン</sup>とは大小のキャバレー、そのどこをのぞいても戦時給与で懐のあたたかい各国の兵士たちでいっぱいだった。三流どころのキャバレーが軒なみにならんでいる朱葆三路<sup>フウバオサンル</sup>などは、Bloody Street（血だらけの街）という物騒な別名があり、この辺では各国兵士がダンサーのうばいあいから毎晩のように血の雨をふらせていた。

殯儀館<sup>ビイタワン</sup>の繁栄には若干説明がいる。中国人は誰でも死んだら故郷の土になりたいと願わぬものはない。少し面子<sup>ミエンツン</sup>のある遺族は、貧乏人が一生かかってもお目にかかれないような大金を払っても、死者の遺骸をその故郷まで送りとどける。戦争がはじまり、上海が封鎖されてしまうと、いくら金をつんでもそれができなくなった。そこで運搬のできる日まで死体をあずかる商売が繁昌したわけである。このお客は一度はいったら、部屋をあけることはほとんどないので、殯儀館の場所代はおどろくべき額にせりあがった。

しかしなんととっても戦争に女はつきものの、この方面の需要をみたす妓館<sup>フクワン</sup>はどこもいっぱいだった。戦争で大都会に身一つで流れてきた女たちや、戦争で失業した夫と子供を養わなければならなくなった女たちの行く道が、この方面に大きく開かれていた。街にはかの女らを資本として色々な新商売が現われた。しもた屋にトルコ風呂、マッサージの看板があたり、その下に「女子擦背<sup>ツァーベイ</sup>」とか「女子按摩<sup>ニユイツァンモ</sup>」とか小さくかき加えられる。つまり女の三助と按摩である。この三助が



客をもむのか客にもまれるのかは門外漢のしる由もない。また嚮道社<sup>シヤンダオシェー</sup>という、面白いところに客を案内する女ガイドの斡旋所もできた。ところがここに来るお客は、上海中をすみからすみまで知りつくしたような男だが嚮道女(女ガイド)の方は蘇州あたりの田舎から一、二カ月前にこの街に逃げこんだものばかりだった。それでもこの商売は「生意好来西」<sup>センイハイレシ</sup>(上海語で商売はんじょう、国語では、生意很好<sup>シヨニヘンハイ</sup>)だった。お客たちが彼女らをつれて食事したり、泊ったりする場所が飯館<sup>フアンクワン</sup>である。もつとも飯館には料理専門の菜館<sup>ツァイクワン</sup>または酒家とホテル兼業の飯店<sup>フアンテエン</sup>にわけることができる。上海の百貨店の三階以上は大てい飯店(ホテル)になっている。飯店には食堂があり、もちろん料理をだすが、食通の行くのは菜館や酒家の方である。上海には中国各地方の名菜<sup>ミンツァイ</sup>(名物料理)を専門に調理する菜館が林立しているが、どこも「客満」<sup>ケマン</sup>(満員)だった。六館の天下といっても、ほかの五館とはちよっとちがい、飯館のお客は年齢性別をとわぬ一般性があつたうえ、

新中国紀行⑮ 杭州にて。ピオニールの少年たちが赤旗をもってきた。

もともと中国人は非常な食いしんぼうだけに、とくに「しよんぱいはんじよう生意好来西」だった。

中国料理 中国人が食いしんぼうだというのはなにも私だけの独断ではない。林語堂は「中国の原史時代にすでに飽食の神があらわれたということには象徴的な意味があると思

う。それは饕餮タウチ仙という神で、大昔好んでブロンズや石彫のモチーフにとられたことが今日発見せられている。この饕餮の霊が中国人のなかに宿っている。それが中国薬典を料理書に似たものとし、中国割烹書を薬典のようなものとし、また自然科学の一部門としての植物学や動物学が中国に発達することを不可能ならしめたのである。中国の科学者は、蛇や猿や鰐の肉や駱駝の瘤はどんな味がするだろうといったも考えている。真の科学的好奇心は中国では食道楽の好奇心である。」

これは阪本勝氏の訳文をそのまま借りたもので、ただ「支那」という言葉を「中国」にとりかえただけだ。このなかで饕餮タウチというのは、殷王朝の青銅器の模様としてよく使われている、角のはえた頭だけの怪獣のことである。饕餮とはなにをえがいたものか明らかでないが、一説には黄帝に殺された蚩尤しゆうを形どったものだといわれている。古典によると蚩尤は砂や石や鉄を常食としていた（「蚩尤沙石子を食う」「竜魚河図」「鉄石を食う」「述異記」）が、あまりに貪食だったために、

自分で自分自身を食いつくして頭だけになってしまったという。

林語堂によって饕餮の霊がやどっているといわれている中国人は、悪食の方でも世界的に有名だ。英語で *Tlog-eater* というフランス人のことであるが、蛙をたべるのはなにもフランス人にかぎったことではない。中国人は昔から蛙を色々に料理しておいしくたべている。私は中国ではじめて「蛙」をたべさせられたときのことを今でもよくおぼえている。友人につれられて南京路の広東菜館「新雅酒家」に行ったとき鶏肉よりもずっとやわらかで、口にいれるととろけるような肉料理が出た。骨も小さいので、なにか小鳥の肉くらいに思ったので友人にたずねると、その友人は紙に「田鶏」<sup>ティエンチ</sup>と書いてくれた。田鶏と書くからには「くいな」か「田しぎ」でもあろうかと、なおくわしくたずねたら、その友人はにやにや笑いながら、「実物を見せてあげましょう」といって調理場につれて行き、大きなかめのふたをあけてくれた。なかにがま蛙をすこし小さくしたような褐色のやつがうようよしているのを見たときは、つくづく君子は厨房に近づくものではないと思った。見ぬものきよし（<sup>イェンフカンフエイツェン</sup>「眼不看為淨」）とはよくいったものである。

中国には「田鶏要命蛇也要命」<sup>ティエンチ ヤオミンシエイ エヤオミン</sup>ということわざがある。蛙は命がおいしい、だからといって蛇も蛙をたべないわけにはいかない。自分も生きたいからという意味である。ところが中国人は蛙ばかりでなく、その蛇までたべてしまう。腹のなかで蛇が蛙を消化しているうちに、人間が蛇を消化してしまうというのである。

秋風が吹く季節になると街には「秋風吹来五蛇肥」<sup>ツウフンブライワイシエフエイ</sup>とか「三蛇上市」<sup>サンシエーサンス</sup>（上市とは販売中という意

味」というような招牌（かんぼん）が目につくようになる。三蛇というのは金脚帶、番薯頭、鳥肉蛇ルシェーという三種類のへびで、これを一緒に煮こんでスープようにしたのを「三蛇会サンシェーカイ」という。私も試食してみたが、野菜や鶏肉と一緒に煮てあるので、何がなにやらわからなくなっている。決してまずいものではないが、店のショーウィンドにとぐろをまいている料理材料をみると、二度と食べる気はしない。蛇をこのんでたべるのは広東人であるが、広東人はこういう奇食をするだけあって、昔から中国にはこういうことわざがある。

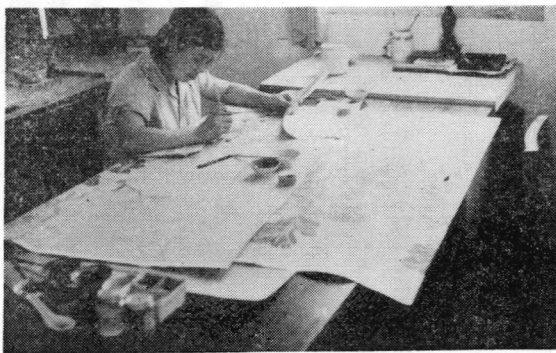
吃在広州 ツァイクワンツァオ 食べものは広州

玩在杭州 ワンツァイハンツァオ 遊ぶのは杭州

穿在蘇州 ツァンツァイスイツァオ 着るものは蘇州

死在柳州 スイツァイリウツァオ 死ぬには柳州

（初めの三行には説明の用はあるまい。柳州は景色のよいところで、その上に棺材によい樹が多いという）  
広東人は蛇ばかりではなく鼠、猫、狸、犬、猿、山椒魚、源五郎虫、ごかい、その他なんでも食べる。鼠は蜜鼠ミスオといって生まれたばかりのはだか子を蜜のなかに漬けたのを箸でつまんで、頭の方からたべるという。生きたままのもたべるそうだが。猫は広東ではよく籠にいて売っているのを見た。犬をたべるのはなにも広東人にかぎったことではない。両漢時代にはみな犬をたべていたようだ。張亮采の中国風俗史に「漢人喜んで犬を食う。故に屠狗のこと。豪傑亦たこれを為す」（同書五三頁）とある。清朝末期の大政治家李鴻章リハンチャンに英国大使が可愛い愛玩犬をおくった



新中国紀行<sup>⑬</sup> 杭州の絹織物工場。下図を書いている女工  
賃金は平均72元（日本円で、10,800円）ということだ。

ところ、翌日李鴻章からつぎのような礼状をうけとったのは有名な話だ。

「昨日の贈物有難く頂戴いたしました、残念ながら小生齒がわるいため賞味できませんでし

たが、いただいたものの話では大へんにおいしかったということです」

しかし今では広東人だけが犬をたべるようにいわれており、「饅頭は狗をこわがり、狗は広東人をこわがり、広東人は饅頭をこわがる」（饅頭怕狗、狗怕老広、老広怕饅頭）といわれている。広東人だつてなにも饅頭がこわいわけではないが、北方人ほどたべないことは事実だ。

中国料理のなかには悪食とまではいかないが、日本人から見ると奇妙なものが少なくない。林語堂は中国料理のもっとも高価なものに欠くべからざる三つの特徴は、色なく、臭いなく、味のないことだといっており、そういう貴重な食物として饜の鰭、燕の巢、白木茸の三者をあげている。

日本でもよく知られている饜の鰭の実体は、鮫類の



鰭をさらしたもので、中国語ではこれを「魚翅<sup>ユイッ</sup>」とよんでいる。燕の巢は南支那やボルネオの海岸にすむ小雨燕という小鳥が、岩壁に海藻のきれはしを自分の唾液とまぜてつくった巢である。その上等のものを「官燕<sup>クワンエン</sup>」といっている。白木耳は四川省に産する寄生<sup>タケ</sup>蕈で、「白銀耳<sup>バイイン</sup>」といっている。これらは値段の高い割りにそんなにおいしいものではない。中国人がそれを貴重品扱いにするのは「補品<sup>ブピン</sup>」といって、あの方面の精力を補う作用があるとされているからである。中国料理はうまいまずいのほかに、その「補品」的作用が重要な評価の水準となっている。そのため前記の三品のほかに強精作用がつよいとされているえび、かに、桂花、竹笋、竹筴、あわびなどがよく用いられている。ここにちよつとした広東料理のメニューをあげてみよう。

#### 四小品

蟹<sup>シエー</sup>黄豆苗<sup>ホワントウミアオ</sup>（蟹のみそともやし）

竹笋<sup>ツシエン</sup>鴨掌<sup>ウチヤン</sup>

（竹笋とは筍を塩づけにして干したものの、または竹筴、竹林にできる菌と家鴨のあしを煮こんだもの）

滑鮮<sup>ホワシエン</sup>蝦仁<sup>シアレン</sup>（えびを油でいためたもの）

炳貼<sup>ビンティ</sup>鱸魚<sup>アールユイ</sup>（すずきを焼いたもの）

以上が前菜である。前菜は四冷四熱といって冷たいもの四品、あついもの四品都合八品が正式とされている。それがすむと本番の料理になる、すなわち

紅燒魚翅<sup>レンシャオユイッ</sup>（ふかのひれを煮たもの）

干焼鮑片 (あわびの焼きもの)

焼全乳猪 (小豚のまるやき、こったものは小豚の眼玉に豆電球をひかせている)

清燉全鶏 (にわとりをスープで蒸したもの)

干煎大蝦 (大蝦を煎りつけたもの)

雲腿螺片 (ハムとさざえを炒めたもの)

広肚焼水魚 (魚の胃袋とスッポンを煮たもの)

珊瑚鴿甫 (かにのみそとはとのにく)

清蒸海鮮 (海魚のスープ煮)

鮮奶杏露 (杏とミルクの甘いスープ)

伊麵点心 (おそばと饅頭など)

楊州炒飯 (ごもくやきめし)

江南の蟹と 江南に菊の秋がおとずれ、蟹が市場にでるようになると、食通は広東料理な酒のはなし には目もくれず蟹にとりつかれたようになる。この蟹は中国語で螃蟹とい

い、日本のもくぞう蟹の大きくしたもの。江南の湖沼ではどこでもとれるが、蘇州にちかい陽城湖——洋澄河とも書く——のものが最上とされている。蟹料理には卵と一緒に炒った芙蓉蟹、蟹の肉を細かくして白菜のやわらかい芯と一緒に煮た蟹粉菜心、その他木犀蟹(木犀、もくせい、俗に桂花という)。白切蟹などいろいろあるが、食通のもっとも賞味するのは醉蟹である。こ

れは小壺に老酒と醬油をいれ、そのなかに生きた蟹をいれて密閉し、三週間ほどおいたものである。食するときには、これを取り出して甲羅を腹の方からパッキリあけ、長い箸で甲羅のなかの老酒のしみた卵黄をつつきだすのだ。もちろん老酒をちびりちびりやりながらである。

老酒というのは日本酒と同じように米からつくった酒である。中国の酒は米または粟からつくったのを黄酒といい、高粱からつくったのを高粱酒または白乾酒という。上海人のすきなのは黄酒、それも浙江省紹興の米からつくった老酒だ。紹興は魯迅の故郷で、かれの小説の背景となっているところである。魯迅は紹興について、「酒屋にて」（在酒楼上）のなかでこういう文章を書いている。

「私はいささか哀愁を帯びて、だがそれでも非常に気もちよく、一氣に酒を呷った。この酒の味はとても醴醇で、油豆腐もまたよく煮えている。惜しいかなからし醬油がうすぎる。

S 町の人々はもともとの味の味がわからないのだ」

「我略帶些哀愁、然而很舒服的呷一口酒。酒味很純正、油豆腐也煮得十分好、可惜辣醬油太淡薄、本来S城人是不懂得吃辣的。」

魯迅の友人であり、かつまた私の友人——といたいのが実はまだ四回しかあっていない——の曹聚仁氏も、その「魯迅評伝」のなかで、紹興酒についてこう書いている。

「紹興老酒はなぜ特別に味がよいのだろうか。それはここの湧き水が清冽で、酒づくりの技術がうまいうえに、ながい年月をかけて酒の火性を醴醇さにかえるからである。葡萄酒の味



新中国紀行<sup>①</sup> この橋の名は外白渡橋（外国人だけはただで渡れる橋）むかしの上海のガーデンブリッジは中国人だけから渡料をとったところからこう名づけられた。

はまろやかさがすぎ、高粱酒、茅台酒、汾酒、大麵竹葉（いずれも銘酒の名）はみなからくて刺激性がつよすぎる。ただ紹興酒だけは醴醇で、一口のむとまたかさねてのみたくなるのだ。」

日本でも酒は憂いの玉簪木というが、戦争で明日どんな運命が待っているかわからない中国人には、この玉簪木はなくてはならぬものだったにちがいない。かれらはおそらく「今朝酒あれば今朝酔わん、明日愁来れば明日憂えん」（今朝有酒今朝醉、明日愁来明日憂）という気分でのみまくっていたのであろう。

上海料理は豆腐や黄花魚などをうまくつかうのが特色で、広東料理のようなけんらんさはない。中国のことわざに「うまいものはやはり家庭料理」（好吃還是家常便飯）というのがある。上海料理はこの家常便飯の味があるのだ。上海人が大すぎなのは魚料理で、黄花魚（ぐち）鳳尾魚（えつ）鰻魚（かわめばる）鮳魚（ひらこのしろ）をこのむ。しかしなんといいてもかれらが天下の美味と考えているの

は上海のちかく松江に産する鱸魚である。蘇東坡の後赤壁賦に「網をあげて魚を得たり、巨口細鱗松江の鱸の如し」とあるのが、この鱸魚である。といってもすずきではない。カジカ科の、だぼはぜを大きくしたような魚だ。四腮鱸といって腮が二重になっていて四つあるように見えるのが最上とされている。

鳳尾魚というのは大きき三寸位で、口がなまずのように大きく、腹が銀白色で、それに鳥のしっぽのような細い尾がついている。腹には白い米粒のような卵をいっぱいもっていて、口に入れると飯だこでもたべるような感じがする。

貧乏ぐらしの私がのんきに中国料理の品さだめをするようになったのも、中国語のおかげだった。戦争がはじまると、私程度の中国語でも結構役にたった。日本軍の占領地にとりのこされた物資の搬出などで口をきいてやると、思いもかけない大金がはいつてきたからである。私の貧乏生活はこの頃でやっとピリオドがうたれたのだ。

## 第五章 中国の農村

農村にひろがる  
排日運動

戦争が上海からはなれて、奥地へ奥地へと進展していくにつれ、日本軍により、南京の下関で行なわれたそれである。そこでは数万の捕虜が、棧橋にならべられて機関銃で掃射された。ときにはわざと楊子江に向って逃げさせ、後からボンボン追いうちにした。動くまゝの方が打ち手にとって興味があるというわけだ。やっとの思いで江にとびこんだ捕虜たちには、小舟からの無慈悲なねらい打ちがまっていた。

中国人は昔から「一人が十人につたえ、十人が百人につたえ」(イレツツァン<sup>イ</sup>、シレンツァン<sup>シ</sup>、百人伝百)という特殊な通信法をもっている。日本軍の残虐行為はたちまち全国にひろがり、中国人の敵愾心をいやが上にもたかまらせた。そしてこんな残虐なことをやる日本人と、講和などできるもんかという気持ちにしまったのだ。

日本の軍部は、国民党政権の地盤は南京、上海であるから、この地域から蒋介石が追いだされれば、その政権は頭をさげて軍門にひれふすか、それとも地方政権に転落するかであろうと考え



ていた。それゆえ南京占領が事変処理の一応の目安だった。杜甫の詩に「人を射んとせばまず馬を射よ、賊を擒えんとすればまず王を擒えよ」(射人先射馬、擒賊先擒王)<sup>シエレンシエンシエマ、チンツエシエンチンワン</sup>というのがある。

日本では南京こそ蔣ののっている馬だと考えたのだ。だがこの見込みは見事はずれた。上海、南京という地盤を失った蔣介石政権は、もはや全国国民の広汎な支持なくしては存在しえない政権になってしまった。それゆえ蔣介石が南京にいたときなら、中日関係の平和的解決も多少の望みがあったが、それ以後はほとんど期待できなかったのだ。このとき誰かがいった。中国はよく竜にたとえられるが、竜は鰻のような形をしているから、やはり頭をおさえなければつかまるまい。南京という頭がなくなった現在、日本がいくら漢口、広東、太原の占領と、それからそれへと手をひろげても、時局の処理にはなんの役にもたない。

事態はまったくそのように発展していった。日本は次第に、都会と鉄道、つまり線と点だけではなく、これらのものがそのなかに存在する面積、いふなれば、農村が無限につづく広漠たる中国の大地を相手にする泥沼戦争に足をふみこんでいった。

中国の農村のあり方を説明するためには、まずこの大地の悠久な歴史について語らなければならぬ。

## 皇 帝 と

### 農民たちの祖先

中国人がこの国の原住民であるか、それとも他の地方から移ってきた人種であるかは議論のある問題である。しかし少なくとも今から五、六十万年前に現在の北京の周辺に、人類学上「北京原人」*Sinanthropus Pekinensis*(嚴格にいえばほんとの人間、ホ



新中国紀行<sup>18</sup> 上海第一の大通り、南京路。

モサピエンスにはまだなっていなかった）といわれる原始的な人間が住んでいたことは確実だ。北京郊外の周口店からその骨格が化石となつて出土した話は有名である。だが北京原人が現在の中国人の祖先であるかどうかは未だに証明されていない。

フランツ・ワイデンライヒという学者は「北京原人は現中国人の遠い祖先であるばかりでなく、これと蒙古人種の間には直接の発生的関係がある」と結論している。しかしテリアン・ドウ・ラクーベリという学者は、中国古代の天文の知識がバビロンのそれによく似ていることから、漢民族はバビロニアのどこから、移動してきたものと主張している。これは十二支の本名はバビロンの十二カ月の名称から出たものであり、また中国の伝説で文字の発明者といわれる蒼頡そうぎつの古い発音は *Dunkit* であるから、それはカルディアのウルの王 *Dungi* にちがいないといっている。これはどうもわれわれ素人がみてもいいささか「牽強附会」<sup>チエンチヤンフカイ</sup>（日本語でも同じ、こじつけ）



の感があつていただけでない。こういうのを中国では「胡説八道」<sup>フシユオバダウ</sup>（いいかげんなことをいう）という。しかしそれはともかく中国の古い伝説からみて現在の中国人の祖先が、西方のどこかから中国にはいつてきたことはたしからしい。

史記——前漢司馬遷（紀元前一四五—八四）が書いた史書——の「五帝本紀」は、当時中国にわたつていた伝説の帝王たちの事蹟を整理して、司馬遷が敘述したものであるが、その第一章は黄帝にあてられている。黄帝は今でも中国人がよく、「我々はみな黄帝の子孫」<sup>ウオームランドシホワンタイ</sup>（我們都是黃帝的子孫）<sup>タツツオン</sup>というように、中華民族の祖先と考えている。

古典漢字の莊重さを重んじて、五帝本紀第一のその部分を逐字訳にしてみよう。

「黄帝は小典の子なり。姓を公孫、名を軒轅<sup>けんえん</sup>という。——神農氏の世衰へ諸侯相侵伐<sup>あいにんばつ</sup>し百姓に暴虐<sup>しやく</sup>す。而るに神農氏征すること能わず。是<sup>こゝ</sup>において軒轅<sup>けんえん</sup>乃ち干戈<sup>かんか</sup>を用いることをなり、以て享<sup>した</sup>がわざるを征す。諸侯咸<sup>みな</sup>来り賓從<sup>ひんじゅう</sup>す。而して蚩尤<sup>しゆう</sup>最も暴をなすも、よく伐つことなし、炎帝諸侯を侵陵<sup>しんりやう</sup>（暴力で従わせる）せんと欲するも諸侯咸<sup>みな</sup>軒轅<sup>けんえん</sup>に歸<sup>した</sup>がう。軒轅乃ち徳を修め兵を振<sup>とと</sup>のえ、以て炎帝と阪泉の野に戦い三戦して然る後に其の志を得たり。蚩尤<sup>しゆう</sup>乱を作<sup>な</sup>し帝の命を用いず。是<sup>こゝ</sup>に於て黄帝乃ち師<sup>せん</sup>を諸侯に徴し、蚩尤<sup>しゆう</sup>と涿鹿<sup>たくろく</sup>の野に戦い、遂に蚩尤を禽殺<sup>きんころ</sup>す。而して諸侯咸<sup>みな</sup>軒轅<sup>けんえん</sup>を尊びて天子と為す。神農氏に代わる、これを黄帝となす。」

これをみてもわかるように、黄帝は名を軒轅といい、はじめは帝王ではなく、神農氏炎帝の下

にいた。ところが、炎帝の武徳がおとろえ輩下の諸侯が従わなくなり、民衆は非常に虐待された。炎帝はそれをみながらうすることもできないので、軒轅がたつて諸侯を統率してしまった。炎帝はそれを快よく思わず軒轅側の諸侯に圧迫を加えたので、軒轅と炎帝との間に戦いがおこった。これが阪泉の野の戦であり、その結果軒轅は炎帝をしがえて帝位についた。しかしひとり蚩尤だけはひきつづき黄帝に反対したので、これを涿鹿の野で擒殺した。ここにおいて諸侯は心から軒轅を尊んで天子とあおぎ、炎帝にかえた、というのである。

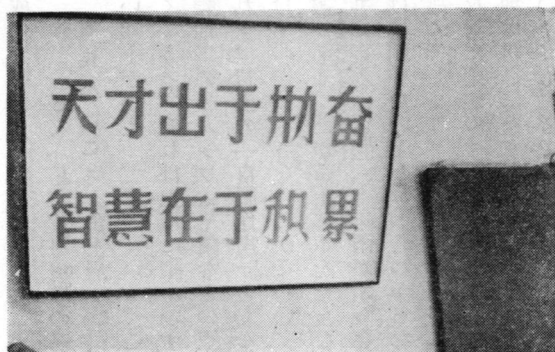
現代中国の歴史家は、史記はもちろんそれ以前の古典の記載を考古学の出土品その他から検討して、だいたいこの伝説のようなことが実際に行なわれたと信じている。しかし解釈は少しちがう――

今からほぼ五千年前、陝西省の岐山地方に住んでいた諸部落の聯盟に炎帝という指導者があった。もちろん、帝といっても後世の帝王のようなものではない。帝の古字は𤣎または𤣎、上部の二は示<sup>しめす</sup>という字の説明のときのべたように上の字であり、天を意味し、崇高を意味する。二の下の方の字は束<sup>ツク</sup>という字で、発音を示すものだという。〔説文解字〕「从二束声、二古文上字」(二に従う束は声なり、二は古文の上字。)しかしアルフレッド・フォルク博士は、帝の古字には氣(「金石韻府」というのがあるから、これはむしろ垂れ下がった式服をきた人の形ではないか、と見てゐる。つまり祭祀を司どる一族の上長を意味することはまちがいない。また帝王の王という字は一と土の合わせてできた字である。土、即ちその地域のことで、その第一人者という意味で、

これはドイツ語の First (君侯) (英語にはいつて First になる) と同じである。

さてこの炎帝が配下の部族をつれて、渭水、黄河にそって東漸し、現在の河南、山東、河北の境界地帯についたとき、その土地に住んでいた九黎部族聯盟と衝突した。九黎部族聯盟の聯盟長は蚩尤という非常な豪傑だったので、炎帝の部族は蚩尤にやぶられた。そこで炎帝はもともと血縁関係のあった黄帝のひきいる、もう一つの部族聯盟に救援をもとめた。黄帝の部族は以前は陝西省北部にいたのだが、当時はすでに河北省懷県一帶に移住していたのだ。かれは蚩尤にやぶられた炎帝の部族を收容し、南下してきた蚩尤部族と大いに戦った。この戦いは「黄帝蚩尤と九たび戦いて九たび勝たず」(「太平御覽卷十五」) というような苦戦だったが、結局蚩尤部族を征服し、蚩尤を捕殺することができた。黄帝の部族は次第に周囲の諸部族を統合しつつ、黄河流域の広い地域に発展していったのだ。伝説によれば、黄帝はのちに国家統一を記念して、銅で宝鼎をつくり、天上、地上の神々をあつめて大宴会を催したとき、一匹の黄龍にのって天に舞いあがったという。

龍という動物は西洋のドラゴンとはちがい、中国独特のものだ。これはよく中国人の想像の動物であるといわれるが、実は各部族が融合するとき、それぞれのトーテム(本来はアメリカ・インディアン語で、動物神を意味する、中国語は圖騰の字をあてている)があつまってきたものである。中国の諸部族がアメリカ・インディアンなどと同様に、トーテム神をもっていたことには色色な文証がある。単に史記だけを見ても「女媧氏、風姓、蛇身人首」とか、「炎帝人身牛首」と



新中国紀行<sup>19</sup> 上海少年宮の教室の標語。「天才は勤勉と奮斗から、智慧は積み重ねから」とある。

か「軒轅、熊、羆、貔、貅、貙、虎を教え」とかいう文章がみえるが、これはそういう動物をトーテムとする人間または部族を指していったものとみるべきである。熊、羆などはそれぞれ熊族、羆族

と解して、はじめて意味がある。蛇をトーテムとする部族と、羊をトーテムとする部族が結合したとき、そのトーテムは、頭部に山羊の角とひげをもつへびになる。それに虎をトーテムとする部族が加われば、更に虎の牙がはえ、足がえがかれる。それにわしの部族が融合されると蛇体にわしの爪がはえた足をもつ動物ができる。こうして龍という怪物が生まれたにちがいない。またおそらくこういう過程を通じて中華民族は統一され、各部族の総合トーテム神として龍が天子の表徴になったのであろう。

やがて黄帝の子孫たちの人口は殖え、黄河流域の黄土層の上に一大部族国家をつくるようになった。伝説は黄帝からずっと後に堯、舜、禹という有能な部族長が相ついででたことをつたえている。最後の禹は父鯀の失敗した黄河の治水にいでんて、これを

成功させた。

## 黄土と

農民のころ 黄河流域の農業において治水は特別の意味をもっている。この地帯の土壤は黄土層 Loess といって、ゴビの砂漠から西北風によつてはこばれてきた細かい塵土がつもつてできている。この土層は適当な水さえやれば、肥料はやらなくても作物がよくできる。それは土壤に細かいすき間があり、毛細管現象で地下水を上方に吸いあげるが、その際地下のカルシウムや燐などの肥料分を耕作に適当な分量だけ表土にはこびこむからである。これを、黄土の「自肥作用」とよんでいる。それゆえ「只怕懶漠不耕、那怕黄土不生」<sup>（ナバーハワントクシヨウ）</sup>（ただなま

けものが耕やさないのがこわい。黄土は耕やしさえすれば作物ができないはずはない）という農諺がある。だが黄土に水をやらなければかわききって作物が枯れてしまう。そこで「十年不下雨、<sup>チウニエンベンフアイウオ</sup>九年半不挨餓」<sup>（スニエンフレイヤイ）</sup>（十年雨がふらなければ九年半ひもじい思いはしない）という言葉がある。これは説明がないとちょっとわからない。北方では半年雨がふらないと、農民は作物がとれないので死んでしまう。それ故十年雨がふらなければ九年半はひもじいおもいをしないですむのだ。その

反対に雨が多すぎて洪水になると黄土層の肥料分の多い表土があらわれるから、たちまちその土地は耕作に適さないものになってしまう。したがって農民の生活は黄河の治水にかかっているといても過言ではない。

禹はこのように中国農民の生死をにぎっている黄河治水の過程において、民衆を全国的共同労働に動員する絶対権力を獲得した。やがて禹とその周囲のものは次第にそれを自己的目的のため

につかひ、巨大な財産をつみあげ、夏王朝の基礎をつくった。部族国家はここにくずれ、絶対専制主義の王朝時代がはじまったのである。

爾来中国の王朝は、農民にかわつて治水工事を統制し、農民を治水の任務から解放したばかりでなく、やがてあらゆる全国的行政的任務から解放したのである。だがそのかわり農民は王朝の絶対權威をみとめ、その指揮に服従しなければならなかった。しかし農民達は王朝の命ずる租税をおさめれば、国家のことは一切没有關係（関係なし）で、自分たちのすんでいる村落内でかれらだけの自由な社会生活を営むことができた。それゆゑ、中国のことわざは「老百姓納了糧、便是自在王」（百姓は糧食を納めてしまえばすなわち自由自在な王様である）といっている。つまり国家は国家、民衆（老百姓）は民衆、それぞれが別箇の生活をしていたのだ。このことは日本のシノロギー（支那學者）の間ではかなり古くから知られていた。たとえば稲葉君山博士は、

「支那人のこの長い歴史の推移によつて得た経験は何物であるかというにそれは外でない、国家と社会との分離であると考えられる。国家は国家、社会は社会であつて、社会は国家に何ら期待を持たない。」

といっている。

また長谷川如是閑氏は

「この里の社会（老子のいわゆる小国寡民の村落共同体）は支那の歴史の興亡と没交渉に、堅固無比の社会形態として、数千年を通じて社会生活の単位を形作っていた。——支那の国家は

人民の生活や産業に対して保護誘掖の途をとったことなく、ただそれから収奪していただけであって、村落自治体は全く自治的に生存する外はなかったのである。」

この国家と社会の分離から当然考えられることは、国民の間に全国的な国家という觀念が欠除していることである。こういう事情を知らない外国人たちは、それを中国人特有の先天的性格 Chinese characteristics とみて、中国人には愛国心がないとか、公共心がないとか勝手な評価を下していた。この方面の権威者にアーサー・H・スミス (Smith, Arthur Henderson 1848—1932) がある。この人は一八八〇年に米国から山東にわたり、ロンチャーツアン 龐家莊という農村の教会で伝道に従事してきた宣教師で、当時の中国について多くの著書をのこしている。今この人のあげているいわゆる「中国人的性格」の若干をここにとりあげてみよう。

かれによれば、中国人には「公共」という觀念が全然ないという。雨がふって自分の土地の土が流されれば平気で道路の土をけずりとってくる。こうして道路は次第に低くなり、雨がふれば道路は小川のようになる。中国には、嫁もながい間辛棒すれば姑になれるように「道路も千年たてば河になる」という諺があるそうだ。その小川が自分の畑の土地をけずり取らないかぎり「ムーカン 有關係」(かまわない)、中国では人びとは自分だけのことを、政府は政府で自分だけのことを考えているといつて、このうのべている。

「熱帯農園に働く黒人が、『人は銘々自分のことを、神様は私共一同のことを』という諺を聞いて、自分で再び言いなおしたときにはその思想のこまかな陰影をあやまり、次のように



新中国紀行<sup>20</sup> 上海の紡織工場入口。標語は「アメリカ帝国主義反対」。

いった。『人々は銘々自分のことを、神様は神様で自分のことを』この新式の諺のうちに、一般中国人の政府当局にたいする見解の神髄が含まれている。』（同氏「中国の農村生活」）

かれは、中国人の公共事業にたいする無関心の基調はすでに「論語」の「子曰く、其位に在らざれば其の政を謀らず」（子曰<sup>ツイエ</sup>。不在<sup>ブツアイ</sup>其位<sup>ツウエイ</sup>、不謀<sup>ブマウ</sup>其政<sup>ツツエン</sup>。）に表われているという。そして「一体中国人に愛国心があるかどうか」といって、その実例として、一八六〇年英仏軍の北京攻撃の際、イギリス軍が山東省で中国人から驟馬を買って、軍用に供したことや、山東で雇った中国人が、外国連合軍のためにもっとも必要な苦力労働をしたことをのべ、「これらのことは愛国心なり公共精神なるものが、たとえ中国に存在するにしても、アングロ・サクソン人のそれと同じ意味でないことは理解するに難くない。」といっている。

これらのことは四千年も前からつづいていた中国政府と農民の関係を考えれば別に不思議ではない。



どんな王朝時代にも中国の全国民が一つの民族であるという自覚に到達したことはなかった。国民がお互いに同胞感をもつためには、かれらがまず各自の属する小さな社会から解放されて一個の人間としての自己に目覚めなければならぬ。それが近世の「個の発見」で、それからばらばらにされた個人が再び血と文化を等しくする民族に再組織される。それが近世の民族主義国家である。これまでの中華民族は民族の自己意識に到達しない民族、ドイツ人のいわゆる Volk an sich (即自的民族) で、まだ自覚的民族 Volk für sich (対自的民族) になっていなかった。孫文が中国は「散砂の如し」(一盤散沙) <sup>イベンサンシヤ</sup> といったのもそのためである。愛国心がない、公共心がないということは、実は中国人の性格ではなく、政府と農村社会のこれまでの関係から生まれた現象にすぎない。この関係が是正さればそういうことは当然なくなる。それゆえすでにあげた以前の格言「各人自掃門前雪、莫管他人瓦上霜」<sup>クオレンツ サオメンチエンシユエー モクワンタレンワ シヤンシヤン</sup> (既出) は、現在の中共では「我為人人、人人為我」<sup>ウオウエイレンレン レンレンウエイウオ</sup> (私は人々のために、人びとは私のために) とか、「公而忘私」(公事のために私事を忘れよ) とかがそれにかわっている。もっともこれは理想をいったもので、これがそのまま現実とは思えないが。

戦下の中国農村 抗戦が奥地に進んで行くにつれて、それまで封鎖的な生活をいとなんでいた奥地の農村社会は、いやがおうでもそれに関与しなければならなくなった。

日本軍の中国の老百姓 (一般人民) <sup>ラオベシ</sup> にたいする残虐な行為がしれわたっていたので、日本軍が農

村にちかづく前に、村の地主や富裕な農民、つまり農村の金持ち（有錢的<sup>ユーチエント</sup>）は大あわてにあわてて（中国語ではこういうのを「手忙脚乱<sup>シュオマンチャラン</sup>」反対に大よろこびを「手舞足蹈<sup>シュオワツタオ</sup>」という）、付近の都会ににげこんだ。大金持はそれよりずっと先にもう外国租界のある上海、漢口ににげこんでいた。あとにのこったのは土地のない小作農や、土地はあってもそれを耕してただけでは食えないような小百姓ばかりである。かれらはその土地を離れては生きる道はないので、その土地がどんなに危険でもそこにとどまらなければならなかった。実は中国の農村にはこういう農民、いわゆる「一貧如洗<sup>イビンルシ</sup>」、家になにひとつない貧農が農村人口の大多数だったのである。

太湖南岸の一村落で、五年間実地研究をやっていた費孝通博士（中共、清華大学教授、一九五六年十月、國務院專家局副局長になる）は、その村の土地所有関係について、所有地五〇畝<sup>ムーオ</sup> 七〇畝<sup>ムーオ</sup>以上のものは、全農村人口の〇・六パーセントしかないといっている。その他のもののパーセンテージと一緒にこれを表にしてみると――

五〇畝―七〇畝以上	〇・六%
三〇畝―四九畝	〇・七%
一五畝―二九畝	〇・九%
一〇畝―一四畝	四・〇%
五畝―九畝	一八・〇%
〇畝―四畝	七五・八%

つまりその村でまったく土地のない、または土地はあっても四畝（わが国の二段六畝、中国の一畝は六・六畝）に達しない農家は全村落人口の九三・八パーセントを占めているのである。これらの小作農は土地収獲の四〇―五〇パーセントを小作料として地主におさめているが、ここは非常に安い方で、四川省などでは土地収獲の七〇―八〇パーセントをおさめていた。

地主は農村人口のわずか一―二パーセントにすぎないが、これらの地主が戦禍をさせて都会ににげだしてしまうと小作農は地代をおさめる必要がなくなるので、本来なら大だすかりなわけである。だが実際はそんなわけにかなかった。地主の去った農村には、政治的真空地帯が生まれた。というのはそれまでの農村の政治は地主とその代表者の手にあったからだ。この政治のありかたがどういうものであったかはぜひ知っておく必要がある。中国に今日共産党政権が生まれた理由もそこにあるからである。

中国共産党首席毛沢東は、かれの有名な「湖南農民運動考察報告」のなかで、それについてこう説明している。

「中国の男は普通三種の系統的権力支配をうけています。（中国的男子、普通要受三種の系統的権力的支配）すなわち（一）一国、一省、一県、一郷の国家系統によるもの（政権）

（二）宗祠（宗族及び支族の廟祠）と家長の家族系統によるもの（族権）（三）閻魔大王、城隍

廟の神様から土地菩薩のあの世系統と、玉皇上帝及び各種のあやしげな神仙系統——これを総称して鬼神系統によるもの（神権）であります。女子にいたっては、上述の三種の権力の



新中国紀行② 好好学习。「しっかり学習しよう」日本のお客を迎えて拍手する上海の少年宮の少年少女たち。

支配の外にさらに男の支配（夫権）をうけています。（至於女子、除了上述三種權力の支配以外、還受男子的支配（夫権）。）この四つの權力——政權、族權、神權、夫権は全部

の封建宗法的思想と制度を代表します。それは中国人民とくに農民をしばっている四すじのきわめて大きな綱なのであります。農民がどのうに地主の政權をおしたおした（推翻）かはすでにのべました。地主政權は一切の權力の根幹であります。地主政權がくつがえされれば族權、神權、夫権はみなそれについて動揺はじめるのであります。」

農村の地主政權が倒れば、中国農民をおさえていた支配力がなくなり、貧農が解放される、これが毛沢東の考え方だった。そこで毛沢東は貧農を中心に農民協会をつくり、それに農村の政治を行なわせようとした。かれは農会の盛んなどころでは、以前長老たちが農民にたいして行なっていた「尻打ちの刑（打屁股）」「淵にせずめて溺死させる刑（沉潭）」



政権をたてて占領地区を統治させ、その共產化を食いとめようとした。国民党の方も農村に、国民党系の遊撃隊や秘密工作員を派遣して、農村が汪精衛の勢力下にはいることを防止するとともに、共産党の勢力を農村から追い出そうとした。各派のかような動きは農村の事態をますます複雑化させ、農民をますます苦しめる結果となった。

「共」「和」「国」 私は中日戦争が太平洋戦争の一部に発展してから、上海で一番ふるい「申になった中国報」という新聞に「吉田東祐」というペンネームで毎週一回評論を書くようになった。

当時上海は日本軍の言論統制下にあったので、日本軍や汪精衛政権を批判する文章の発表は許されなかった。だが私の評論は中国人を対象にして、華文で書かれていたので、検閲にも相当の目こぼしがあった。私はこの間隙を利用して、占領下の中国民衆がなんで一番苦しんでいるかをかなり大胆にとりあげた。

なぜそういうことができたのか。申報という新聞は上海では百年以上の歴史のある新聞で、史良才という前の社長は、上海資本家を代表して蒋介石にはげしく反対し、ひとつの反蔣勢力をつくっていたが、蒋介石の暴力組織の藍衣社に暗殺されてしまった。私のいた当時はその史良才の秘書をやっていた、陳彬龢ちんひんわという男が社長としてこれを経営していたのである。陳は蒋介石を憎んでいたので、日本軍の下でも反蔣の筆陣をはっていたのだ。とはいえ彼は汪精衛にも反対していた。かれはただ占領下にある上海市民の利益をまもるために新聞をつづけるといっていた。当

時占領地区には汪精衛の和平救国軍と、蔣介石の国民党軍と、共産党の新四軍が、それぞれ根拠地をつくっていて、農民はそのいずれにも収奪されていたのだ。上海を離れること数里の田舎では「共」産軍、「和」平軍、「国」民党軍の三軍隊が支配していた。それ故中国人はいまや中国はほんとうに「共」「和」「国」になってしまったといっていた。

当時の民衆は、共産党の八路军や新四軍よりも国民党軍、すなわち蔣介石の中央軍びいきだったようだ。民衆の間にはこういう言葉があった。「中央軍買來吃、游擊隊搶來吃、八路军騙來吃」この意味は「中央軍は食料を買ってたべる、游擊隊は奪ってたべる、八路军は民衆を騙してたべる。」共産軍が民衆をだますというのはうまい宣伝のもとに「救国公糧」を徴集していたからである。この言葉は国民党の方で流した流言ともかんがえられる。和平軍は一番評判がわるく「和平軍は金を要求するが命は要求しない、(要錢不要命)、新四軍は命はとるが金はとらない、(要命不要錢)といわれていた。また「和平軍は奪って食い、新四軍は騙して食い、一般人民は食うに食えない」(和平軍槍得吃、新四軍騙得吃、老百姓没得吃)ともいわれていた。それゆえ日本軍の占領地で中央軍のいないところでは、新四軍や八路军が和平軍を駆逐して次第に根拠地を拡大していったのである。

日本軍が国民党軍を撃破して遠くへ遠くへと追っていけば、背後の占領地区はますます大きくなる。だがそれはただ中国共産党に手をかして、その根拠地を拡大してやるようなものだった。それゆえ戦争がながびけばながびくほど、事局收拾がむずかしくなるから、できるだけ早く中国

政府と講和しなければならぬと考えざるをえなかった。当時中国共産党はまだ政権をとっていないし、また近い将来政権をとるとも考えられない情態にあったので、中国との講和という場合には対象は蒋介石政権以外にはなかったのである。こうして私は当時日本の国策だった汪精衛政権による事変処理政策に反対して、いわゆる「直接交渉」派の最前線にたつて、その実際工作にたずさわるようになっていた。

中国語の学習

第六章

中国語の世界——材料集





## 第六章 中国語の世界——有教無類



### 中国語の方言

蒋介石の国民政府と直接和平交渉の衝にあたり、市井の熊さん八つあん（張三李四）とはちがった、知識分子と接触するようになると、自分の中

国語の勉強法が間違っていたと思うようになってきた。日常会話によく使われる中国語の発音は、中国人と同じように自然だったが、平常あまり会話にでない単語を使おうとするときには、四声に自信がもてなくなり、よく会話がつまってしまう。やっぱり中国語は四声から基礎的に勉強しなければならないと思った。

家庭教師をたのんで四声からやりなおそうとしたが、私の上海なまりの発音がかたまってしまっていたので、先生からとてもなおるみこみがないと思われたのか、あなたのは今のままで通用しますからと、体よくさじをなげられてしまった。しかし北方人のはなすうつくしい抑揚の北京語をきいたあとなどは、もしもあんなにうつくしい中国語がはなせたらどんなに楽しいだろうと思った。

広東人や上海人のはなす国語は、中国人の間でもききぐるしいものと考えられている。北方人

は南方人のはなす国語のことを、「この世になにも恐いものはないが、ただ南方人に国語をはなされるとおぞけをふるう」〔天不怕、地不怕、只怕南方人講官話〕といっているくらいだ。それもそのはず北京語と上海語・広東語の間では発音がまるでちがう。たとえば「私はあなたがすきだ」というのは北京語では「我愛你」であるが、上海語では「アラ・エ・ノン」広東語では「グオー・オイ・ネイ」だ。

それゆえ広東人が国語を話す場合に愛と発音しようと思っても「オイ」がかってくるのはやむをえない。上海語は一語一語の音がつまっているの、よほどうまく国語をはなす上海人でも、言葉の一語一語の発音が寸づまりでせつかちにきこえるのである。たとえば北京語の小孩(子供)は上海人は小孩シヨハイという。小に抑揚をつけず日本語のように小シヨと発音する。同様に好グイは好ヤになる。上海語は関東弁で、北京語は京都弁のようなものだ。

だが、一つの外国語をマスターすることは、世界がひとつふえることだといったが、これはほんとうである。中国語をはなすようになってから私は中国人とか日本人とかを区別する気になれなくなってきた。孔子は「有教無類」(教ユウえあるに類ルイなし)といっているが、辜鴻銘クワウミンはこれを「ほんとの教育をうけたものには人種人種の区別はない」と解釈している。けだし名訳である。この教育をたんに語学にかぎっても、この言葉のもつ真理を味わうことができる。中国語を会得すれば、中国人が言葉はちがっても、日本人と同じことを同じ着想で考えていることがわかる。思い出すままに二、三例をあげてみよう。

中国語の「三人よれば文珠の智慧」は中国語では「三個馬車匠、勝過諸葛亮」(三ことわざ) 人の馬車屋は諸葛孔明にまさる)「三個笨漢、抵一個状元」(三人の馬鹿ものは一人の状元にあたる) 状元は官吏登用試験第一位で進士になったものである。

「船頭多くして舟山にのぼる」は「龍多了旱、人多了乱」(雨の神の龍が多ければ旱になり、人が多ければ乱れる)

「手前みそはからい」<sup>ビレンビツ</sup>別人屁臭、自己屁香<sup>グチビシヤン</sup> (他人の屁はくさい、自分の屁は香しい)

「岡目八目」は「当局者迷、旁觀者清」<sup>タンチユンエミ</sup> (局にあたる者は迷い、傍觀者はよくみえる)

「瓜のつるになすびはならぬ」は「猪毛長不到羊身上」<sup>ツエマオチャン</sup> (ぶたの毛は羊のからだにはえない)

「一文おしみの百失い」は「省了塩、酸了醬」<sup>センリヤオイエン</sup> (塩を節約して醬油をくさらせる)

「よらば大樹のかげ」は「挨着大樹有柴燒」<sup>アイツエダーシウオユウツ</sup> (大樹のそばにゆけばたきぎにこまらない)

または「吊頸也要尋大樹」<sup>タイアオツイエーヤオシンダーシユオ</sup> (くびをつるにも大きな樹をさがせ)

「一事が万事」は「一事精百事精」<sup>イースチンベースチン</sup> (一事がよければ百事よし——百の発音は老百姓のときはペエイ。

「安かろう悪かろう」が「便宜不是貨、是貨不便宜」<sup>ビエンイブシ</sup> 安いのはまともな品ではない。まともな品は安くない)である。

中国人と日本人、人情には全然かわりはない。こうして中国人の心理が多少わかるようになる。日本人の中国人の心理にたいする無理解さ、それにもとづく日本の「対支政策」がばかばかしく見えてやりきれなくなってきた。日本の「宣撫班」の人たちが中国の農村にいて、農民の



新中国紀行<sup>②</sup> 北京門前通り。古い街並みはそれほどかわってはいない。

心からの歓迎をうけたというから、なぜそれがわかるのかと聞いたら、農民が鶏をつぶして御馳走してくれたからと得々として語っていた。これなどは中国の農民の間に昔からつぎのような言

葉があることをまったく知っていないからである。

「打煉米、罵白麵、不打不罵吃高粱飯」<sup>タイエンミイ マベイミエン ブタイブ マツ カオリヤンファン</sup>（人を

なぐる奴には白飯を御馳走し、人をのしるやつには白い麵を御馳走し、人を打たずのしらざるものには高粱飯を食わせろ）

中国の農民はその農村のそこからきた権力者に御

馳走をして「敬して遠ざける」<sup>チンアルニアンツ</sup>（敬而遠之）方針を

とってきた。それゆえ、人をなぐるほどの権力者には白飯を、罵しるほどのやつには白麵を御馳走せよということになる。しかし人をなぐりもせずのしりもしない人は自分たちの仲間であるから、自分たちと同様、ただまっ黒な高粱飯をたべてもらおうということだ。

抗日戦争のなかの  
新しいことは

当時日本軍の占領下にあった民衆は心から日本人と親善しよう

というものはひとりもいなかった。彼らはいつかはかならず日本人を追いはらってみせるという  
気概があった。中国人の間には「チュアンシツウツクオレン全是中国人」(おれたちはみんな中国人だ)という言葉がはや  
つていた。電車のなかで座席をあらそって喧嘩すると、そばにいる一人がいう「チュアンシツウツクオレン全是中国人」、  
それで喧嘩はおしまになる。共産党軍の兵士が和平軍(汪精衛の和平救国軍)の兵士につかまる  
と「チュアンシツウツクオレン全是中国人」。この言葉によってときにはにがしてもらえることもあった。またたとえ、や  
むをえず「カンジエン漢奸」になるものも、自分にはかならずこういいきかせていた。「ヤオシヤンブ タンワンクオヌ要想不当亡国奴、  
チイフエイタンチ テンワンクオヌ除非当幾天亡国奴！」(亡国奴になりたくないならばわずかの間は亡国奴にならなきゃならない)と。  
ともかくかれらの間には、国民党の軍隊は遠くにいつてしまったのであるから、誰かがでて日本  
軍と民衆の間にはいり、民衆の世話をしなければならぬという考えがあった。それゆえある  
「チユウミンブ漢奸」のひとりにはつきり「チユウミンブ救民不救国」(自分は国は救えないが民は救う)といっていた。と  
もなくすべての中国人の心のそこに「チュアンシツウツクオレン全是中国人」という感情がみなぎっていたことは否定で  
きない。

中国人にこういう高度の民族意識ができあがっているとところにもつてきて、日本の軍部が汪精  
衛という蒋介石の対抗馬をかつぎ出し、占領地区内に「南京政府」をつくったのであるから、そ  
の失敗ははじめからわかつていた。日本では朝野をあげてこの政府をバック・アップしたのであ  
るから、日本人全体が中国および中国人の心理についていかに知らなかったかがわかる。

当時私はある中国人からあなたは南京政府の「サンチエー三穴」ということを知っていますか、といわれ

た。なんのことだとたずねたら、その人は、独立国というからには領土と国民、その国民のえらんだ政府の三つが必要です。その一つでも欠ければ独立国ではありません。今占領地区の中国人は誰ひとりとして汪精衛政府の人民だと思っているものはありません。その領土は日本の占領地区で自分の領土でなく、その上、政府はなんの権利ももっていません。つまり民なく、領土なく、権力なし、これが三欠ですといった。この言葉の面白さは、中国語に三という数字をあげてはつきり説明する用語法があることを知らなければわからない。まず二、三その例をあげてこの用語法をのべてみよう。

長生きには三つの道あり、一つ、星の出ているうちに起きること、二つ、晩飯には大食しないこと、三つ、女房が生まれつき醜いこと（長寿有三道、早起看星斗、晩飯少吃口、老婆生得醜）。最後の一項は女房が醜ければ性交の度数が減るから身体によいというわけであろう。中国の養生訓ではあの度数について適当な回数をつぎのようにいつている。

二十更更、三十夜夜、四十五五、五十半月、六十老母猪

この意味は——「二十歳は一晚二時間おき、三十歳は毎夜一回、四十歳は五日毎、五十歳は半月毎、六十歳は年とった牝豚のように鼻をならすだけにしておけ。」

家に三声あり、読書の声、はたおりの声、赤んぼの声。（家中有三声、読書声、織布声、娃娃声）これが中国の円満な家庭の象徴である。

人に三つの狂い（マニア）あり、酒狂い、色狂い、財産狂い。（人有三迷、酒迷、色迷、財迷）。

天に三日の晴なく、土地に三里の平らなく、人に三分の銀なし。（天無三日晴、地無三里平、人無三分銀）これは貴州の俚謡、その土地の悪さ、人の貧しさをいう。

農夫に三つの家宝あり、みにくい妻、ちかい耕地、やぶれ綿入れ、（莊稼漢三宗宝、醜妻、近地、破棉襖）この場合の醜妻はよく働らくからである。

貧乏人の三つの宝、われ鍋、醜妻、きたない綿入れ、（窮人三件宝、破鍋、醜妻、髒棉襖）というのもある。

天下に三つの差サがある。賊となること、娼妓となること、らっぱ手となること。（天下有三差、做賊、娼妓、吹鼓手）らっぱ手とは葬式などでらっぱを吹くもの。

船のはしらない場合は三つある。逆風にははしらない、無風にははしらない、大風にははしらない。（三不走、逆風不走、無風不走、大風不走）

身近においてはならない三つのもの、死人、女人、大小便。（三不留、死人、女人、大小便）皇帝のからだにも三匹の御しらみがある。（皇帝身上也有三個御虱）

大声で三たび金はいらぬといえば鬼もおそれる。（大喊三声不要錢、鬼也害怕）ざっとこういった用語法である。

中国語はこの用法をしらないと意味のわからない言葉がでてくる。スターリンがヒットラーや日本と妥協したとき、中国人は非常におこった。そのとき「スターリンは尊きに達する条件を二つもっている。」（史達林達尊有二）という言葉がはやった。ちよつとみるとこれはほめた言葉の



新中国紀行② 上海、魯迅記念館。入口の文字は、周恩来首相の筆による。中国ではいたるところに中共首脳が書いた文字が見うけられる。

ようであるが、実はかれは徳がないということなのだ。中国では昔から尊きに達するには三つのもの、年齢が高いこと、徳の高いこと、位の高いこと、(すなわち齒、徳、爵の三つ)が必要だとされている。ところがスターリンはすでに高齢で、位も高かったが徳をかいている(欠徳)から、「達尊有二」ということになる。

余談が長くなったが、中国人がほんとに自分たちの政府と考えていたのは、少なくともその抗戦時代には重慶の蔣介石政権だった。蔣介石もスターリンと同じように、「尊きに達するもの」は二つしかなかったとみえて、かれにたいして反感をいだいていた中国人は少なくなかった。しかしかれが日本とたたかっているとき、中国の主権者はだれかと聞けば中国人は百人が百人汪精衛ではなく、もちろん蔣介石だと答えたであろう。しかし占領地区内の中国人で日本の軍当局にはつきりそう直言してくれる中国人はほとんどいなかった。中国人は日本の軍人の意気あたるべからざる態度にまともに当ってくだけ



るようなことはしない

曾國藩(太平天国軍を打破した清朝の学者政治家)は「洋務尺牘」(外国関係文書)のなかで、「もし君の面前で君を侮辱するようなことをいう外国人に会ったならば、それに対する一番よい方法は、おだやかに笑ひ、<sup>あたか</sup>恰も君がかれのいったことに気がつかなかったようにふるまうことだ」と教えている。こういうやりかたを中国人は「敷衍」(<sup>フイエン</sup>ていよくあしらう)といっている。

**独立をねがう** しかし私はそれを正面から堂々と口にだしていった中国人を知っている。その**陳先生直言** れは陳友仁先生だ。先生は孫中山先生の片腕で、国民党政府外交部長を担当

した方である。孫中山先生は、中国人のなかで英語及び英国を知っているものが三人半(三個半)あるといった。その一は英文学に通じた辜鴻銘(<sup>ここうめい</sup>)、その二は英語の外交文書に通じた伍朝樞(<sup>ごちやうすう</sup>)、その三は英国の国情に通じた陳友仁、のこりの半人は誰もいかなかったが、おそらくそれは自分だといったかったのだろう。陳友仁先生が英国の国情に通じたのは当然のはなしで、この人はトリニダット生まれの華僑(<sup>ホアチヤウ</sup>海外にいる中国人)で、三十才まで英国籍をもっていた。ロンドン大学をおえたかれには、英国の大きな石油会社の顧問弁護士として明るい未来が約束されていた。だが中国の辛亥革命(<sup>しんが</sup>一九一二年の武漢革命)が起こると、かれの身内にながれる中国人の血がわきたち、かれをゆさぶった。そしてかれは英国人として物質的安樂のなかにくらすよりも、中国人として苦難の道を行くことをえらんだのである。本国に帰って革命の泥沼に身を投じたかれがうけた最初の試練は、張作霖による逮捕、投獄だった。英国籍をもっていたので、それをいえば国外

追放だけですんだのであるが、かれはむしろ中国人として迫害をうけることをえらんだ。幸いこのときは、張作霖の失脚による北京退出によって、かれは一死をまぬかれた。この事件以来革命家の間に信用をうけ、ついに国民党政府の成立とともに外交部長となった。太平洋戦争のとき、香港にとりのこされたかれは、日本軍部から汪精衛政府を支持するように要求された。かれは汪精衛の武漢国民政府で外交部長をつとめ、汪が蒋介石と妥協したのちも、ひきつづき反蔣運動をつづけた。この経歴から、日本軍当局は、かれが蒋介石に反対し、汪精衛を全中国の主権者とする運動に当然参加するであろうと考えたのである。

陳友仁先生は中国人でありながら国語が話せない。すべて英語をつかっていた。かれが日本人や中国人と会談するときには、たいてい私が通訳にあたっていた。そんな関係でかれと日本軍当局との会談の内容はよくおぼえている。

とくに南京政府に参加せよという日本の要望を、きっぱりとことわったときのかれの言葉とその毅然たる態度は、今も脳裏にやきついていっている。かれは、自分は中国がほんとに自主、独立の国になれば、いつでもふたたび政治に参加しますといった。その言葉をうけた日本側は、日本が南京政府をたてて中国の行政をまかせたことは、中国の自由独立をみとめたことではないか、ときりこんだ。そのときかれは静かな口調でこういった。

「中国の政府は、中国人が自分でえらぶべきものです。外国人のあなたがたがえらぶべきものではありません。現在中国には二つの政府があります。一つは汪精衛の政府、もう一つは

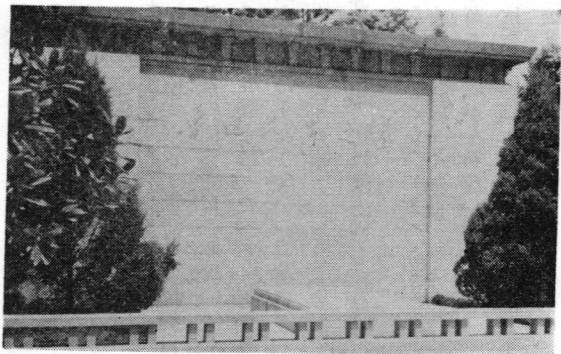
蔣介石の政府です。あなたがたが中国人に、この二つの政府のどちらが中国人によってえられた政府かとたずねてごらん下さい。

私個人は蔣介石に反対し、かれとの闘争をつづけてきました。しかしいまこのとき、中国人のほんとの政府はどちらかときかれるならば、私は即座に蔣介石のほかに中国の政府はないといわざるをえません。この現実を承認するしないはあなた方のご自由ですが、この事実を承認しないことは、ちょうど敵に追いつめられた駝鳥が、砂漠の砂に首だけつつこんで敵からのがれたと思っているようなものです。」

かれと相對していた日本の将校は、自分がその生殺与奪の権力をにぎっている中国人から、こういう言葉をきこうとは思わなかったので、ちよつと顔色を変えたが、しかし、さすが中国通といわれた人だけに、陳友仁先生の正直な直言にうたれてなにもいわなかった。わたしはかたわらにいて、「<sup>アベツ</sup>阿巴吃<sup>ホワンレン</sup>黄連」おしが黄連（藥草の名、非常ににがいので「<sup>ホワンレン</sup>黄連樹<sup>ユオシアータンチン</sup>下彈琴」＝黄連の下でことをひく、は苦しいなかにもたのしみありということになる）をたべて、にがいてもいえず、ただ口をもぐもぐさせているばかりという言葉は、こういう場合のことをいうのだなと考へていた。

陳友仁先生のこの言葉にも示されているが、このころの中国人は、もはや昔のようなまぎちらされた砂のような（<sup>サンシャイベツタ</sup>散沙一般的）民族ではなく、そのなかから鉄のような（<sup>チイベツタ</sup>鉄一般的）團結意識が生まれつつある民族だった。この民族の九〇パーセントが農民であったことは、中国の政局の

未来に大きな関係があった。



新中国紀行② 「魯迅先生の墓」文字は毛沢東首席のもの

抗戦中国の  
流行語  
中国農民の把握、したがって国民の人心把握については、中国

共産党は国民党よりもはるかに経験をつんでいた。それがため蒋介石は中国の民衆を総動員して、それぞれ抗戦の部署につかせるという方針がとれなかった。そして抗日戦争は官僚的戦争指導の下に行なわれ、政府と兵士だけで戦われ、民衆はただそのまわりをうろろするばかりだった。いきおい民衆の間には不平が生まれ、色々の流言となつて広まつていった。そういう民の声のなかには、民衆の感じた当時の真相がよく表現されている。ただそれだけをみても抗戦中国の内情がわかるから、いま二、三その例をあげてみよう。

「前方有<sup>チエンファンユーシェマ</sup>什麼吃<sup>ハウファツツシエマ</sup>什麼、後方吃<sup>ユーシェマ</sup>什麼有<sup>ユーシェマ</sup>什麼」前線では食べものなんでもあるものですませるが、後方

では食べたいと思うものはなんでもある。

この言葉の面白さは什麼シエマ（なに）という字の使い方だ。当時中国軍の後方、すなわち重慶、成都、昆明、桂林などでは戦争成金が続出し、料亭では毎日豪華な宴会がつづいていたので、こういう言葉が生まれた。

「前方吃緊、後方緊吃」チエンフアンツツチン、ハーフンチンツ 前線は緊張して大わらわ、後方では食べるのに大わらわ。

この言葉の面白さは「吃緊」という成語をひっくりかえして、ちがう意味につかったところにある。吃ツツ喫とは「たべる」という動詞であるが、それは名詞と結合して日本語の「すかたんを食う」というようないい方ができる。たとえば「吃虧」ツツクエイ（損をする）「吃醋」ツツウオ（字義はすをたべる、嫉妬するという意味）「吃灰」ツツハイ（灰をかぶる）「吃苦」ツツク（苦しみをうける）「吃私」ツツシ（私腹をこやす）「吃香」ツツシャン（評判がよい）。吃は喫と同字で発音は *chih* であるが、チというよりもツを強くいう方が通じるようである。

「官不如工、工不如商、商不如囤」クワンブヤクワン、クワンブヤクシャン、シャンブヤクタン 官吏は職人になわなない。職人は商人になわなない、商人は買だめになわなない。

抗戦中物価は毎日のように騰貴をつづけ、ちよつと安定したかと思うとすぐまたあがり、あがつたものがやや安定したと思うと、またあがるという状態だった。人びとはこれを称して「平平漲漲」ピンピンチャンチャン（平は物価の安定、漲は騰貴）といっていた。商人は品物を売ったがらず倉にしまつておいて値上りをまつた。これを囤積タンチキといつた。そこで官吏の収入は職人にしかず、職人

は商人にしかず、商人は買だめ（囤積<sup>とんせき</sup>）をするものにしかずというわけである。

「馬達一響、萬金萬両」<sup>マタイシャンワンチンワンリヤン</sup> モーター一声萬金萬両。

これは誰にもわかる。中国は三方を日本軍に封鎖されて、非常に物資にこまってきた。海外から印度經由で物資がはいると、それを運搬して重慶その他にはこんでくるものは自動車だった。それゆえ自動車の運転手は非常に暴利をむさぼり、かれらの生活は豪華をきわめたので、この言葉が生まれた。

「紅辺太老、黄辺剛好、藍辺錢少」<sup>ホンビエンタイラオ ホワンビンカンハオ ランビエンチエンシャオ</sup> 紅えりは年をとりすぎている、黄色えりは丁度よい、藍えりは金がない。

中国でも日本と同じように、抗日戦争中軍人は女にもてたものである。日本にも「いきな上等兵にや金がない、可愛い新兵さんになやひまがない」というようなうたがあるが、中国では軍人を紅えり（将官のえり章の色）、黄色えり（佐官）、藍えり（尉官）の三つにわけて、娘がむこをえらぶならば、佐官が丁度よいといっているわけである。けだし中国では佐官は日本よりずっと年が若かった。中国では上等兵や新兵などは問題にならない。この国では「よい人間は兵にならない」（好人不当兵<sup>ハレンブタンビン</sup>）といわれ、兵の地位は日本とは比較にならぬほど低かったからである。

「找対象三天、找職業三月、找房三月」<sup>ツァオトワイシャンサンチエン ツァオツイェンサンユエ ツァオファンツァンサンユエ</sup>

結婚対象をさがすには三日間、職業をさがすには三カ月、家をさがすには三カ月。

抗戦中国の都会は爆撃で家々がこわされたうえに、人口が集中し、人びとの離合集散がはげし

かった。そこでこういう言葉が生まれたのである。

かように民衆の間に生まれた言葉は多いが、そのなかで人びとの心をうつものだけが俚謡のようであとにのこつたのである。それゆえ中国には「俗話は実話、俗話は熟話」「俗話は実話、俗話就是熟話」(熟とはよくなれたとか、したしまれて受けいれやすいとかいう意味である。女郎のなじみ客などは熟客といわれる) という言葉もある。中国人は昔から口から耳へよい言葉をかたりついで後世にのこした。詩経や楚辞や論語などはこうしてできたものである。

また皇帝の政治がわるく、民がその統治にたえがなくなつたときなどは、民間からその悪政をうたい世の注意を喚起する俚謡が生まれた。元王朝が亡びる直前に「一眼の石人、黄河に挑動すれば天下反す——石人一隻眼、挑動黄河天下反」という奇妙な民謡がはやつたことがある。白蓮教(山東にはやつた新宗教)の教祖韓山童はそれを利用して、黄河の治水工事の現場に一つ目の石人の像を埋めておき、それをわざと発見させて人びとに元朝の亡びる時が来たと思わせた。これがきつかけとなつて大乱がおこり、元朝が亡んだのである。

抗日戦争のときも、華北の農民の間では「大麦が黄色くなれば日本は亡びる」(大麦黄、日本亡)とか、「日本語は学ぶに及ばぬ、三晩とちよつとでつかわれなくなる」(日本語不須学、三天兩响用不着) というような民謡がはやつた。

これらの言葉はことわざとはちがい、ひろく「謡言」といわれているが、そのなかには支配者によつて口を封じられた民衆の願望がひめられていた。それゆえ、こういう言葉をよく観察すれ



新中国紀行② 北京飛行場の標語。「大いにがんばってよい成績をあげろ」

ば、そのときの政治のありかたがわかるのである。周の太子晉はこれを「民の憲言」といつていた。(国語周語、「観之詩書与民之憲言、皆亡王之為也」)

民衆のこえと 民衆のことば 民の声を重んずる風習があったので、政治家は政治的スローガンを民謡のような形で社会にながし、その目的を達成しようとした。軍閥戦争時代にも、戦いは主として政治スローガンを書いたピラ(伝单)の戦い、すなわち宣伝戦で決定されたのである。武器による戦いがおこるのはよくよくのことで、どっちのスローガンが天下の人氣をさらったかがわかれば、一方はすぐに兵をひいた。中国でなぜこういうことが行なわれたかを理解するためには、この国の「街罵」という習慣があることをまず知らなければならぬ。

中国の街をあるいているとき、女が大声でわめきちらして、そのまわりをぐるりと人がとりまいている風景によく出会った。あとからそれが「街罵」



だと知らされた。この国では女房が亭主になぐられると、腕力では男にまけるので、街にとび出して、大声で亭主の悪口をいい、大勢の人びとに自分がいかに正しく、亭主がいかに横暴であるかをわめきちらす。それに同情した人々が亭主をつるしあげるのので、亭主は頭をかかえてにげ出してしまふ。男同士の喧嘩もこの方式で行なわれ、日本のようにすぐなぐり合いをやるようなことはしない。おたがいに分がいかにかに正しいかを口角泡をとばして争い合う。その場合に古典やことわざ集から適切な言葉を引用して周囲の聴衆に感銘をあたえ、多くの人びとに合いづちを打たせた方が勝となる。

抗日戦争時代において、国民党と中国共産党との間には武力衝突もおこったが、それよりも目ざましいのはこの「街罵」方式の宣伝戦だった。共産党が「中国人は中国人を打たず」(中国人不打中国人)といえ、国民党は「外国にたいするにはまず国内の安定」(對外先安内)を提唱した。共産党が「内戦を停止し一致して抗日しよう」(停止内戦一致抗日)という口調のいいスローガンを提出すると、国民党は「国家の統一は一切より高し」(統一高於一切)とか「すべては統一戦線に服従せよ」(一切服従統一戦線)とか「一つの党、一つの主義、一人の指導者」(一個黨、一個主義、一個領袖)とかいって、指導権をあくまで蔣介石の手ににぎっておこうとした。

国民党軍が後退したあと、日本軍占領地区に共產党系の遊撃隊の活動がしきりにつたえられると、「八路軍新四軍は遊んでいて戦わない」(八路軍、新四軍、遊而不撃)とか、「遊撃はあるきまわってうばうだけ」(遊撃反而遊槍)というような謠言がとんだ。そしてついに国民党軍、共產党両軍間に武力衝突さえおこったのである。

毛沢東はこのとき「かまきりがせみをとらえようとしているが、その背後には雀がいる」(螳螂捕蟬、黄雀在後)ということわざをひいて国民党に警告するところがあった(毛沢東選集第三卷九二七頁)。しかし国民党のなかにはこのことわざを逆に考えて、日本と国民党が争っている背後に、共產党が政権をねらっているすがたを考えて、日本とはやく和平を結ぼうと主張する主和派が抬頭してきた。主和派のスローガン(口号)は、「和則存、戰則亡」(和すれば存し、戦えば亡ぶ)であり、これにたいする主戦派の口号は「戰則存、和則亡」(戦えば存し和すれば亡ぶ)であった。共產党はもちろん主戦派だった。そのスローガンは、「戦いつづけ、團結しつづけ」れば中国は必ず存し、和してしまえば、分裂してしまえば中国は必ず亡びる」(戦下去、團結下去、中国必存、和下去、分裂下去、中国必亡)であった。

だが毛沢東は蒋介石が日本とほんとに戦争を継続するつもりならば、今のようになに戦争の指導権を一手ににぎっているようなことではだめだと主張した。かれはその選集(第二卷)のなかで、「飯があればみんなてたべよう」(有飯大家吃)という中国の俗語をうまく引用して、「敵がいればみんなて打とう、事があればみんなてやろう、本があればみんなて読もう」今のように一人

がすべてを独占している（一人独吞<sup>イレントウトウ</sup>）ような封建的なやり方は、一九四〇年代には通用しないといっている。

共産党のこのスローガンは、抗戦中国の後方地区における戦争成金の跳梁、物価騰貴、民衆生活の困難がひどくなるにつれて次第に国民の心をとらえていった。それがため戦争がながびくにつれて国民党の内部にも抗戦の前途に不安をおぼえ、日本との和平停戦をのぞむものが多くなってきた。おそらくそんな関係からか、彼らはどうやら「申報」にしばしば「全面和平」についての論文を書いていた私に目をつけた。私を通じて、汪精衛をたてている軍部ではなく、蔣介石との和平を考えている日本の政治家と連絡をとろうとしたのだ。

再び和平工作の 一九四二年の十二月、前から連絡があった国民党江蘇、浙江、安徽三省監察  
思 い 出 使呉紹樹（終戦後最初の上海市長）から密使がきて、私に江蘇と安徽の省境の

山<sup>サンヤヤヤ</sup>橋にあった彼の司令部まできてくれという話だった。このときのいきさつは中央公論社から出した『上海無辺』という単行本に書いておいたからここではふれまい。ただ当時抗戦中国の農村の旅がどんなものであったかを示すために、旅行の状況だけでも思い出すまにここに書いておこう。そのとき私はきたない長衫に毛皮の帽子といういでたちで、呉紹樹側の二人の中国人にまもられて、まず汽車で常州までいった。そこから公共汽車<sup>パブリック・バス</sup>にのって和橋鎮というところへ。

常州<sup>チャンツァオ</sup>の城内はひどく壊されていたが、残壁には修理が加えられ、ともかく人家が並んでいる。和橋鎮行きのバスは出発までにまだ二時間まがあるというので、街の菜館にはいって待つ



新中国紀行② 北京王府井大街（北京の銀座通り）三輪車夫はむかしのままだが、個人営業ではなく、合作社員。

ことにした。川蝦の生きのいいのを油でいためたものと、家鴨の塩漬で昼飯をすませ、お茶をのんでいると、様子を見せにやった夥計（ボーイ）<sup>ホーチ</sup>が帰ってきて、バスがすぐ出ると知らせてくれ

た。大急ぎで汽車站<sup>チツヰツアン</sup>に行ったときには、もう十五、六人も先客が待っている。しかしすぐ出発するはずのバスが出たのはそれから一時間も後だった。そして出たと思うと十分も行かないうちに検問所であめられた。乗客はみな車から下され二本の丸太でつくられたすりの間を通って一人ずつ日本兵の前に行く。もちろん私は中国人として身体検査をうけた。それを通過すると、今度は汪政府の警察官が荷物を検べる。これはもつとも自分たちが荷抜きするのが主な目的だ。そのあいだにからの車台の点検がおり、やっと放免になる。それから二時間ほど、バスは夕暗をついてひたばしりに走り、和橋鎮に着いたときはもう日はとっぷり暮れ、星がふるような晩になっていた。

和橋鎮は川沿いの細長いちょっとした町である。

軒ならびの店には灯があかあかと燃えて品物が豊富だった。この町は『淪陷区』と『自由区』との中間にある密貿易の中心である。「淪陷区」というのは日本側が「和平区」といつている地域で、「占領された区域」という意味である。人の国を武力で犯して、それに反対するものを殺してしまえば、一応あとは静かになるが、この辺はたとえその意味でも和平区と呼ぶのはふさわしくなかった。和橋鎮から五里と離れないところにはもう忠義救国軍（国民党系遊撃隊）の本拠がある。また新四軍は絶えずこの周囲を流動している。この町には双方の密輸商人兼スパイが入りこんでいて、それぞれ自分の部隊に必要な物資を調達したり、自分の地盤から出る物産を売り捌いたりしている。そうした関係から、この町には、上海からきたマッチ、煙草、綿製品、薬品や奥地からでくる桐油、豚毛、鶏卵などがどの店にも豊富なのだ。

翌日は和橋鎮から乗合船にのって鼎山鎮<sup>テイサンチュン</sup>までいった。鼎山からさきはもう国民党軍の守備地区である。この時の船の旅で私ははじめて「南船北馬」という言葉の意味を実感的に知ることができた。

船は、<sup>たい</sup>たりく<sup>ら</sup>いの大き<sup>さ</sup>で、帆柱のさきに長い綱をつけ、二人の人間が岸づたいに曳いて行く。船があまり岸に近づくと船頭が竿でひと押しする。船のなかは十畳ぐらいの広さで、町に青物売って帰る百姓女、田舎に物売りに行く商人、それに私たちのようににえたいの知れないのが十五、六人混然とつまっている。川にも検問所があつて、船が二度目の検問所を通過した頃から、客同志お互に口をきくようになった。検問所で大分しぼられたさし向いの商人が、隣の人に

「ツエジュンツエジュン」といいながら盛んに罵っている。連れの男に「ツエジュン」とは何のことかと聞いたたら、この辺では汪政権の和平軍のことをかけでは賊軍ツエジュンといっていると吐き出すようにいった。

船はいつの間にか川幅の広いところでいた。もう曳船ではなく船頭が櫓を押している。暮れやすい冬の陽が大分西に傾いて、黄色い光線が際限なく広がった大地を照らしている。白く帯のようなクリークが、収穫を終ったばかりの稻田の間をまがりくねって流れ、その両側に水車小屋の茅屋根が頭の丸い釘でも打ったようにぼつんぼつん散在している。疏らに散らばった農家からは、かすかに白い煙が立ち上っている。もうそろそろ夕飯を炊く時間らしい。兩岸は深い枯葦の茂りで、ちょっと大利根の水郷を往く感じだ。時々水鳥がばさばさと枯葦の間から飛びだして空に散らばると、だんだん小さな黒い点になって、やがて空の色に溶けこんでしまう。何だかこんなところから兩岸の葦をかきわけて、阮小七（水滸伝中の豪傑）でもとび出して「人生一世草レンシェンイースツァオ生一秋」とみえをきりそうな気がする。阮小七は宋の新四軍だが、ほんとの新四軍が出たらどうしよう。この船の中から身柄をもって行かれそうなのは、さしずめ私達三人だろうと思うと何となく心細くなってあたりをそっと見渡した。何しろ四日程前に鼎山行きの船が襲われたばかりなので、外の客も同じような心配をもっているらしい。だが心配なものは何も出ずに、六時頃船は平凡に鼎山についた。

それからさきの道中では、国民党軍の査問にひっかかって、日本人とわかりそうになったが、

つれの男のおかげで、それにもうひとつ中国語のおかげで私は帰国華橋ということで、その場をすくわれた。そしてその夜国民党の正規軍の前線司令部のある張渚という町についたのだ。

この町は顧祝同將軍の前線司令部の所在地だけあって、町に入ると兵隊の多いのが眼につく。藍色のだぶだぶした綿服を着た少年兵が無邪気に追いかけてこいたり、老兵が小川で食器を洗っていたりする様を見ると、この人達が日本兵と殺しあっている人達なのかと不思議な気がした。街の店屋ではアセチレン燈や石油ランプを使っているのも、今まで通過したどの町よりも明るく活気づいて見えた。

その夜の宿で、私は早く床にいたが、隣室の人々は国民党軍の將校らしく、話を聞いていると、誰々は衡陽で戦死したとか、誰々はどこで負傷してそのあけくに細君に逃げられたとか、あまり陽気な話題ではなかった。この町もやはり、中国のどこの町でもそうであるように、貧困と悲劇を、無関心と長閑のオブラートでふんわりくるんであるに過ぎないのだ。

翌期未明に起きて張渚をたつ。

村鶏已ニ報<sub>レ</sub>晨<sub>ヲ</sub> 曉月漸<sub>ク</sub>無<sub>レ</sub>色

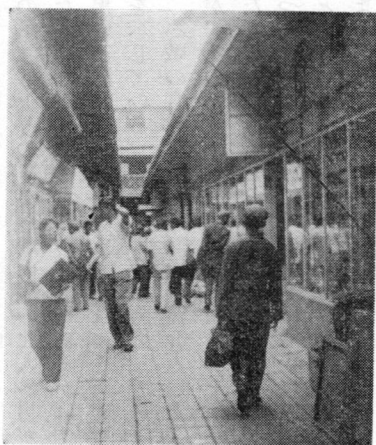
行人馬上ニ去<sub>ル</sub> 殘燈照<sub>ラス</sub>ニ空<sub>ヲ</sub> 駅<sub>ヲ</sub>

劉翬のこの詩は私達のこの日の出発を歌ったように思われる。くらやみの中で、村の鶏は鳴き出して晨を告げている。暁の月は空の色の明るくなるにつれてだんだん薄くなって行く。私は今轎にのってこの町を去って行くが、二度とここを過ぎることはあるまい。町を通って行くと早起

きの店の灯が、ところどころ凍りついた街路をあかあかと照している。

町を出ると間もなく山路にかかる。山といっても大きな山ではない。丘のような小さい山が出

新中国紀行⑦ 北京の東安市場。品物はいろいろあるけれど、どちらかというと質素なものが多い。



いっても大きな山ではない。丘のような小さい山が出たり入ったりしている間を羊腸の坂道がつづいていく。私達はこの日一日その坂道を上ったり下ったりした。轎の上に坐っていても汗ばむような暖かな日だった。轎夫の太い頸にどすぐろい汗がながれていた。

華南のたそがれ  
歴史のたそがれ

暮れ方近く、ようやくその山陝  
を出ることができた。道の両側

にある人家がだんだんふえてくる。山々橋の村界に入つたらしい。しかし私達は村の方へは行かず、道を東にそれて爪さき上りの小径に入つた。径が栗の木みちの生えた小山にかかると、かたわらの藁を結んだ肥料小屋のようなものの中からひよいとモーゼル銃をもった中山服の青年が現われた。私達をじつと見ていたが、やがてつれの男を認めてあいさつする。こういう小屋を二つ経過して茅葺きの屋根のある門



のところに着いた。いよいよ目的地に達したのだ。私達がそこで轎を下りかけていると、門の奥の爪さき上りの道から中山服の二人の男が下りてきた。私は呉紹樹がどんな人柄か、予備知識もなかったが、そのどちらが彼であるかはすぐわかった。どこかに大きいところがある。彼は色の黒い小肥りに肥った男で、ちょっと土建屋の親方のような感じだが、声はよく澄んで知性の高さを示している。私はその夜曉方の三時までかれと中日両国の終戦の方法を談じ合った。

終戦の直前、近衛文磨氏の蔣介石にあてた親書をもって、再度かれをおとずれることになったが、そのときはもう彼はその司令部を浙江省の屯谿<sup>アンチ</sup>にうつしていた。そこへ向う途中富春<sup>フチン</sup>まできたとき、おりもおり向う岸で日本軍と中国軍の戦鬪がはじまり、私は一步もさきにすすめなくなった。こんなわけでそのときはついに呉紹樹にはあうことができず、むなしく終戦をむかえることになった。私の直接和平工作もこうして誰にも知られることなく歴史のやみのなかに消えてしまったのである。

## 第七章 中国語さまざま



終戦後、手荷物一つで日本にかえってきたわれわれには、ご承知のような筍生活が待っていた。当時大い日本人がどっこいどっこの生活をおくっていたから大して苦にはならなかった。中国語では悪いことの「似たりよったり」は「一蟹不如一蟹」(イシャブルイシャ) (蟹は蟹にしかず) といっている。英語では貧乏生活を「手から口へ」from hand to mouth の生活というが、中国では筍生活ができる生活は貧乏とはいえない。毛沢東は中国経済の窮迫と文化の白紙状態を簡約して「一窮二白」(イチキョウニハク) といっているが、この国の貧乏は一物もない貧乏、すなわち「一無所有」(イチムソウヨウ) (一つとして所有するなし) であり、「一貧如洗」(イチヒンニシ) (一貧洗うが如し) である。

中国語では一という字の使い方は非常に多い。「一事が万事」は「一了百了」(イチリョウヒャクリョウ) (一事が解決すればその他のことも解決する)。ひとつ穴のむじなは「一丘之貉」(イチキョウノハク) だ。日本語のあなが中国では丘になっただけである。また「一孔之見」(イクンツチエン) (ひとつのあなからの観察) というのがある。これは主観的な見解、けつのあなの小さい見解を意味する。「けつのあな」というのは中国語では「おしりの眼玉」(ビクイエンチン または 屁股眼児) という。また「一波未平一波又起」(イチハクニヘイイチハクマタキ) (一つの波がおさまらない

のにまたひとつ波がおこる」というのがある。ひとつの問題が解決しないのにまた他の問題がおこることである。この頃の私の生活はたしかに「一波未平一波又起」というありさまだったが、そのうちになんとなく中国語を訳したり学生に教えたりする仕事につくようになってしまった。そうなると中国語学習上のポイントというようなものが多少わかってきた。

中国語と 中国語はドイツ語やフランス語のように名詞の性別がなく、ロシヤ語のように格がやかましくない。その上動詞の変化がない。さらに日本人にとって便

利なことに、文字から習わなければならぬということはない。したがって入門そのものはすこぶる容易である。日本人なら大抵の人ははじめから簡単な文章の意味がわかる。たとえば、太陽出来た、太陽が出てきた。我写字、私は字をかく。我騎馬、私は馬にのる。先生教我們地理、先生は私達に地理を教える。

これらの文章は中国語の予備知識が全然ない人でも大体の意味がわかるはず。このなかに日本語にない言葉といえ「了」(またはラ)と「我們」の們くらいのものであるが、「了」は現在完了または過去を表わす助詞、們は上の名詞を複数形にする言葉とわかれれば文章の意味はもっとはっきりするであろう。それゆえ四、五カ月もすれば字引を片手にして相当むずかしい文章にとりくむことができる。そこで、初学者は中国語にたいして安易感をもちやすく、新しい単語に出あっても、字引をひかずに、字義から見てたいいこんな意味だろうとあてずばうの訳をつけたがる。中国語はそんな生やさしいものではない。試みに中国語をならいはじめた人につぎの単語の



新中国紀行<sup>28</sup> 北京の東交民巷小学校

意味をきいてみたまえそのうちの三分の一できたらよい方である。

有気。受気。茶花。氣使。倒茶。茶室。茶房。茶博士。長臥。招親。解手。

これらは特にむずかしい言葉をえらんだわけではなく、普通につかわれている日用語を字引のなかから手あたり次第にえらんだものだ。まず有気<sup>ユーチ</sup>。字義からいえば「氣がある」である。そこで「她有氣<sup>タユーチ</sup>」を。她是彼女だから、彼女は氣があると訳せば大笑いで、「有氣<sup>シュオチ</sup>」は怒る、怒っているということ。そこでつぎの「受氣<sup>シュオチ</sup>」もいかりをうける。怒りをかうということ。たとえば「かれは地主のいかりをかう」は「他受地的氣<sup>タシュオテイイワツタチ</sup>」であり、「私は彼女のいかりをかう」は「我受她的氣<sup>ウオーシュオタチ</sup>」だ。中国語で氣<sup>チ</sup>というのは激情であり、怒氣である。中国人は平常生活のなかのむしゃくしゃをよくおさえているから、「氣<sup>チ</sup>」がうちにこもり、時によってこれが爆発し、手におえなくなる。家族制度のなかで、姑にいじめられているおとなしい嫁も、いったんこの「氣<sup>チ</sup>」が爆発す

ると姑や近所の人をのしりちらすことがよくある。女の「街罵」などもそれである。アーサ・H・スミスはこれを *wrath-matter* (怒りの素) といっている。

気には色々な使い方があり、「氣死」というのは「ひどくおこる」「憤死する」ということ。ところが「氣使」は横柄で鼻であしらうこと。「氣味」は空気の味ではない「におい」ということだ。こんなのは字義だけでは全然歯がたつまい。ある初学者に「生氣」という字をかいて見せ、君これがわかるかといったら、にやにやしなから「氣がいく」ということじゃありませんかといったが、これも「おこる」という意味である。

「茶花」はお茶の花ではなく、椿の花、そこで「茶花女」というのは、小デューマの傑作「椿姫」である。「倒茶」というのは、お茶を倒すのではなくお茶を注ぐことである。「茶室」は喫茶店ではなく二流の女郎屋、喫茶店の方は「茶館」。「茶房」は日本では何々茶房といって喫茶店の名前によくつけているが、中国では列車や旅館のボーイのこと。つぎの「茶博士」もボーイであるが、これは茶館のボーイである。ちなみにロシア語でお茶はチャイであるが、中国語の茶葉からはいった言葉だという。これは昨年亡くなった親友の言語学者、大阪市大の服部正巳博士の説であるからとくにつけくわえておく。

「長臥」はなくなつてねそべるのではなく、死ぬことである。死ぬことは「作古」という言葉もあるが、これは「古人となる」ということからきている。上海語では死ぬことを「チョウウベツ」といっている。在留日本人はこれに「長別」という字をあてていたが、長別なら発音は、

「チャンピエー」であるから、これはおかしい。中国人にきいてみたら、「吊辮子」の転化だろうという。清朝時代、罪人の首をきる場合には辮髪を手にもって、首をのばしてからきるから、「辮髪を吊す」すなわち死を意味するのだという。これなら背けないこともない。辮子Ⅱ辮髪は現在の中国人にはないが、民国革命以前の中国人は大い頭を剃って真中の毛髪をながくのこし、それをあんでつなのようにして後にたらししていた。これが辮髪で、この習慣はもともと満洲人がこの国にもたらしたものだ。かれらが清王朝をひらいたとき、「首をきられたくなければ髪を剃れ、髪を残しておくならば首はのこしておかない」(「留頭不留髪、留髪不留頭」)と布告して、無理やりに漢人の頭を剃ってしまった。保守的な漢人はこれをいやがり、髪をのばして首をきられた者が数しれなかった。また多くの人びとが山に逃げこんで隠士になったり、和尚になって辮髪をたらすことをまぬかれようとした。それゆえ清朝に反抗した太平天国軍は髪を剃らずにのばし漢人の意気を示したので、清朝からは「長髪賊」とよばれていたのだ。

つぎの「招親」は縁組をもとめること。親は親とか親しさとかいう意味ばかりではない。婚姻の意味もあり、したがって結婚することは「結親」とも「成親」ともいう。「成親」を「親になる」とよんではいけない。また「娶親」ともいうので、「八十老翁娶親」という言葉がある。これは「気持ちがあってもその力がない」ということ。英国人には百二十歳で結婚して二人の子供をつくり、百五十二歳で死んだトーマス・パールのような男がいるのに、中国ではわずか八十でその力がないとはちよつとなさけない話である。また「親」を動詞にして嘴(口)につけ

ると接吻するということになる。「親個嘴」<sup>チンコツォイ</sup>。「接吻」の別の名詞は「香嘴」<sup>シァンツォイ</sup>である。字義から

いえば「口を香ぐ」であるが、接吻は口をかいただけでは「没有意思」<sup>メーユイ</sup>（つまらない）だ。嘴は、

「くちばし」という意味もあるが、くちばしを香ぐと訳したら鳥につつかれそうである。使う場

所によって意味がちがうところが中国語のむずかしいところ。「嘴利害」<sup>ツォイリハ</sup>これは「利害」<sup>リハ</sup>がはげ

しいとか、するどいかという意味であるから、くちばしがするどいなどと訳すと大へんなまちが

い。口が悪い、口がきついということ。したがって「挿嘴」<sup>ツァオツォイ</sup>は口をいれる、これはくちばしを

いれるといつてもおかしくない。「辯嘴」<sup>ビェンツォイ</sup>は口論する。「嘴巴」<sup>ツォイバ</sup>はほった。横つらにビンタを

くらわすは「打了一个嘴巴」<sup>ダーライコツォイバ</sup>である。「嘴大舌長的人」<sup>ツォイターシエーチァンタレン</sup>は口が大きく舌が長い人、つまりおし

やべりである。いっそおしやべりついでにもうひとつ嘴のはいったやさしい詩を紹介（中国話で

は介紹）しておこう。

花在酒裏 <sup>ホァンツァイチュウリ</sup> 花は酒のなかにあり

香在嘴裏 <sup>シァンツァイツォイ</sup> 香わしさは口のなかにある。

酒在肚裏 <sup>チュウツァイトウリ</sup> 酒ははらのなかにあり

甜在嘴裏 <sup>チエンツァイツォイ</sup> 甜さは口のなかにある。

醉在心裏 <sup>ツイツァイシンリ</sup> 酔は心のなかにあり

人在夢裏 <sup>レンツァイムンリ</sup> なつかしき人は夢のなかにある。

酒裏的花 <sup>チュウリタホア</sup> 酒のなかの花



新中国紀行<sup>29</sup> 少年宮ラジオ教室のなか標語は「共産主義思想と同時に、技術ものばせ」

夢裏的人  
ハシリタレン  
ツェンツァイアイリ  
浸在愛裏

夢のなかの人は

愛のなかにひたる。(裏は裡とも里ともかく、「なか」ということ。「一醉」何心冷作)

最後に「解手」<sup>チエーシエオ</sup>であるが、この解は「解く」<sup>チエー</sup>こと

であるから、もちろん手をはなす、わかれる、離別するという意味もある。しかし、諸君が中国姑娘<sup>ツワンクオクニヤン</sup>

(中国の娘さん)を恋人にもち、一緒にレストランに

はいったとたんにその人が、「我要解手去」<sup>ヒト ウォーヤオチエーシエオチユ</sup>とい

って席をたってもおどろいてはいけない。これは

「私は別れます」ということではなく、「私はちよ

っとお便所にいきますわ」ということである。

けだしこの解は「解放」の解で、小便をするという意

味である。大便の場合には「解大手」<sup>チエーターシエオ</sup>といえ

ばよい。名詞になると「小解」<sup>シオチエー</sup>(小便)「大解」<sup>ターチエー</sup>(大便)

になる。英語でも人前でよく「W・Cにいきます

す」とはつきりという人があるが、あれはあまり上

品ではない。紳士の言葉は May I release myself?

直訳すれば、「私は私自身を解放してよろしいです



か」ということである。

### 字義と意味

通常の会話に用いられている単語の言葉でさえ、このように字義とはまったくちがっているのであるから、中国語は自分ですでにわかっていると思つても、まるっきり外国語であるという認識のもとに、はじめての言葉は一応字引をひいてみる必要がある。たとえば「騎虎勢チフシ」という言葉に出会えば、これは日本語のいわゆる「騎虎の勢」で、すさまじい勢だという意味に解すと大きなまちがいである。中国語の「騎虎勢」は、虎にのつておるにおりられず——おりれば食べられてしまうから——そのままのよりほかにどうにもならないことである。中日戦争のはじめ頃中国の新聞が、「日本軍は騎虎の勢」だと書いてあるのをみて、ある日本の軍人は、中国でも日本軍のすさまじさにおそれいつているじゃないかといつていたが、私はほんとの意味を話す気になれなかった。

「騎馬找馬チマツマオウ」馬に騎つて馬を找さがす。これも字義からいえば、同類が同類をつかまえるのに協力することのようにもとれるが、本当の意味は、根本を忘れて他を求めることである。

「行人如鯢シンレンルブ」鯢は鮓である。「行く人が鮓のようだ」というと、忠臣蔵の「鮓だ、鮓だ、鮓ぞむらいだ」が連想されるが、これは人が鮓のように群れて歩いていくということ。

「回頭是岸ホイトウシアン」頭をめぐらせばこれ岸」日本では禅僧の悟りをひらく契機についてのべた言葉だが、中国では悪人が罪を自白して新生を求めることをいう。

個有名詞になると字からはまるで想像がつかないものがたくさんある。字引をひらいて変わっ

たものをあげてみよう。

「長生庫」<sup>チアンションク</sup>とはながいきの倉ではなく質屋のこと。質屋は普通「當」<sup>タン</sup>といって、壁に大きく書かれた店である。なかにはいると、大てい鉄格子の向うにいやな老板<sup>ラオバン</sup>（老闆とも書く、店の主人）がひかえていた。中共になってからは禁止されたのか、昨年中国を訪れたときには一軒も見あたらなかった。

「長的」<sup>チアンテイ</sup>はながい的<sup>まと</sup>ではなく、生まれつきとか、容貌。「彼女は顔がきれいだ」は「她長的好看」<sup>タヤンテイハオカン</sup>である。

「場師」<sup>ワアンシ</sup>は相場師かと思うとさにあらず、植木屋である。

「金花菜」<sup>チンホアサイ</sup>家庭料理（家常便飯<sup>チアチアンピエンファン</sup>）でよく油炒めにした菜がでたが、よく見ると日本ではその四つ葉を探して本のしおりにするクローバ。日本ではクローバをたべるのは馬かうさぎくらいだが、たべてみると料理法がうまいのか結構いただけ。料理は中国人のお手のものでどんな材料でもおいしいものをつくる。

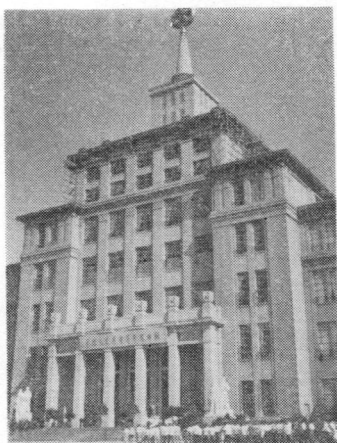
「酒母」<sup>チユム</sup>はこうじ、これは「酒媒」<sup>チユメイ</sup>ともいう。「媒」<sup>メイ</sup>は仲人のことで、これがなかだちになって米が酒になるからであろう。かと思うと「鳥媒」<sup>ニョメイ</sup>は罎<sup>おとり</sup>のことである。「結巴」<sup>チエーパ</sup>はどもり。かと思うと「結肉」<sup>チニール</sup>はこぶ。これは字義からも想像がつく。だが「氣海」<sup>チヘイ</sup>はちよつとわかるまい。これは空気の海ではなく、へその下一寸五分のところ。いわゆる「丹田」<sup>タンデン</sup>である。それからさらに一寸五分さがったところにある男性物は「雞巴」<sup>チバ</sup>であるが、上品にいえば「那話兒」<sup>ナホアル</sup>。

「氣死猫」字義でいえば「猫を憤死させる」これはねずみいらずのような棚の名である。猫がとびついても中のものはとれないから猫を憤死させる。そこで「氣死猫」とはなかなか考えている。

「氣阱」はエアポケット。阱という字は罅と同字で、罅は「おとしあな」だ。空気のなかにあるおとしあな。この罅の甲骨文字（後出）は罅または罅で、みればわかるように動物が穴におちいてるところ。穴の中には竹をするどくきってさしてあるから、動物が落ちれば大けがをして出られなくなる。現在ヴェトコンは穴の上に竹をわたし、草と土でおおって米国兵がその上を通るとおちこむようにしている。これこそ凶という文字の形。口の上に×をわたししている。したがって凶とは思いがけない災難、不吉、悪事を意味する。中国語で「あいつはとてもはげしいやつだ」は「他是很凶」である。凶のかわりに兇の字をつかってもよい。「病很凶」は病氣危篤。しかし「凶手」ははげしい奴ではなく、下手人ということ。凶手は兇手ともかく。兇の下の方には人という字である。すなわち兇は凶と人との合字で、凶（わるいこと）を行なう人という意味だ。

## 中国文字 形成の原理

中国語を学習していくと、日本でつかっていない漢字がたくさんでてくるが、中国の造字法の原則を知っておくと、非常におぼえやすい。ここでごく簡単に説明しておこう。その原則はだいたい「象形」「指事」「会意」「形声」の四つで、この外



新中国紀行<sup>③〇</sup>  
観衆の列。

北平、軍事革命博物館の全景と

に「転注」「仮借」というものがあるが、この説明はあまりに専門にわたり、同時にまた議論のあるところでもあるからここでは省く。

《象形》 そのものずばりを図でしめしたもの。



たとえば、○日、☾月、⌒山、ㄥ川、ㄥ水、⊕雨などはだれにも一目でそれとわかる。合体象形といって二つの象形を合わせてつくったものもある。𥝹は果で、これは果物の実の形𥝹と木、米の象形の合体象形である。文字のできたのは殷王朝の初期らしく、その都のあとなどから出る亀甲、獣骨に刻した象形文字を甲骨文字といって古文字研究の重要な資料となっている。かれら古代中国人の観察は非常にこまかく、尿という文字は㝱とかき、𦞙（大便をする）は𦞙と書くというように絵画的にもすぐれたものがある。また特徴のある動物は全体を書かずに特徴だけで表現する簡略法も用いていた。たとえば羊の甲骨文字は𦍋または𦍋であり、牛のそれは𦍋であり、いずれもその角の形の特徴をとらえている。

また牛のわきに男性生殖器の象形上をかいて𠂔（牡）とした。ここで重要なのは上であって、へんのけものではないから、へんは牛でもよし羊でもよし、鹿でもよい。したがって牡の原形文字は𠂔とも𠂔とも𠂔ともかいた。同じ造字の原理から牝は動物に女性生殖器の象形力を加えて、𠂔、𠂔（式は豕）ともかく。重要なのは力だから、けものはなんでもよいのだ。それ故羅振玉という甲骨文字研究の大学者は、「古人の文字は形を肖して以て意を示す、一筆一画に拘らざるなり、後世に逮び筆画に拘わり、形失われて意反つてくらし」（古人文字、肖形以示意、不拘於一筆一画、逮後世拘於筆画形失而意反晦……「殷商貞卜文字考」といい、だから後漢、許慎の「説文解字」（紀元二二二年にできた中国最古の字典）ぐらいをみていたのでは、漢字のほんの意味はわからない。ぜひ甲骨文字まで研究しなければいけないといっている。

たとえば祖という字は「説文解字」では「祖、示に従う。且は声なり」で、且は音をあらわすものにすぎないとされていたが、甲骨文字の祖の字は且または且であつて、示すへんはなかった。羅振玉によると、祖の字に示へんがはじめてあらわれたのはずっと後の斉子仲姜罇（こういう名前の金石文字、鐘や石碑に刻まれた古文字の刻まれた罇）だといっている（朱芳圃、甲骨学文字編）且は明らかに男性生殖器の象形で、祖先が男根によって表示されたといふことは、殷王朝時代にはすでに母系社会時代から父系社会時代にはいつていたことを示している。後から付加された示へんは「説文解字」によれば、上の二は古文の上という字で、天上を意味し、下の川は天から日、月、星がたれている形だという。中国語の文字とはかように奥行きがあり、はばのあるものなのだ。

血すなわち血は、象形であるかどうかについて異論がある文字だ。血祭りのとき、犠牲を盛る皿の上のもの、即ち血の象形であるという人もあるが、上の点は象形ではなくむしろ皿の上にあるもの、つまりここにあるものだということを目指す記号だという人もある。こういうのを「指事」という。

《指事》 「指事」についてはよく上、下が例にとられる。上下をしめすために昔の人はまず一で水平線をしめし、その上の方をしめすために上部に一を出して上とした、また一を下に出して下とした。ときには点を線にかえて・および・とした。のちには点と線の両方を加えて上下としたのである。刀に点を加えてその部分を示す刃、口の中央を線でつらぬいて真んなかの意味を表現した中という字。木(木)を二分した片(片)などはみな指事法による造字といえよう。こうして色々な文字ができるとこれらの文字を組み合わせて別の意味を表わすようになる。たとえば信という字、これは人の言の組み合わせで、人はうそをつかないものとされていた。したがって信実、信用の信(まこと)を意味した。もちろん人がうそをつかない昔にできた文字で、今なら「うそ」という意味になるかもしれない。穴という字に犬は突である。穴のそばを人が通ることがかると、中から山犬がぱつとび出した形を突然の突また突進の突としたところが面白い。こういうのは「会意」による造字である。

《会意》 貧などもそのよい例、これは分と貝の二字でできている。貝は昔は貨幣につかった。殷王朝の甲骨文字ではと書く。明らかに子安貝の象形である。これを中にいれると (貯)と

いう字ができる。貝は当時の貨幣であり、財産だった。それゆえ財、寶、資、資、売買、賞、賜、貨、賂、貴、すべて貝という字がはいっている。この貝の上に分を書いた字、すなわち財産を分けると貧乏になるから、貧の字が生まれたのだ。会意も木を二つ合わせて林、赤を二つならべて赫（かがやくの意）のような簡単なものもあるが、なかには孝のような複雑なものもある。これは老のなかの匕をとって子をいれ、子供が年老いた親を背おった形、すなわちよく親を世話することによって孝行を表現している。また姦や森のように同じ字を三つ合わせて特別の意味をもたせるのも「会意」である。女が三人よれば「かしましい」で、木が沢山あるところは森である。

《形声》 最後は「形声」である。これは一方に象形をかり、他方には他の文字の音をかりて組み合わせ、一つの文字としたもの。たとえば鳩は鳥である。鳩のような鳥は他にもたくさんあって象形だけでは表現がむずかしい。鳩の発音は九の発音と同じであるから、鳥のかたわらに九をつけて、その発音をかりて鳩を表現した。「説文解字」の鳩のところを見ると「鵯鵯也从鳥九声、居求切」とある。この鳥に从（從）うというの鳥が象形であること、そして九すなわち発音を示したものだということがわかる。その発音は声の下にある居求切という発音記号によって示されている。これは居 <sup>チユイ</sup> *chiu* と求 *chiu* の発音の前半 *ch* と求の発音の後半 *iu* をつなげたもの。すなわち *chiu* がこの発音だということである。同じく「鷺」の項「白鷺也从鳥路声、洛故切」もこれでわかるであろう。これは鳥が象形、路が発音。「説文解字」のなかにはこういうのが非常に多い。形声には左が象形、右が声、あるいはその逆、あるいは上下、内外というように各種



新中国紀行<sup>③</sup> この日革命博物館では、抗日戦争勝利二〇周年の展覧会をやっていた。武運長久と書いた日の丸や千人針などがならんでいるのはショックだった。

に分れている。今その主なものをあげておこう。

一 左形右声 江河語講姓嫁蚊蜂枯構扶招神碑砲。

二 右形左声 鳩鴿欣歌頭預觀視放故政攻雌雞郊

郡。

三 上形下声 蘭蓮雲霞草藻箭簞宇宙層屁峯崇

庭。

四 下形上声 婆娑常帛想忘慰慾煮照盛盟裝製警

譬。

五 外形内声 固圃圉園裏衷閭閱閣閼術匍匐。

六 内形外声 問悶興與辯辦辦齋齋。

中国の文字は「形声」という方法の発明によって急速に数が豊富になったことがこれでよくわかるであらう。

漢字はこういうようにどこまでも「象形」がつきまといっているのです、英語のように二十六文字の表音記号だけですべての言葉をあらわすことができるのとわけがちがって、文字をおぼえるだけでも容易な



ことではない。麤、覺、驪などをおぼえることは西洋人には神わざのように思われている。それに文字の数がべらぼうに多い、清朝の康熙帝が学者に編算させた康熙字典の字数は四万二千百七十四字であるから、中国人でさえとてもおぼえきれものではない。中国人に文盲の多い大きな理由は、この文字のむずかしさである。

そこで中共になってから文字を簡単化し、誰にも読み書きができるようにしようとした。その方法のひとつは、よくつかう「形声」文字の「形」をとり去って「声」だけにするのである。すなわち雲、電などは、象形部分の雨をとって雲を云とし、電を屯で表現している。その反対に「形」をのこして「声」をとりさつたもの、たとえば雖——虽、務——务のようなものがある。形声文字のつくりを発音の同じな他の簡単な文字にかえる方法もある。たとえば遠は運、運は运。また会意文字の一部をけずってしまったものもある。すなわち掃——扫〔巾をはずす〕、奪——夺〔佳をはずす〕。また意味を加意してまったく新しい会意文字をつくつたものもある。すなわち筆——笔、竈——灶。略字をそのまま活字にしたもの、すなわち東——东、為——为などがある。言べんなどはしで代表している。

昨年中国に旅行したとき、同行の人はみな相当の教育を受けた人びとだったが、この簡体文字を知らないためにごく簡単な標語もわからなかったらしい。まず「中国共産党万岁」この標語の「万岁」は万歳である。つぎに「总路線万岁」これは総路線万歳である。「中华」これは中華。「严陣以待来者必歼」これは敵陣を以て待ち来る者は必ず殲（みなごろし）にせんとよむ。そして

「殺敵」は殺敵、正直のところ簡体文字がつぎからつぎに出てくるとかえって文字が複雑になるような気がする。

中国語をやった人は袁と元の発音が同じなことを知っているから、遠を遠とよむことは前後の関係から比較的容易だ。だが新たに中国語をはじめめる人は、字引をひくとき、まず簡体字表で遠と遠とたしかめてから遠の字をひかなければならない。中国語をやった人ならたとえ進歩であることがわからなくとも、前後の関係から文章の意味がわかるようになる。簡体字表をそばにおいて中共の新聞でもよめば、とくに習わなくても一、二カ月で会得することができよう。しかし中国語を勉強するには簡体字だけをおぼえてその本字をしらないようなことではいけない。そんなことでは香港や台湾で出た本が読めないばかりでなく、古典も読めないことになる。中国語を勉強して古典がよめなければ真没有意思（まったく意味がない）である。

### 文字のたのしみ

漢字が上述のような造字法によってできているところから、中国では文字の構造を利用したことわざが多い。

「自大」<sup>ツタイ テイエツ</sup>点、臭啦<sup>ツウラ</sup>

この自と大をつないでそれに一点をつけると臭という文字になる。そこで「うぬぼれは悪臭ふんぶん」ということになる。これにはまた「自大<sup>ツタイ</sup>是一个臭字<sup>シュウジ</sup>」（自大はひとつの臭字）といういい方もある。

「忍字心頭一把刀、<sup>レンツ シントウイ ベトウ</sup>忍得住大英豪<sup>レンヂ ツータイインハオ</sup>」

(忍の字は心の上に一本の刀がある。それゆえ忍をつらぬききる人は大英雄だ)

「欠字壓人頭」  
チエツヤールンタウ

(欠という字は人の頭を圧する。欠とは借金のこと。借金があると人に頭があがらない)

「人貧双月少、衣破半風多」  
レンピンズワンユエシヤウ イボベンフwindウ

(貧乏だと人よりも一年が二カ月少ない。衣服が破れるとあたる風が半分多い) というのが表面の意味であるが、実際の意味は、貧乏すれば朋友が少なくなり、やぶれた衣にはしらみ(虱)が多いということ、なぜかという、朋友の朋は二つの月をならべた字、虱は風の半分をとった字だからだ。

第二次大戦中上海にガソリンがなくなり、タクシーのかわりに三輪車があらわれた。料金が黄包車よりもはるかに高いので、上海人は一人ではなかなかのらない。そこでやがて乗合い三輪車が現われてきた。同じ方向に行く客を二人拾って料金をやすくしたのである。客はおたがい知らない同志だから、男同志ならともかく、男と女だとばつがわるい。この人情の機微をとらえて、中国の新聞にこんな記事がのった。男女の乗客ははじめのうちは顔を合わすまいとおたがいそっぽを向く、その形は北の字である。やがて男の方が話しかける形が比の字、しかし女はそれに応じてよいかためらっている。やがて女の方が話します、これが翼の字、やがて二人が意気投合し仲よく話し合うようになる形が門、そして車を下りる頃、二人は比翼をならべてホテルの門にはいる、さあそれからはなんという字か、と結んでいた。答えはかいてなかったがおそ



新中国紀行③ 軍事革命博物館の庭前。撃ついたアメリカの飛行機の前に集っている群衆。

らく串の字であろう。簡体文字をならっただけの人には、中国語のこういう面白さはわからなくなる。

中国語の学習のたのしみ 中国語は日本と文字が同じでありながら、ちがう意味につかう

場合が多いので、中国人から見るとエロティックな滑稽がずいぶんあるようだ。

「御婦人便所」、婦人を御するのに便利なところ。この「御」するには説明はいらないと思う。

会社に行くとは人事課というのがある。「人事」には「人事を尽して天命を待つ」とはちがった意味がある。中国のことわざに「年五十に及んで門を杜し人事に処せず」とか、「馬鹿は結婚しても人事を解せず」(「歎子成家人事不懂」)とかいって、人事とは房事のことである。それゆえ人事掛りすなわち房事掛りとも解せられる。もっとも昨今の会社の人事掛りのなかには、外国バイヤーの房事掛りをやっているところもあるらしいから、これでもよかろう。

頼山陽の息子で安政の大獄のときに殺された頼三樹三郎の号は春水であるが、春水とは中国語では月経のこと。松井須磨子と中心した島村抱月、この抱月という文字は中国では、色事「四十 hands」のある形を意味する。正確には「懷中抱月」ホイツンペオユエ。これは日本ではなんとかの白という名でよばれ、そのものずばりのえげつなさがあるが、文字の国中国ではさすがに綺麗な表現である。

中国語でもその外の外国語でも、ならいはじめはすこぶる進歩がはやい。新しい世界を探検するような面白さにひかれて夢中で勉強するからである。だがしばらくしてその世界になれてきて、新鮮な感じがなくなると興味がややうすれ、進歩の速度がにぶってくる。それにだんだんむずかしい言葉がづきからづきにできて、勉強がいやになることさえある。つまりスランプになる。これが語学学習の危機なのだ。私はそういうときには、それまでよんでいた教科書や難かしい本を一時わきにおいて、友人からかりてきたその外国語の Y 本をよんだものである。そういう本は、わからない単語がかなりあっても、想像だけで結構気楽によめる。この種の本のなかにも Frank Harris の *My life and loves* や *Jardin Parfume* のような文章のきれいなものもあった。中国語をならったときにも同じような経験があり、一時そういう本を漁ってよみふけたものである。上海にはその種の本の古典でも現代ものでも廉いパイレット版がでていたので、有名なものはほとんど読破した。曰く「玉房指要」「洞玄子」「探戦春方」「三峰採戦」、それらのなかに「素女経」というのがあったが、文章といい内容といえけんらんなるものだった。

滝川政治郎博士は若いときに北京に遊び、その道でも苦勞したとみえて同氏の近著「倩笑至

味」のなかで色々面白いことを書いておられるが、そのなかで、平安朝時代の日本の貴族はみなこの「素女経」を学んで、そのなかに書いてあることを自分たちの性生活のなかで実行していたといわれている。この方面でも中国は日本に大きな影響をあたえたようだ。

ともかくなんとか工夫してたえず中国語の書籍に親しんでいることが大切で、そのうちには再び学習の意慾がもりあがり、中国語の面白さをしみじみ感ずるようになるものである。

## 第八章 中国の大衆運動と用語学的研究

新しい民衆の 終戦後の日本は、アメリカ一辺倒で、中国問題などはほとんどかえりみなか  
声と言葉 った。私たち中国研究者は中国の文献を手にいれることができず、情報はす

べてアメリカを通じた二番せんじだった。私はたまたま日本に來た中国人から現地の実事情を  
聞くだけで、くわしいことはなにもわからなかった。ところが中共軍が上海を占領する頃、よう  
やく香港からよくたよりがくるようになった。上海から香港に移る人が多くなってきたからであ  
る。とくに「申報」の社長だった陳彬龢氏チエンビンホーが香港に脱出してからは「人民日報」「大公報」  
「工人日報」などの中共刊行物を毎日送ってくれた。ともかく生まの材料である。私はそこにふ  
たたび北京や上海のにおいをかぐことができた。

中国の新聞紙をよむと、中共の方針や政策はよくわかるが、それにたいする中国人民の反応  
は一向にわからない。いや、それらしいものはあるにはある、が、みな毛沢東をほめたたえ  
たものばかりだった。たとえば柳亜子のかいた毛沢東へのつぎの献詩などはそのよい例であ  
る。



太陽出来満地紅  
我等有個毛沢東  
人民受苦三千年  
今日翻身樂無窮

太陽がのぼって地面はくれない。  
私達には毛沢東がいる。

人民は三千年くるしんだ。

が今日こそ生れかわったのだ。なんという楽しさ。

もしもこの詩にうたわれている気持が中国人大半のものとすれば、いったいわれわれの知っている中国人、つまり「おかみに税さえおさめれば、あとは自由自在の王様さ」(老百姓納了糧、便是自在王)とうそぶいていた、あの個人の自由を酷愛する中国人はどこへいつてしまったのだろうか。かれらは共產主義になんの抵抗もしめさずに同化されてしまったのであろうか。中国人の性格を知っているものには、それが大きな疑問だった。中共の政策にたいする中国民衆の反応を知るためには、まずその政策が民衆の間にどういう風に行なわれているかを知る必要がある。誰でも知っているように、中共はある政策を実行する場合にはかならず党組織を通じて国民を動員し、全国的な大衆運動を展開する。この運動の過程のなかにその運動独特の用語がうまれる。それらの用語の意味を検討すれば、その政策が民衆の間でどう行なわれたかが細かいところまでわかり、それにたいする民衆の反応もほぼ想像がつく。これが用語学的研究 terminological Studyだ。そのよい一例は毛沢東が一九二七年三月にかいた「湖南農民運動考察報告」である。

## 毛沢東の用語

毛沢東は湖南農民運動の実態を如実にしめすために、農民運動のなかでつかわれた特殊の用語をあげて、その意味を説明している。それをみれば、当時



の農民運動のありさまが目にかぶようである。

清算。チンスワフン

土豪劣紳トウハオリシエン（悪い地主）

の手にかかると地方の公金の大部分はかれらに食いあらさ

れ、計算は不明瞭になっている。今回多くの地方では農民たちが清算委員会を組織し、土豪劣紳をして公金を清算させた。土豪劣紳はこういう機関をみるとふるえあっている。（土豪劣紳トウハオリシエン看了ツエヤンダ這樣的チクワンチユクタイ機關就打顫フアクワン）

罰款。フアクワン

罰金。清算の結果公金ごまかしを発見したり、これまでに農民をくいものにした

り、または現在農会を破壊する行為があつたとすれば：農民はその罪名の下にその土豪劣紳にたいして罰金いくばくかを議決する。その額は数十元から数千元まで、それぞれがつている。（農会は農民協会の略、農民運動の中心組織）

捐款。チユアンクワン

寄付金徴収。金持ちで不正な地主にたいしては貧民救済、合作社、農民金融所の

創設、その他の必要のために寄付金を申しつける。寄付金も一種の懲罰であるが、罰款より

もやや軽い。（捐款チユアンクワン也是一種懲罰、不過較罰款為輕チユアンクワン）

小質問。シヤウチウエン

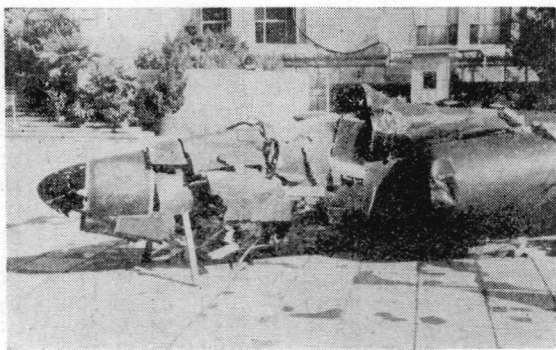
たまたま農会を破壊するような言行があつて、その罪状が比較的かるいものに

たいしては、多くの人びとを其の家によびいれて、あまり嚴重でない質問を發し、その結果によつてわび状をいれさせる。

大示威。ダイセイウエイ

農会を敵視する土豪劣紳にたいし、大衆をひきつれて示威運動を行ない、かれの

家にはいつて食事する。地主は豚をころし、米を出さなければならぬ。



新中国紀行③ 中共の鬼の首——打ちおとしたU2型機の残骸。北京を訪れるものはみなこのボンコツを見せられる

戴高帽子遊郷<sup>タイカオマウツ ユーシャン</sup>。高帽子をかぶせて農村をあるかせる。土豪劣紳に紙でつくった高帽子をかぶせ、その帽子の上に土豪だれだれ劣紳だれだれという文字をかく。かれに縄をつけてひきまわし、その前後を一大群衆がとりかこむ、また銅鑼をたたき、のぼりをあげて人の注目をひく。この処罰は土豪劣紳を最も戦慄させる。

クワンチンシエンチエンヨ

関進県監獄。土豪劣紳をとらえ、知事公

署の監獄に送って監禁し、知事をしてかれの罪をさばかせる。今も監獄は人を監禁することは前と同じだが、以前は紳士が農民を監獄におくって監禁させ、今では農民が紳士をおくって監禁させている。

(註——当時湖南の政権は国民党と農民協会の勢力下にあったのでこういうことができた)

チユエチユ

驅逐。土豪劣紳のなかで罪状のはっきりし

ているものは、農民はかれらを驅逐せずに捉えるか、あるいはころしてしまふ。かれらは捉えられ殺されるのをおそれて、省外にげ出す。

重要な土豪劣紳は農民運動が県内に発達しつづあるときには、ほとんどにげてしまい、その結果は駆逐と同じになる。

槍斃<sup>チャンピー</sup>。

銃殺。これは非常に大きな土豪劣紳にかぎり、農民と各界の民衆が共同で執行する。すなわち農民と各界の人民が県長にせまって監獄からひき出し、農民自身が手を下して銃殺する。たとえば寧郷の劉眼は農民が直接打ち殺した。——かような大劣紳大土豪一人を銃殺すれば、全県が震動し、封建的残滓の悪人を肅清する上にきわめて効力があつた。

（這樣の大劣紳大土豪、槍斃一個、全県震動、於肅清封建余孽、極有効力）

（以上はいずれも抄訳ではあるが省略部分は非常に少ない）

これらの用語とその意味だけをも、当時湖南の農民運動のはげしさが目にうかぶようである。それゆえ陳伯達<sup>チエンパタイ</sup>——毛沢東のアドバイザーの一人——などは、『湖南農民運動考察報告をよんで』という彼の著書の冒頭で、その読後感をこうのべている。

「この文章のなかには事実がなんと生き生きと反映していることか。熱情がなんとあふれるばかりに表現されていることか。一つの句、一つの文字にまで革命と労働人民の無限の歓喜と、反革命と食人的搾取者にたいする、和解することのできない仇恨がしみとおっている」

毛沢東が無意識にやっていたこの用語学的研究を、現在の中共事情に適用すると、中共の大衆運動について、これまで知られなかった面がはつきりあらわれてくる。それら諸運動のなかで、民衆の間にかわされる言葉、その言葉のなかに多少ともあれ、民衆のその運動にたいする反応を

みることができるので。

民衆運動のことば これは下手な説明に時間をついやすよりも一つ实例に「愛国衛生運動」と愛国衛生運動の場合 として説明してゆこう。

日本人が中国にいつて一番おどろかされることは、蠅や蚊がいなくなったことであろう。北京を訪問した最初の日本人は、北京には蠅が一匹もいなくなつたという帰朝談を発表した。それは少し大げさだつたが蠅、蚊、しらみ、のみ、南京虫、鼠など、人間に害をあたえるものが非常にへつたことは否定できない。それはみな愛国衛生運動<sup>アイクオウェイション</sup>の成果なのである。

この運動は一九五二年一月、米国の飛行機が朝鮮戦場の某所に五〇〇キロ爆弾を投下したところからはじまる。不思議なことにその爆弾は不発におわつたばかりか、なから蚊や蠅の大軍が続々とび出した。中共側は早速その数匹をとらえて顕微鏡検査を行なつてみると、コレラ菌やチブス菌がわんさといつていたという。ときは朝鮮の嚴寒期、零下何十度という氣候のなか、しかも爆弾のなかにつめられた蠅や蚊が地上に落ちた爆弾の反動で死にもせず、空中にとびあがつたというのは、とても信じられない話だが、ともかく中共の新聞にはそう書いてあつた。のみならず、一九五二年五月八日の大公報には、その細菌戦に参加したというジャン・キンという米国人捕虜の写真と自白の手記が発表されている。そしてこれをきっかけにして、この年一九五二年の三月からいわゆる「愛国衛生運動」がはじまつた。衛生運動を米国の細菌をはこぶ蠅、蚊、その他一切の害虫害獣を撲滅せよという愛国心とむすびつけたところがみそである。

日本ではこの運動の結果だけが大きくつたわって、運動がどんな風に行なわれたかはあまり知らされていない。中共側では、中国人は解放によって「翻身」(人間が精神的に生まれかわること)しているから、蠅を絶滅することは、自分のためばかりでなく国家社会のためだという自覚、いうなれば「我は人びとのために、人びとは我のためにする」(我為人、人為人)という自覚をもっている、だから蠅や蚊がいなくなったと説明している。日本には中共ファンが多いので、中国人は人間が変わったと、その提灯をもつのに大わらわだった(中国語で「提灯をもつ」は拍馬屁)。

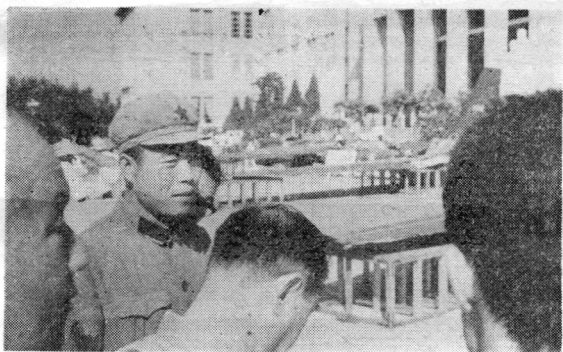
だがこの運動はほんとに中国人の人が変わったために成功したのであるか、それとも、社会的圧迫のもとに行なわれたのであろうか、いったいそのどっちが強かったのか、ともかくその運動の実態を検討してみよう。

愛国衛生運動はまず隣組、(北京では「胡同」<sup>フートン</sup>居住民会、上海では「弄堂」<sup>ロンタン</sup>居住民会)の集会で、それぞれ「愛国衛生公約」を議決することからはじまる。「愛国衛生公約」がきまると、居住民各自はそれを実行する責任を負わなければならない。その公約の内容はこうである。

「朝五時ベルをならす。周囲を掃除する。正午は蠅をたたく。午後七時から蚊をはたく。

八時には集会をもち、相互に成績を批評し合う。」

(早上五時揺鈴、打掃環境、中午拍蒼蠅、下午七時開始打蚊子、八時開會評比、十時後捉鼠)



新中国紀行② U2型機の残骸を前に説明する中共兵士。階級章は星も筋もなく、階級はわからない。兵隊はみな同じである。

この公約のなかの「周囲を掃除する」という項目をとってみよう。これが住居の内外の掃除なら日本でもみなやっているから別に珍らしいことではない。だがこの国のこのときの掃除はそんなまやさしいものではない。この運動のなかから「八浄<sup>ベフエン</sup>」という用語が生まれている。「八浄」とは子供、各自の身体、部屋、屋敷内、道路、台所、便所、家畜小屋の八つをいつも清潔にしておくことである。部屋の掃除にしても、ただ掃くだけではない。「箱をひっくりかえしながもちをたおす」<sup>フアンシェン</sup>（翻箱倒筐<sup>タオチエー</sup>）というほどの大掃除を毎日やらされた。それも自分の家の屋敷内だけではなく、家の門外の道路の掃除も責任を負わされる。もし路上に犬の糞でもあって、それを隣組の委員に見つけられたら、すぐに誰々は「不愛国<sup>ブアイクォ</sup>」ときめつけられる。東北地方の農村地帯では掃除の範囲はさらにきびしく、つぎの九字を実行することが要求されていた。

- 掃<sup>ソウ</sup> (塵を掃いたりはらったり)  
 刷<sup>シュア</sup> (布でふく)  
 洗<sup>シ</sup> (水であらう)  
 晒<sup>シヤイ</sup> (日にさらす)  
 墊<sup>タイエン</sup> (水はけの悪いところを掘る)  
 圈<sup>チュアン</sup> (かこう)  
 蓋<sup>カイ</sup> (あななどにふたをする)  
 遷<sup>シエン</sup> (うつす)  
 改<sup>カイ</sup> (改造する——便所などを——)

(これは実はもう一字あって、十字だったがその字を忘れてしまった)

誰の管轄にもはいっていないところはどうか、かような場所の清掃は学生たちが「自発的」に、日曜日の休みを返上してそれに当る。動員された学生たちは隊伍をくみ、どら<sup>どら</sup>をたたいて行進し、蠅の発生しそうな場所、たとえば北京では竜王廟<sup>ロンワンミヤオ</sup>、曬糞場<sup>シヤイフエンツァン</sup> (有名な糞尿処理場) のようなところで、うじをとる競争をする。中国語でうじのことを俗語で「金剛」<sup>チンカン</sup> (日本でしらみのことを「観音様」とよんでいるようなもの) と呼んでいるが、学生達は金剛狩りの戦果を、学校にかえってから「評比会」<sup>ビンビハイ</sup>をひらいて相互に批評し合う。成績の悪いものは毛沢東思想の学習が十分でなかったということにむすびつけられて批判される。

衛生運動の対象はもちろん蠅ばかりではない。「五滅<sup>ウメイ</sup>」といって蠅、蚊、虱、蚤、南京虫<sup>ナンキョウチュウ</sup>（臭<sup>クサ</sup>虫<sup>ムシ</sup>）の五つを絶滅しなければいけない。そこで街ぐるみの組織的大掃除が必要となる。

この年の八月某日に行なわれた上海老閘区<sup>ライツァチユイ</sup>（南京路の永安公司一帯）の大掃除についてのべよう。この日はこの地区の一万余の商店々主とその家族、三万余の店員、三千余の屋台店の商人たち、朝四時から起きて、それぞれの店の前に待機していた。先施公司という百貨店の屋上には先施樂園という演芸場があるが、その演芸部員たちは前夜芝居がはねてから徹夜で夜明けを待っていた。かれらを中心にこの地区に十二の「鼓動隊<sup>フツドン</sup>」（笛<sup>フエ</sup>をふき、どら<sup>ドラ</sup>をたたいて激励する隊）が組織されていた。大掃除は朝五時どら<sup>ドラ</sup>を合図にはじまった。帚<sup>ほうき</sup>木で街路をばく一隊、バケツで水を流す一隊、大きなたわしで路面を洗う一隊、誰もかれも大声で歌いながら大奮闘である。隊伍のなかに働きぶりが少しでも気のぬけたものが見えると、後から「鼓動隊」の拡声機で「誰々同志もつと先氣を出して！」とどなられる。この地区にある二十九の街路には七十二の「臨時救急<sup>リンシキウキツ</sup>站<sup>ステーション</sup>」（臨時救急<sup>リンシキウキツ</sup>站<sup>ステーション</sup>というのはステーションの意味で、中国語ではよくつかわれる。汽車の停車場が火車<sup>ホウワ</sup>站<sup>ステーション</sup>、バスの停留所が公共汽车站<sup>クシコングチツツァン</sup>、トラクター・ステーションが施拉機站<sup>トウラチツァン</sup>）ができ、気分<sup>クンフン</sup>のわるくなつたものや怪我をしたものを収容する。まるで街全体が戦争気分である。一応掃除がおわると、その名も日本と同じの「主婦聯<sup>ツウフリエン</sup>」が組織する「勸説隊<sup>クワンセツタイ</sup>」があらわれて、ここが悪い、あすこがきたないと文句をつける。そうするとまた掃除をやり直さなければならぬ。

この大掃除戦争は朝の五時からはじまって午後二時におわり、三時には区民の「評比大会<sup>ピンビタイホイ</sup>」が



開かれて、各街区、各人の掃除ぶりについて講評が行なわれた。それがすむとただちに「骨やすめ」と考へるのは素人のあさはかさで、この衛生運動は「衛生と生産を両つながら誤まるな」<sup>クニイロシロシロフアンラン</sup>（衛生生産両不誤）というスローガン（口号）の下に行なわれたので、「評比大会」<sup>ビシビシ大会</sup>がおわると、足腰がどんなに痛もうと、それぞれの職場（中共では職場の持ち場にも「崗位」<sup>カンゴ</sup>）へ歩哨の場所という軍隊用語をつかつているVにかけつけなければならなかった。この「愛国衛生運動」中に、衛生小組（小組は小組織の略、衛生隊チーム）が各胡同居住民組織のなかにうまれた。衛生小組はそれぞれの胡同の各家庭に、人数に応じて毎日捕獲すべき蠅や鼠の数をわりあてた。各家庭では、主人公は仕事に出るから、その役目を課せられたのはたいてい老太太（おばあさん）<sup>オバアサン</sup> 太太（おくさん）<sup>オクサン</sup> 小孩（こども）<sup>コドモ</sup> である。それゆえ主婦がおかず（小菜）<sup>セウサイ</sup> を買いに市場に行くときには籠のなかにかならず蠅たたき（蒼蠅拍）<sup>フアンインベ</sup> をいれていった。蠅もはじめのうちには小孩や老太太でも一日二、三十匹はらくにとれた。だがだんだん少なくなり、一家にわりあてられた責任数をとることがむずかしくなってきた。とつた蠅の死がい<sup>シガイ</sup>を責任の数だけ衛生小組に見せないと、「不愛国」<sup>フアイクニョク</sup>だときめつけられるおそれがある。それがおそろしいのでお互いに蠅の死骸を融通し合っていた。それでも足りないときはやむをえずやみ市（黒市）<sup>クニ</sup>で死んだ蠅を買ってきて責任数をみたした。やみ市の蠅の値段は一四百元（幣値切下げ前の貨幣で、日本金十五円にあたる。つまり現在の人民幣一円の百分の一）に達した。そのためにやみ商人はひそかにうじを飼って、蠅を製造していたといわれる。蠅はまだよいが鼠となるとつかまえるのが容易ではない。鼠は非常に利口な動物だから、



新中国紀行③ 台湾はわが領土……だからかならず解放しよう、という意味のスローガン。

仲間が一度かかったわなにはなかなかかからない。そこで当時いろいろ新しい捕鼠新兵器が生まされた。曰く「穿鼠箭」(釘とゴムでつくった、鼠が餌をたべると串さしになる仕かけ)、「吊鼠架」(竹と馬の尻尾の毛をつかい、鼠を宙づりにする仕かけ)、「迷鼠陣」(鼠がはいると出口がなくなる金あみ箱)等々。当時この捕鼠戦争でこれらの新兵器の一つを使つて、もつとも多くの獲物を捕獲したのは無錫の方慧琴衛生小組である。この小組は「翻底網」(鼠がのると底がひっくり返つて、かごの中におとす仕かけ)をつかつて、一晚のうちに一千四百十五匹の鼠をとつた。この戦争の全国的戦果についてこの年の十月一日、中共の衛生部長李德全女史は全国の捕鼠数四千四百余万匹、蠅、蚊、蚤、虱の捕獲量二億余万斤(数でいえば百九十余億匹)と報告した。昔の中国人の不潔さを知っているものにとってこれは驚くべきニュースであつた。

生産活動を 私がここにあえて「戦争」といふ支える軍事用語 う言葉をつかつたのは、中共当

局があらゆる大衆運動について国家の安危にかかわる一種の戦争であるかのようなイメージを国民にあたえようとしたからだ。中共は建国と同時に朝鮮戦争でアメリカと戦い非常時体制の下にあらゆる運動を促進してきた。同時に一方これらの運動はすべて挙国一致体制を促進するためのものでもあった。それゆえ愛国衛生運動は単なる衛生が目的ではない。中共当局はそれを通じて大衆を集団活動になれさせ、軍事訓練を与えようとしているのだ。したがって大衆運動のあらゆる場面に軍事用語がつかわれているのも不思議ではない。愛国衛生運動、その他の大衆運動にもつぎのような用語が用いられている。

突撃隊——大衆運動で特別の任務遂行を命ぜられた一隊。

機動隊——一定の仕事にたずさわらず、ある重点工作に派遣される一隊。

轟趕隊——これは北京で大規模な雀狩りが行なわれたとき使われた言葉で、物音をたてて雀を追いはらう一隊。

弾弓隊——同じく雀を射つ一隊。

音響隊——おとをたてる一隊。

捜捕隊——搜索し捕獲する一隊。

大衆運動だけではなく、平和産業のごく普通の仕事にも軍事用語が用いられている。たとえば「仕事」という言葉は中国語では「工作」であるが、これは「戦闘」とよばれる。そして労働者が「戦士」、職場が「戦線」、職場における各自のもち場が「崗位」といわれている。生産目

標に接近することは「進軍」<sup>チンチュン</sup>、ある生産に努力を集中することが「突撃」<sup>トゥツ</sup>、数千の労働者を必要とする生産場面が「大戦役」<sup>ダーチャン</sup>、計画と労働者の大量動員によって完全な成功を約束されている生産場面が「殲滅戦」<sup>チエンミチヤン</sup>、生産における自然の障害を克服することが「対天宣戦」<sup>トワイティエンシユアンチヤン</sup>、労働対象の性質を知ることが「掌握敵情」<sup>チヤンウオ ディチン</sup>（敵情をはあくする）である。「技術大軍」<sup>チシユターチュン</sup>「労働大軍」<sup>ラウトンターチュン</sup>「文化大軍」<sup>ウエンホァターチュン</sup> 中国語を文字通り軍隊と考えてはいけない。それはそれぞれ「技師、技術家の大集団」「労働者の大集団」「文化人の大集団」と解さなければならぬ。

一九五八年の「大躍進」運動で、「組織の軍事化」「作業の戦闘化」が強調されるようになる、軍事用語はますますひんぱんに使われるようになった。これらの用語は本来の意味からはなれてしまい、特殊の意味をもつようになったので、中国語を学んだだけでは意味がつかめなくなっている。まず二、三の実例をあげて説明しよう。

誓師大会<sup>シターホイ</sup>——本来の意味は戦いを前にして將軍と兵士が勝利を誓いあう儀式であるが、今では主として工場の労働者が生産目標を達成することを公約する集会を意味するようになってきた。

戦表<sup>チヤンビヤオ</sup>——本来の意味は戦争宣言だが、今では工場と工場、生産チームと生産チームの間で行なわれる生産競争において、一方の生産単位が自分たちはこれこれの生産額をこれこれの期間に完成すると宣言する、その宣言を「戦表」といつている。これにたいして他の生産単位がその挑戦に応ずる。そこで生産単位間の生産競争がはじまる。

比武——本来の意味は「武芸の仕合」だが、今では生産競争をこうよんでいる。一定期間の生産競争ののうち各生産単位の成績が工場の高い場所に掲示される。このような場所を「英雄台」といつている。

擂台——これは昔は武士に一騎打ちの勝負をさせる場所を意味した。今では「英雄台」と同意義。生産成績表にはしばしば「革命英雄比武擂台」という文字が見られる。

田間比武——農業の生産単位間で行なわれる生産競争。

紅旗手——「比武」で勝利をえた労働者または工場には紅旗（あかい旗）が授与される。紅旗を受けた個人労働者を紅旗手といい、非常な名誉とされている。

日日紅——月月紅。年年紅。毎日生産レコードを達成して紅旗をうけることが日日紅、毎月毎年のそれが月月紅、年年紅である。

満堂紅——毎日、毎月、毎年生産レコードをあげている工場、人民公社は「満堂紅」、これは本来の意味では建物中が紅色でみちみちているということ。そこで「日日紅、月月紅、年年紅、満堂紅」の「四紅」を目標とする運動が展開され、「四紅運動」といわれている。

掛帥——本来は軍隊で元帥の印綬をおびることであるが、今ではすべて指導権をにぎることである。

政治掛帥——大躍進運動のとき党幹部が生産の指導権をとった。これが政治掛帥である。もっと具体的にいうと、本来その企業経営の指導権はマネジャーや技師の手にあったが、





新中国紀行<sup>②</sup> 北京、人民大会堂の正面。上部の国章は直径5メートルという巨大なもの。設計から竣工までわずか10月しかかからなかったという。

それを党幹部の手に掌握し、党幹部が企業を動かした。かれらは企業経営には素人であるからその生産計画は経済法則に反するものが多かった。そこで企業経営の専門家から批判が起こった。これにたいして党幹部は客観的な経済法則よりも主観的能動性が重要だとし、専門家の考え方を「経済掛帥<sup>チンチキグワシュイ</sup>」だといって批判していた。鈔票掛帥<sup>シャウピョウグワシュイ</sup>——鈔票はお札のこと。これでは説明は、おかねが指導権をにぎること。これには説明がある。社会主義の分配制度は「各自が能力をつくし、労働に応じて分配する」(各尽所能、按劳分配<sup>ガクジンソノノブ、アンラオフンペイ</sup>)といっている。ところが中共ではソ連とちがって、労働に応じて充分に報酬を出すことをそのままの形では認めていない。全体として物資が非常にとほしい国であるから、労働に応じて分配すれば、あるものはよい生活ができるが、その反面あるものは食えないという現象がおこるからである。それゆえこの国では生産の刺激要素として物質的インセンティブよりも、精神的インセンティブ

を重んじている。精神的インセンティブというのは思想教育である。党では無条件の按労分配制は労働の量によって一厘一文を争うお金本位になりやすい「鈔票掛帥シャオピヤオクワシユアイ」と批判している。そこで無錫市の内燃機廠の大字報にはつぎのような俚謡がかかれた。(一九六〇

年一月十九日「人民日報」)

政治掛帥ツエンチ クワシユアイシユアイチ 帥旗紅ホン

紅旗挿ホチ ツアン 在胸アィフワイ 海中ハイツワン

我為ウオーウエイ 人人レンレン 為我レンウエイウオー

幹起カンチ 活來ホーライツ 真輕エンチン 鬆スン

政治掛帥の指揮旗は紅く、  
紅旗はひろい胸のなかに立っている。  
われは人のため、人びとはわがためにはたらけば  
仕事をしてもらったく気持ちがよい。

鈔票掛帥シャオピヤオクワシユアイシユアイチ 帥旗黑ヘ

一頭鑽イトウチヤン 在錢眼ツァンアイチエン 中ツワン

我為ウオーウエイツ 自己チ 人為レンウエイウオー 我

走在ツォイツァイ 人前レンチエン 臭哄哄ツォンツァンツァン

これはもちろん黨員が書いたものであろう。これを見れば毛沢東がなぜソ連の修正主義を

さらっているかがわかる。

書記掛帥シユウチ クワシユアイ——政治掛帥の結果、各省の産業を指導する最高指導者は省の党第一書記である

から、この情態を書記掛帥、すなわち党書記の政治指導第一主義とよんでいる。

上述の諸用語を検討すれば、中共の諸運動がそのなかで行なわれているアトモスフィアを知ることができよう。それは緊張にみちみちたもので、中共のよくつかう言葉でいえば「暴風驟雨」<sup>シューユイ ツウシャンリム</sup>「秋霜烈日」<sup>シュウシュウ リツ</sup>のアトモスフィアである。人民はその空気の中ではいやでも「克己奉公」<sup>クキフンゴン</sup>（個人主義を克服し、集団の利益のために努力する）「克勤克儉」<sup>クチンクチン</sup>（労働をよるこび節約をよるこぶ）の態度を示さなければならぬのである。このような環境、それにたいする民衆の反応を考えることなしには中共の政策のほんとの意味は理解できない。

**米国の用語学的研究と私の観察** それゆえ中共の政治、経済を勉強する場合、大衆運動のなかに生まれた用語を説明することなしには、まちがった見解にみちびかれやすいのだ。それに

もかわらず我が国の中共研究では、用語学的研究はこれまでほとんど行なわれていなかった。米国では最近このメトードによって中国研究にすぐれた効果をあげている。カリフォルニア大学の国際研究センター Center for Chinese Studies, Institute of International Studies, University of California, の現行中国語問題委員会 Current Chinese Language Project Committee が出した報告書などにはなかなかいいものがある。たとえば T・A・シャー氏の労作「下放運動の用語学的研究」 A terminological study of the Hsia-Fang Movement.

この中国語問題委員会のメンバーは、日本でもよく知られているロバート・A・スカルピノ教授やフランツ・シューマン教授など、東洋通が多い。シューマン教授には一昨年来日したときお会いして、一タ中国語で中国問題を語りあった。正直なところアメリカの経済学者があれはどう



まく中国語を話すとは思わなかった。それにつけても日本の中国研究のありかたには一抹の淋しさと不安を感じざるをえない。現在日本の中国研究者には古い中国帰りはもう数えるほどしかいなくなつた。それに若い研究者で中国語と中国人についての基礎知識のできてゐるものは、これまた暁天の星のようである。そのために中国研究は今では正直のところアメリカにおされぎみである。これについてひとつの実例をあげてみよう。

中国で人民公社運動がはじまると、日本ではすぐにソ連のコルホーズやソフオーズのイメージを頭においての説明が行なわれ、その規模がソ連よりも大きいところから、「中国はソ連より一歩さきに共産主義に突入するのではないかと思わせた。」(朝日ジャーナル・第一巻第三号八頁)というようないさまだつた。だがその当時からアメリカの多数の中国研究者と、少数ながら日本の古い中国通は、現在の時点において物質的インセンティブのない生産労働を、中国人の大多数がうけいれるとは考えなかつた。それゆえ人民公社は生産面においては期待された成果があらうばかりか、おそらくは国民のサボタージュに会うだろうといつてゐた。(たとえば波多野乾一氏は一九五九年三月こういつてゐる。「このような人民公社革命の重圧に、中共大陸の人民ははたして堪え得るであろうか」《中共の人民公社》序文)

ところで人民公社の生産面における実際の成果はどうだったろうか。人民公社がはじまつたのは一九五八年の八月であるが、その翌五九年の暮には中共の食糧饑饉がつたえられ、六〇年六一年と饑饉はますます深刻となり、六二年の五、六月には約十万の避難民が香港に殺到したのであ

る。中共当局はこれは四年連続の自然災害にあるものだといわけているが、一九六〇年の九中全会は「一九六〇年の農業生産計画は達成されなかった。そのため一九六一年は基本建設の規模を適当に縮小して、発展のテンポを調整しなければならぬ」といって人民公社の組織の縮少を暗示している。人民公社は現在では規模からいえば郷に<sup>（郷）</sup>あたる公社が生産計画をたてるのではなく、以前の字にあたる農家二、三十戸の生産隊が生産計画をたて、それを実行している。こうして当初の形態は事実上失敗し消滅してしまった。昨年中共旅行の際、北京郊外の和平中阿友好人民公社を參觀して豚舎のすばらしく大きく、かつ整然としているのに感心したが、同時に豚舎の割合に豚の少ないのにはおどろかされた。目分量でいえば豚は四坪くらいの面積に一匹あたりくらいしかないかった。中共は一九五七年以来、養豚の奨励につとめてきた結果がこれである。農民は人民公社の共同養豚をきらって養豚をやらなくなってしまったのだ。それゆえ中共は一九六一年にやむをえず「共同飼育と個人飼育の二本建てにするが個人飼育に重きをおく」方針をうち出した。それでもまだ豚の飼育数は減少する一方だった。ところが六二年頃から農民に許される自留地が拡大されると、農民は自家肥料をつくる必要からこぞって豚を飼い出した。この間の中国旅行では食品市場も參觀したが、豚肉や鶏肉はかなり豊富に出まわっていたように見えた。これらの豚や鶏の大部分、正確に言えば豚肉の八五パーセント、家禽の九五パーセントが農村全耕地の五―七パーセントにすぎない自留地から生産されているのだ。この事実を知ってもなおいわずに「人民公社」は成功しているといえるであろうか。

## 第九章 毛沢東と中国語

毛沢東の使った  
ことば

毛沢東はその文章のなかによく中国人の間で知れわたったことわざや古典のなかの文句をいれる。いやこれは毛沢東ばかりでなく、中国の文人がよく用いる修辭法だ。毛沢東はこうすることが、文章を中国の「老百姓」<sup>ラオバークン</sup>（民衆）によりやすく、親しみやすくするコツだと考えているようである。彼がよく使っていることわざを二、三あげてみよう

（いずれも毛沢東選集から）

「一着不慎、満盤皆輸」<sup>イツオフツエン、マンパンチエユ</sup>（将棋では一手一手に注意をおこたると、全局面のまけになる）毛沢東はこのことわざを戦争の一面面と全局面の関係にあてはめて各段階の戦争に注意しないと全局をあやまることをいつている。

「世上無難事只怕有心人」<sup>スシァンクワンズツバークンシンレン</sup>（その志のある人さえあれば、この世間にむずかしいことはない）毛沢東は革命戦争は戦争を学習してからはじめるのではなく、戦争をやりながら戦争を会得するものである。

「老百姓」<sup>ラオバークン</sup>と「軍人」<sup>ジュンレン</sup>の間には距離のあることは事実であるが、その距離は決して萬里の長城で



はない、その志さえあれば、それを消滅することは、むずかしいことではないといっている。

「東方不亮西方亮、黑了南方有北方」これは中国がいかにも広大であるかをいったもので

「東方が夜明けでなければ西方が明けている、南方が暗ければ北方がある」という意味である。

「吃一塹長一智」塹はおとし穴であり、したがって思わぬ挫折を意味する。つまり一度挫折を食うと、その人はそれから教訓をうけ、智慧をますということである。毛沢東はこのことわざ

によって唯物弁証法の知識と実践との関係を形容している。すなわち人間はつねに実践における失敗を通過しつつ知識を進歩させてゆくものだとのべているのだ。

このことわざには色々なちがったいい方がある。「吃虧長見識」これは人間は損をすること

に見識がたかまるという意味。虧というのは元来欠損のことであるが、同時に動詞として頼ると

いう意味もある。そこで「虧了你」は「あなたに力にたよって」、「君のおかげで」という意味

につかっている。また「虧心」というと心、すなわち良心にかけるということから「良心に恥じ

る」という意味になる。「私は決して良心に恥じることはいたしません」というのは「我決不做

虧心事」である。また「なに、いくら損したって命に別条はないよ」というのは、「吃虧吃不死

人」で、これには二つの「吃」を使いわけた面白さがある。また「吃虧是便宜」というと「金銭

上の損などはやすいものさ」ということになる。

また現在の中国でよくつかわれていることわざに、「吃飯忘記種田人」（ご飯をたべているときは農夫を忘れる）というのがある。これは「なにことも本をわすれたがるもの」ということにな



るので、中共では土地改革で昔の小作農が土地を与えられて、生活ができるようになったのはみな共産党のおかげだ。今、くらしが楽になったからといって、昔のくるしい時代のことを忘れてはいけないということにつかっている。

同じく「吃軟不吃硬」(字義は軟らかいものをたべ、硬いものはたべない) という言葉もよく使われている。これは思想改造のとき人間が頑固で婉曲な勧告ならきくが、強烈な批判はうけつけないことをいう。

「吃軟」というと私は「吃豆腐」という言葉を思い出す。これは豆腐をたべるのではなく、女に冗談をいつてからかうことである。私が中国語をはなすのが楽しくてたまらなくなったのは、このお豆腐をたくさんたべたためかも知れない。こういう会話では辞書にでない単語がいくらかでもでてくる。たとえば十三点、この言葉を諸君らの中国語の先生にきいてみたまえ、この意味を知っている人はそれ程多くはないはずだ。近頃日本ではオーバーという言葉がつかわれている。「彼女は少しオーバーだね」これを中国語に訳すと「她是<sup>グレイアムスチン</sup>一点十三点」である。十三点は十三時ということ(点=時)。前の一点はすこしという意味。

中国では一般には鉄道時間をつかっていないので、十二時が満刻でそれ以上の数え方はない。十三点はその十二時をこえているから、「オーバー」という意味になる。

「放白鴿」(白鳩を放つ) という言葉も面白い。自分の女房なり愛人なりに意をふくめて金持の妾にやる。金持はそんなことは知らないから仕度金を出したり、指輪を買ってやったりする。そ



新中国紀行⑦ 北京の公園の朝。太極拳をやっている人びと。この健身運動はおどろくほどさかんである。

のころ合いをみはからって白い鳩はもとの巢に戻って行くというしくみだ。もっともその金もちが悪いやつで、はじめから相手の悪だくみを知ってやくざをつかって反対におどしつけ、女をうばった上に仕度金をうばいかえすこともある。こういうのを「黒吃黒」くろがくろを食う、つまり悪が悪をくうという。

「床工」床はベットであり、工は工作、すなわちしごとであり、アルバイトである。だがこれはベットをつくるということではなく、「床上的工作」つまりベットの上のアルバイトの方である。

八股文と余談はさておき、毛沢東選集に新八股文はその外にも多くのことわざや

格言がある。中共の刊行物でよく引用されているものに「秀才不出門、全知天下事」(秀才は門を出ないですべて天下のことはわかつている。)

「路遙知馬力、事久見人心」(路遙かにして馬の力を知り、事久しくして人の心を見る)(人間はながくつきあっているうちだんだん本心がわかる。)

「老鼠過街人人喊打」(ねずみが街をよぎれば人々は声をあげてうちかかる)

「下筆千言離題萬里」(書けばかくほど本題からはなれてゆく)などがある。

毛沢東はこれらのことわざを適切な個所にうまく引用することによって、ともすれば生硬になりやすい論文を面白い読みものにさえしている。たとえば「路はるかにして馬の力を知り、事久しくして人の心を見る」は、「論持久戦」のなかで、遊撃戦争が長期戦争のなかで徐々にその効果を發揮することを説明するために引用している。また「鼠が街をよぎると人々は声をあげてうちかかる」は、「反对党八股」のなかで引用した言葉だ。八股文というのは、古い中国文体の一形式で、韻をととのえるために無意味な言葉を加えた文章である。毛沢東は党の決議文などが形式主義になっているのを党八股といい、これを清算しなければいけないと主張していた。毛沢東の文章の特徴を示すために、その部分を原文とともにあげてみよう。

「我々は主観主義と宗派主義(セクト主義)には反対しているが、党八股も一緒に清算してしまわなければ、その両者はかくれ場所があるから、まだそこに身をかくすことができる。

われわれが党八股も一緒に打倒してしまえば、主観主義と宗派主義に最後の「王手」をかけて、この二つの怪物の正体を暴露し、『ねずみが街をよぎれば人々は大声をあげてうちかかる』というように、この二つの怪物を容易に消滅することができるのだ」

「我們反对主観主義和宗派主義、如果不連党八股也給以清算、那它們就還有一個藏身的地方、它們還可以躲起來。如果我們連党八股也打倒了、那就算对於主観主義和宗

バイツワイ ツイホータイ チアンイチチュン ロンテ ツエリアンコ クワイウ ユエンシンピル  
派主義最後地『将一軍』弄得這兩個怪物原形畢露、  
イェチュルン イェロウミラ  
也就容易消滅了。」「  
『老鼠過街、人々喊打』這兩個怪物

この文章は日本のいわゆる左翼インテリなどの手にかかる、おそらくカナ書きの外国語が沢山まじった、どうにもよみづらいものになりそうだ。しかし毛沢東はごらんのように、民衆の間によくしられた二つの俗語をつかつて、農民にもわかるようなやさしい文章にまとめあげている。

毛沢東が「反対党八股」のなかで強調しているのは、共産党員が文章を書く場合に、民衆から言葉をまなべということだ。それは人民の語彙が非常に豊富で生きいきして活潑（「生動活潑的」）だからだといっている。そして日本のインテリのように（とはいっていないが）、中国語のなかにむやみに外国語をとりいれてはいけないともいっている。だが同時に外国語のなかにもよいものがある。たとえば「幹部」という言葉も外来語（ロシア語のカードル）であつてこういう内容のある新鮮な言葉はどんどんとりいれて、中国語を豊富にしなければいけないといっている。『我們還要多多吸收外國的新鮮東西』

それと同時に古典のなかの言葉で現在までなおその生命をもっているものを学ばなければいけないともいっている。

（我們還要學習古人語言中有生命的東西）

前にもいったように今の中国では、毛沢東のいった言葉がそのまま大衆の言葉になるシステム



の下にあるから中国語のなかの外来語は非常に少なくなってきた。だが、その反面いたるところにかっこつきの共産党独特の省略語やことわざ、俗語、古人の格言が多くなってきた。なかには使用があまりに頻繁なので、感銘がうすくなり、新しい「八股文」が生まれつつある感が深い。私はこれを「毛沢東八股文」とよびたい。この関係において既出のT・A・シャー教授はこうのべている。

「現在の中国語ヴォキャブラリーは『大衆からきたもの』よりも遙かに多くのものを含んでいる。中国共産党は結局革命的指導の仕事を課せられており、人民はその指導の下に共産党の言葉をはなすことをまなばなければならない。その目的は、ある世界観のための骨ぐみ作業として言葉をつかうことである。もしも毛沢東のような指導者が『大衆化』Popularizationのために人民の言葉をつかうならば、人民も『かれら自身を向上させる』努力をおこたるところとできない。この大衆化と向上化の間に幸福なバランスがとれたとき、はじめてエリートと大衆の間に『共通の言葉』が生まれるのである。」

民衆を組織することば 中共で党が大衆運動をおこすときには、まず学習会をひらいてその運動の趣旨を説明し、その運動でつかう用語の意味を統一する。この関係は毛沢東が一

九四九年三月十三日に書いた「党委員会の工作方法」のなかのつぎの文章を読むとよくわかる。



新中国紀行<sup>39</sup> 北京の羊肉料理店。中共ではまだ回教徒が多いので、豚肉を出さない料理店もある。

『互通報』すなわちこれは党委員会の各委員が、それぞれに知りえた情況をおたがいにして合ふことである。これは共通の言葉（『共同之語言』）を得るためには非常に重要なこと

である。ある人はそうしていない。それは丁度老子が『鶏犬の声相聞えても老死するまで相往来しない』といっているようなものだ。その結果おたがいの間には共通の言葉がない。われわれの高級幹部のなかにはマルクス・レーニン主義の基礎理論問題についてさえちがった言葉がある。その原因は学習がまだ不十分なことである。現在党内の言葉は比較的一致しているが、しかし問題はまだ完全に解決していない。たとえば土地改革のなかで、なにか『中農』で、なにか『富農』であるかにたいし、まだちがった解釈がある。」（毛沢東選集第四卷一四四二頁）

こういうわけで、毛沢東はまず黨員同志に「共通の言葉」（『共同之語言』）でかたることを要求し、そうさせるために「学習」をおこない、その運動の用

語の意味を正確に、強烈にかれらの頭につめこんだ。それでもなお「共通の言葉」をかたらないものは下のレベルにおとされたり除名されたりするから、党員はいやでそれをおぼえこまなければならぬ。こういう訓練をうけた党員が大衆の間にはいり、そこでもまた学習会をひらき、「共通の言葉」をつたえる。そこで大衆はいやでも共産党の用語をおぼえこまなければならぬのだ。そしてできるだけ多くそれをつかうことによって、自分が党の政策にいかん忠実であるかを示そうとするから、大衆運動のあることに奇妙な用語が街にはらんする。丁度こんどの戦争中、日本の民衆の間に「八紘一字」というわけのわからない言葉が市井にはらんしたように、現在の中共には当時の日本と同じような社会環境が存在している。つまりごく少数の首脳者の間で語られた特殊な言葉が、党组织によるあらゆる集会でくりかえされているうちに、国民生活の中にもちこまれ、各自が毎日お題目のようになえなければならぬ言葉となってしまうのだ。

政治文献から生れる新　毛沢東がこの演説のなかでつかった二、三の言葉は、今では国民の間  
しいことは　― 抓 ― で新しい流行語になっている。その一つが抓（ツォイ）という言葉だ。この字

は爪でつかむということで、「ひつつかまえる」というつよい語勢がある。毛沢東が「把握」（にぎる）という言葉よりもこの言葉をよくつかうのはおそらくそのためであろう。

毛沢東は「抓（ツォイ）の用い方についてこういつている。

「しっかりとつかまえる」ということは、党委員が主要仕事を『つかまえる』ばかりでなく、かならずしっかりとつかまえないといけないということだ。どんなものでもただしっかりと

かまえて、すこしも手をゆるめないうちにのみ、はじめてポイントをおさえることができるのだ。つかまえる方がしっかりしていなければ、つかまえないことと同じである。

(要「抓緊」就是說、党委对主要工作不但一定要「抓」而且一定要「抓緊」什麼東西只有抓得很緊、毫不放鬆、才能抓住、抓而不緊、等於不抓」(選集一四四三頁)

この言葉から「抓」(つかむ)「抓緊」(しっかりつかむ)「狼抓」(つよくつかむ)という単語が広汎に用いられている。それからまた他の言葉とむすびついていてつぎのような用語が生まれてきた。

「抓生産」字義だけからいえば生産をつかむことであるが、それではなんのことかわからない。では、それをちよつと説明しよう。

一九五七年の春頃からソ連の雪どけやハンガリー革命の影響から、中共にも民衆に若干自由を与えた方がよいという考え方が生まれてきた。そのひとつのあらわれが、「百花齊放、百家争鳴」時代、これを略して「鳴放」時代といっている。これは「百花が一斉にひらくように、多くの人がそれぞれの意見を自由にのべるのがよい」という意味で、毛沢東はどんな意見をのべても「言者無罪」(言うものに罪なし)とはっきり声明した。しかし知識階級の共産党にたいする不満は、中共当局の考えていた以上にはげしいものがあつた。そのためにそれから一、二カ月の間新聞紙上には毎日中共を批判するはげしい発言がつづいた。発言者はかならずしも中共に対して悪意をもつものばかりではなく、中共の立場を是認しつつ、その欠点に善意の批判を加えるものも多かつ

た。だが中共当局は、自分にたいする批判のあまりのはげしさにおどろいて、わずか一カ月間で、「言者無罪」の前言をとりけし、自党を批判したものを「右派」<sup>チーパイ</sup>として糾弾しだったのである。

だがそれと同時に自分でも深く反省した。かれらは共產黨員が民衆から憎しみをうけていることを知って、黨員再教育のために、かれらを民衆の間に生活させ、生産労働に従事させることによって、かれらの身についた官僚主義のさびをおとさせようとした。これが「下放」<sup>シーフア</sup>である。つまり中央から地方の農村におくりこむこと、こうして「下放」された幹部が大衆（主として農民）の間にまじって生活しながら、大衆の生活上の困難を一緒に解決してやることができるようになることを「抓生活」<sup>ツァア ションハ</sup>といい、生産をうまくやることを「抓生産」<sup>ツァア ションツァン</sup>といい、さらにその間に毛沢東思想を学習して自分のものとすることを「抓思想」<sup>ツァア シヤン</sup>といった。この三つの「抓」<sup>ツァア</sup>を実現するところが、下放幹部の理想であり、これを「三抓」<sup>サンツァア</sup>といった。

「抓」<sup>ツァア</sup>からまた深抓、抓得深（深くつかむ）、細抓、抓得細（注意深くつかむ）、実抓、抓得実（実際をつかむ）、全抓、抓得全（完全につかむ）、抓得早（はやいうちにつかまえる）などという用語がつかわれている。

こうして中共の幹部が農村の組織、たとえば人民公社の農民の間にはいつて生活するようになると、前からの人民公社の幹部たちとの間に権限の境界について問題がおこることがある。新たに「下放」されてきた幹部の地位が高いと、その権限がつよくなって、それまでの幹部の権限を無視する場合があるからだ。これが「乱抓」<sup>ヘンツァア</sup>（みだりにつかむ）という現象だ。一九六〇年七月



二十二日の人民日報は『乱<sup>ヘケツツウ</sup>抓<sup>ツ</sup>』は決して許すべきではなく、すべてが制度に従って行なわれなければならない」と警告している。

新中国紀行<sup>39</sup> 北京にある中国最古の図書館。蔵書数は720万冊で中国最大。いかにも中国らしい門がまえである。

政治文献から生まれる新しい慣用語  
その外にも毛沢東の上述の論文のなかの言葉で、現在中国人の間で慣用語となっているものが沢山ある。「ピアノのひき方をまなべ」（「学<sup>シエーホー</sup>会弾鋼琴<sup>イタンカンチン</sup>」）ピアノをひくには十本の指さきをみな動かさなければならぬ。ただし、ただ十本の指を動かすのではなく、その動かし方には一定の「節奏<sup>チエツオン</sup>」（リズム）がなければいけない。つまり十指がおたがいにうまく「配合」しあって、はじめて美しい音色がでるのである。党員はするように、自分の中心的な工作と、その他の工作をうまく配合し、全体をして効果をあげるようにしなければいけない。それが「ピアノのひき方を学ぶ」ことである。

また「胸中数あり」（「胸中<sup>シエツオン</sup>有数<sup>ユース</sup>」）という言葉もそうだ。共産党員のある情況にたいする工作を

行なう場合には、まずその情況について具体的、統計的分析をしなければいけない。たとえば土地改革を行なう場合には地主、富農、中農、貧農が、それぞれ人口のなかにどの位のパーセンテージを占めているかを知らなければいけない。こういう工作対象にたいして統計的分析を行なうことが「胸中数あり」だと毛沢東は説明している。その文章のなかでいっているもう一つの言葉「精兵簡政」<sup>チンビンチンツツエン</sup>（字義は精兵主義で政治を簡単にすること）も広くつかわれている。その意味は会議、講話、演説、文章、決議案はみな簡単明瞭にして、要点をつかまなければいけない（簡明扼要<sup>カンメイアツヤウ</sup>）ということである。

この言葉から「精簡」<sup>チンカン</sup>という言葉となり、「精簡機関」<sup>チンカンキカンの</sup>とか「精簡会議」<sup>チンカンギギ</sup>とかいう用語が生まれている。機関すなわち行政機関を簡単化することと、会議を簡単化することである。

一九五七年二月に行なわれた毛沢東の演説「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」のなかで、毛沢東はこういっている。

増産節約運動のなかで、われわれは機関を「精簡」にして、幹部を「下放」することを要求する。それによって相当数の幹部を生産にかえらせることができる。

これから「機関」ばかりでなく、繁雑な無意味な会議を整理しようとする運動がおこった。それまで「三多会議」<sup>サンダークハクイ</sup>という言葉があるように、会議のために田舎から幹部たちが都会にあつまってくると、きまって宴会がひらかれ、芝居をみせ、贈りものをおくっていた。それゆえ幹部はなるべく多くの会議に出席して、街でよい思いをしようとして会議の多いことをのぞんだ。こういう



現象を消滅させるために、会議をできるだけ整理し、度数を少なく、会議時間を短かくし、実際に効果のある会議だけを聞くことになった。そこで「少開会、開短会、開好会」のスローガンが生まれたのである。その結果つぎのような名前の会議が出現した。

碰頭会、「碰頭」というのは頭をつきあわすという意味である。つまり二、三人の人がちよつと頭をつき合わすだけの短時間の会議ということになる。これは幹部が「抓生産」で農民と一緒に生産にたずさわったので、無駄な時間をはぶくため役所の会議室でやる会議を簡略化し、要件をごく少数の人達だけの打合せ会ですませようとしたのである。多くの場合碰頭会は「現場会議」といって生産の現場で行なわれた。現場会議はまた「田頭会」（農場の現場で行なわれる会議）とか、「田頭民主会」（前者に同じ）とかいう名でよばれた。このような会議は主として農民と幹部だけの会合であつたから、「團結会」とか「諸葛亮会」とかいわれた。「諸葛亮会」というのは、「三人の皮つくりがあつまれば諸葛孔明になる」（三個臭皮匠、合成一個諸葛亮）という中国のことわざからきている。この諸葛亮、すなわち諸葛孔明のことで、三国志のなかにあらわれる智略縦横の大軍師である。毛沢東はこのことわざを一九四三年に書いた「組織起来」という論文のなかで引用し、それゆえ幹部は大衆から「学習」しなければいけないといっている。

党と民衆のことは こうして現代中国語のなかには党の意図を内包する数多くの「共通の言葉」スローガン が民衆の言葉として発達しつつある。それは外観的には人民のなかから生まれたようにみえるが、実際には人民の自然の気持からでたものではなく、党の意図がおりこまれ



ているものだ。新中国になってから多くの新しいことわざや格言らしいものが生まれているが、そのなかにはそのようなものかなりまじっている。今中共の刊行物にあらわれた二、三の俚語の実例をあげてみよう。

「田タイエン地ディ当タン戰チャン場ツワン、鋤チュウ頭タウ当タン刀トウ槍チヤン、糞フン桶トン当タン陣ツワン頭トウ、完ワン成ツワン千チ斤エン糧チン」(田畑を戦場とし、鋤を刀槍とし、糞桶を陣地として一畝一千斤の糧食をつくりあげよう)

前にもいったように、農夫は田畑を戦場のようにして、土との死闘をくりかえしている。ここでは日夜苦しい労働がつづき、ちつとやそつとの風雨ではやすむことはできない。

「大ダイ雨ユイ大シユ雪エフ不フ停テイ工クン、叫チヤ苦オク怕ペ冷ラン是シ懶ライ蝕ツワン」(大雨大雪なんのその、そのまま仕事をつづけよう、苦しいさむいというやつは、骨のずいまでなまけもの)

これでは「格言」だかスローガンだかわからない。こういう格言的スローガンを例記してみると、

「手シユ勤オチン、脚チヤ勤チン、一イ年ニェン四ス季ツツ吃ブ勿アチン尽」」

(いそがしく手をうごかし、脚をうごかしていれば、一年四季たべものにはこまらない)

「水スイ利リ搞カオ得テ好ハオ、畝モー畝モー千チ斤エン稻チンタオ」

(水利をうまくやれば一畝一畝千斤の米ができる)

「老ラオ年ニェン学シエ黄ホワン忠ツワン、青チン年ニェン学シエ子ツ龍ロン、実シ現エンス四ス十ティ条アオ、人レン人レン齊チ行シ動ント」

(年よりは黄忠を学び、青年は子龍をまなび、農業綱領四十カ条を実現するために人人は一斉に行動す)

る。)

黄忠は「三国志演義」に出てくる老忠臣、子龍は趙子龍で劉備の忠臣、四十条は一九五七年に発表された農業發展十二カ年計画の四十カ

新中國紀行④⑤ 北京郊外にある和平中阿人民公

社。

条である。中共は農民の仕事を「三国志」のな  
かにある勇ましい「戦闘」にたとえ、各人がそ  
のなかの英雄のように行動することをのぞんで  
いるのだ。

民主辨社 方向好、改進技術產量高  
ミンツベンシエーフアンシアンハオ カイジンツツ シツアンリアンカオ

(民主的人民公社運営の方向はよい、技術を改善し  
生産量はたかくなる)

これらのスローガンは古くからあった農諺 (農事  
についてのことわざ) とよく似ている。たとえば、  
「小孩要奶娘、種田要水倉」シャオハイヤオナイニヤン ツォンティエンヤオスヰツワン (子供はお母さんが  
必要、田作りには水だめが必要) 「冬除一根虫、多收  
萬粒糧」ワンリユウリアン (冬の間に草一本分の虫をのぞけば、万粒の米  
がよけいにとれる) 「田要冬耕、児要親生」タイエンヤオトンケン アルヤオチンシヨシ (田は冬  
の間に耕やすことが必要、子供はほんとの親が必要) こ



れらはみな昔からの農諺である。同じく養豚のことをうたったものを例にとつてみると、

「戸増養生猪、家家増加收入」  
フフツオンヤンシヨツエ、チャーチャーツオンチャーシェーユ

（戸毎に生豚を増殖すれば、家々の収入は増加する。）

「猪吃百様菜、只怕懶婦不去找」  
ツエツ、バヤンツァー、ツォバライフ、ブ、チュイツォア

（豚はどんな野菜でもたべる。ただなまけものの農婦がそれをさがさないのがこまりもの）

この二つのうち前の方は中共のスローガン、後の方が以前からあった農諺であることは「一看就明白」（みればすぐわかる）であろう。

人民日報のつたえ つぎに以上にみてきた毛沢東のいわゆる「共通の言葉」が最近の中国刊行物の「民衆の詩」の上にどうあらわれているかを検討してみよう。

最近の人民日報には「做人的工作、抓活的思想」という読者の投書欄ができてゐる。このなかの「抓活」という言葉はもちろん辞書にはない。抓が「つかむ」これはすでに説明しておいた。「活」というのは単語では仕事という意味もあり、同時にいきいきした活気という意味もある。しかし「仕事をつかむ」「活気をつかむ」ではなんの意味かわからない。この場合の「活」は毛沢東思想の「活学活用」の「活」である。したがって「做人的工作、抓活的思想」をひらく訳せば「人づくりの労働、実際に徹した思想」ということになる。

一九六五年九月七日この欄のはじめに「勝勿驕、敗勿餒」（勝っておごるな、敗けて気をおとすな。これもよく毛沢東のつかう言葉）という題で読者が書いてゐるが、そのなかに「世上無難事」

「怕有心人」(前出)が引用されている。

十月十日の人民日報には「一手抓農業、一手抓副業、農副業双豊収」(ひとつの手で農業をつかみ、ひとつの手で副業をつかめば、農副業双つながり豊収)とある。こういう農諺めいた題目をあげると、

「治水為革命種田為革命」

(治水も革命のためなら、田づくりも革命のため——十月九日人民日報)

「翻身靠革命、種田為革命」

(「我々が」生まれかわったのは革命のおかげであり、田づくりも革命のためである)

「一切工作都是革命」

(一切の工作はすべてこれ革命である——十月十三日人民日報)

この日の欄には大衆の間から生まれたつぎのような詩をのせている。これは党がくりかえしくりかえし宣伝する言葉が、大衆の言葉となることを示すひとつの実例であろう。

農民種田為革命

農民の田づくりは革命のため、

越幹渾身越有勁

満身の力をふるえばふるうほど活気づき、

脚踏大塞革命路

脚は大塞革命の道をふみ、

肩担千斤也嫌輕

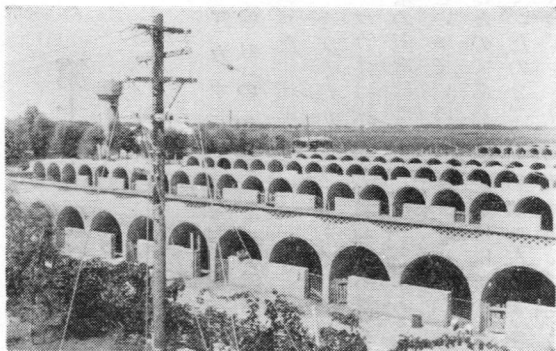
肩は千斤を担うてなお軽しとする。

革命崗位千百種  
大家都是為革命  
億萬紅心向着黨  
祖國富強萬年青

革命の持ち場は千差萬別、  
みんながすべて革命のため、  
億萬人の赤心、党に向えば、  
祖國は富強、とこしなえに青ん。

以上の詩は第一節と節四節だけで、二節は工人（プロレタリア）、三節は兵士の立場をうたったものだが、第一節と同じような構造だからここには省略した。このなかの「大塞革命」という言葉は説明がいる。山西省の大塞という地味のわるい土地の生産大隊が発憤して、その土地の基本的改造を試み、革命的な生産をあげることに成功した。それ以来中共当局は「大塞に学べ」というスローガンのもとに全国の農民を鼓舞している。九月九日の人民日報にも「大塞精神」という言葉がみえる。これらの言葉だけをみても現在の中国々内の緊張した空氣がわかり、すべてをかけて世界革命のために猪突猛進するすがたが浮んでくる。

十一月十一日の人民日報の見出しに「毛主席怎樣說、我就怎樣做」（毛主席がこれこれをやれといえ、我々はただちにそうする）というのがある。現在の中国は、「一心為革命一切為革命」（全国民が一心一体となって革命のために、一切をあげて革命のために——十一月九日）という拳国一致体制（一億總動員ならぬ七億總動員の体制）にはいつているのだ。そして毛沢東が一言、世界革命戦争を宣言すれば、七億の国民は「平和をまもるために」「不怕苦不怕死」（苦をおそれず死を



新中国紀行④ 和平中阿友好人民公社の豚舎。豚小屋の立派なわりに豚が非常に少ない。

おそれず) 明日にでもそれに突入せざるをえないのである。

だがこれにたいする人民の反応はどうであろうか。十一月十九日の人民日報は、幹部のなかには少しでも生産が増加すれば、それに満足してそれ以上の成績をあげようとしないうるものがあるといひ、つぎのような言葉があることに注意をうながしている。

「上シャンユーマオシエン游冒険、中ツワンユーベオシエン游保険、下シアーユーウエイシエン游危険」この意味は上位の成績を争うのは冒険、中位の成績をあげるのは地位の保険、下位の成績に落ちるのは危険ということである。

人民日報のあげているもうひとつの流行語は「得タクオツエクオ過且過」、すなわち、現在がすこして行けるのならそのまますこして行けということ。国民にこういう思想がある以上、中共の精神教育強調をたんに世界革命——対米戦争——にたいする積極的準備と見るのはあやまりであることがわかる。

## 第十章 用語からみた新中国発展史

——ターミノロジカル・スタディー——



マカオから 私の観察 私は一九五一年から一九五五年にかけて毎年のように香港、マカオにでかけた。壮年時代のほとんどを中国で過ごした私としては、せめてその近くに行つて中国のにおいをかぎたかったのである。

マカオは広東省を貫流する珠江が南支那海にそそぐところ、孫中山先生の生まれた広東省中山県の南端につき出した半島にある、面積四平方哩人口十五万の街で、中国人は昔からここを澳門<sup>アオマン</sup>といっている。「澳<sup>アウ</sup>」とは船つき場のことで、ちょうどこの半島は港の門にあたるからこう呼ばれたのであろう。ここには昔から海神阿媽<sup>アマ</sup>（海の女神）の古い廟があり、それで阿媽澳<sup>アマアウ</sup>とよばれていたのを、ポルトガル人がなまってマカオと呼ぶようになったといわれている。一五三六年以来のポルトガルの殖民地で、ここは昔から公認の賭博場があったから、東洋のモナコの名もある。それゆえ口のわるい中国人はここを「曹達泡<sup>ツァオダバオ</sup>」ともよんでいる。苛性曹達の泡、つまりそのなかにはいると、なにもかも洗いざらいきれいとられる街という意味である。この街には中

共の購買機関「南光<sup>ナウ・グレンクス</sup>公司」というのがあるが、その職員などは毎日、中共領からモーターボートで出勤し午後の退けどきにはまたそれではまた中共にかえって行く。ともかく二百メートル幅くらいの河ひとつで、自由圏と共産圏の二つの世界がわけられているのだ。それだけに中国研究にはもってこいの場所だった。

私のいた一九五三年、五四年の当時も中国からこの河にとびこんで、泳いでわたってくるものがあつた。途途中で中共の警備兵に銃撃されて、手傷を負ったまま救助されるものも多かった。中国語に「吃屎<sup>チー・シ</sup>、喝尿<sup>ハク・ニョウ</sup>、跳城壕都来哩<sup>チョウ・シヤウ・ドゥ・ライ</sup>」(糞をくらひ、尿をのみ、ほりにもとびこむなんでもこいだ!)という言葉があるが、かれらは死を決して珠江にとびこむのだ。その数は毎日二、三十名だから、月にすると大へんな数であろう。それからずっと逃亡者の流れがつづいて現在にいたっている。昨年一月〜五月までの間に中国からマカオに脱出したものは一、四八四名で六、七月の二カ月だけでも九〇〇人、これら逃亡者の多くはフットボールの球をだいて珠江を泳いでわたってくる。それでもマカオについたものは幸福なほうで、途中で見つかつてつれもどされたり、射殺されたりしたものは数しれない。これは中共がその数を発表しないから、ほんとは「数不<sup>スブ</sup>過<sup>ク</sup>来<sup>ライ</sup>」(数えきれない)のではなく、「数不<sup>スブ</sup>清<sup>チン</sup>」(はっきり数がわからない)のだ。

こんな思いをしてマカオや香港にでてくる中国人の気持は、中国の実際事情を知らない日本人には理解できないであろう。かれらがマカオや香港にでてきても、そこでかれらに許される生活は、中共のなかにいたときとあまりちがわないものだ。それにもかかわらずかれらが死を賭して



珠江を渡ってくるのはなんのためであろうか。その死をおそれない勇敢さはいったいどこからくるのだろうか。

中国人の死生 中日戦争で中国人と戦った日本の兵士たちは口をそろえてかれらの死をおそれ観について れぬ勇敢さをたたえていた。しかし中国人として死をおそれないわけではな

い。誰でも死のこわくないものはない。だが饑餓、戦乱、貧、病などによる死亡率のたかさ、それを補う出産率のたかさによって中国人は、死を日本人よりはるかに身近かなものに感じてい

る。それゆえか中国には死に関する「ことわざ」が非常に多い。たとえば――

「人怕死、人怕死、人人怕死、人人死」  
レンベース、レンベース、レンベース、レンベース

（死ぬのはこわい、死ぬのはこわい、みんな死ぬのをこわがっている、だがみんなが死んで行くのだ）  
チヨシワイチンシ、トウマンタオ、チヨノイチンシ、マントウアン

「城外尽是土饅頭、城内尽是饅頭餡」  
スワワ、ナベシーマ、ランリ

（町のそとはすべて土饅頭、墓、町のなかはすべてそのなかにはいる餡ばかり。）

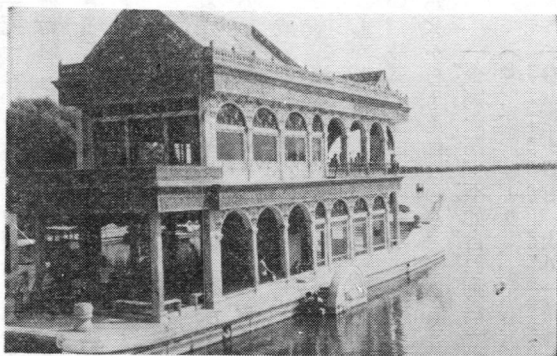
「死娃娃、那怕什麼狼哩！」  
スラスライ、スビエンラ

（死んだ小児は狼なんかこわがらない）

「死了死了一死便了」  
スラスライ、スビエンラ

（死んだ死んだ、死んじまえばなにもかもすむ）

この形でもっとひどいものに「你不死、狗吃什麼？」（おまえが死ななきや犬はなにを食うか）というのものもある。



新中国紀行④ 北京、頤和園の石の舟。この公園は西太后が杭州の西湖を模して作らせたものだという。

「人生<sup>レンシヨウ</sup> 千年<sup>チヤンニェン</sup> 總是死<sup>ツォウシス</sup>、樹<sup>シュ</sup> 高萬丈<sup>カウワンツァ</sup> 總是燒<sup>ツォンシシヤオ</sup>」  
 (人生が千年つづいても結局は死、樹が万丈の高さになっても結局はやかれる)

「人生<sup>レンシヨウ</sup> 一世<sup>イシ</sup> 草長<sup>ツァウアウ</sup> 一秋<sup>イツウ</sup>」

(人生は一生、草は秋までの命)

「人活百歳<sup>レンホーバクサイ</sup> 也是死<sup>イツス</sup>、不如早死<sup>ブルツァオス</sup> 早生<sup>ツァオチアウシヨウ</sup>」

(人は百歳いきてもやはり死ぬのだ。早く死んで早く生まれかわる方がよい)

く生まれかわる方がよい)

この「超生<sup>チアウシヨウ</sup>」すなわちつぎの世に生まれかわるといふ思想は中国にはよほど古くからあったとみえて殷の貴人の古墳などから小供の首をきって一緒にうめたらしい遺骨がたくさんでている。つまり子供の若い生命を死者の魂にうけつがせ、「超生<sup>チアウシヨウ</sup>」を早くさせようと考えたのであろう。上海で「長江泣血<sup>チャンチヤンチュエ</sup> 記<sup>キ</sup>」という話劇<sup>シバキ</sup>をみたとき、首をきられる男が殺頭<sup>サタウ</sup>ノ我不能超生<sup>ウオフノンチアウシヨウ</sup> 呵<sup>ア</sup>」(首をきられるんですって、それじゃ私は生まれかわることができなくなるんだ。)というせりふをきいたことがある。

「死」という言葉は中国語ではいみ言葉ではない。それは動詞と結合して「完全」という意味を動詞にあたえる役目をする。たとえば「忘死<sup>ワシス</sup>」は死ぬことを忘れるのではない、完全にわすれきること。同様に「累死<sup>レイス</sup>」は疲れきる。「死説<sup>シセウ</sup>」は頑固にいいはる。「死記<sup>シキ</sup>」は一生懸命に暗記する。

また死は形容詞としてそれが本来の作用を失ったことを意味する。たとえば「死井<sup>シチン</sup>」は水のかれた井戸、「死水<sup>スイ</sup>」はたまって流れない水。その外「死心<sup>シシン</sup>」はあきらめること。「吃死飯<sup>ツスフアン</sup>」は死んだ飯をたべるということではなく居候をするという意味。「死巷<sup>シカン</sup>」または「死胡同<sup>シフットン</sup>」は袋小路。成語は「死説活説<sup>シセウホウシユオ</sup>」(なんといいおうと)「死擺架子<sup>シバチヤウツ</sup>」(お体裁屋)「死店活人開<sup>シテエンホレンカイ</sup>」(倒産した店でも手腕のある人がやれば繁盛する)など数かぎりない。

しかし中国人はだいたい愛郷心がつよく、大ていは死ぬまで生まれた故郷をはなれたがらない。故郷の生活がどんなに苦しくても、かれらはそれが最良のものだと思っている。つぎのことわざからもそれはわかるであらう。

「金窩銀窩、不如自己狗窩<sup>チンウオイシウオ、ブルーツチカオワオ</sup>」

(金の家銀の家よりも、狗小屋のような自分の家の方がよい)

「在家千日好、出外一時難<sup>ツァイチヤチエンルハオ、ツウワイイスナン</sup>」

(家に居れば千日でもよい、外に出れば一刻でもくるしい)

「寧恋本郷一捻土、莫愛他鄉萬両金<sup>ニシレンベンシアンイニユエントウ、モアイタシアンワンリヤンチン</sup>」

（故郷のひとにぎりの土の方が、他郷の万両の金よりずっとこのましい）

「一千個好不如一個好、外面再好總没有家好」  
（イチエンコハオブムンイコハオ、ワイミエンフアイハオワオンメユチアーハオ）

（一千個のよいものよりも一つのよいものにかなわない、外がもっとよくても結局家はどよいところはない）

「家貧不是貧、路貧貧死人」  
（チャピンブシピン、ルピンピンシレン）

（家で貧しいのはほんとの貧ではない、旅で貧するのがほんとうの貧苦なのだ）

このような中国人がなぜ自分の故郷をすてて、知人もいないマカオや香港にのがれようとするのか。それはよくよくのことがその環境におこっていたからであろう。それがなにかは研究に値する問題である。

土地改革運動の実相 一九五二年頃日本のジャーナリズムはお隣りの中国で行なわれていた土地改革について、「土地分配」という経済的な面しか報道していなかった。だが

この運動の本当の意図は、むしろその政治面にあったのだ。中国共産党は国民党を倒して北京政権をたてたものの、これは社会革命の結果ではない。毛沢東は「銃のなかから政権が出た」（「槍桿子裏面出政权」）といっているが、武力で国民党政権を倒しただけで、北京政府ができてても社会の階級関係は国民党時代とちっとも変わっていなかった。鄧子恢（当時中南軍政委副主席）は、「われわれの革命は基本的には成功した。だが社会の基本的階級関係は決して変わっていない、

これはなんという危険なことだろう！」「ウオメンタクミン「我們的革命、基本上雖是成功了、但是社会的基層並没有變化、這是多麼危險的事呵！」ツエシドクマウエイシエンタスア」といった。中共が武力でとった政權を社会革命によって裏づけようとしたのが、この「土地革命」、さらにまたそれと相前後しておこった「鎮圧反革命運動」「三反」「四反」「五反」運動、「思想改造」運動、農業集團化運動（いずれもあとで詳述）等々一連の社会運動である。これらの運動は結局は中共政權に挑戦しそうな分子を社会からとり除く政治運動であった。それ故初期の運動では数十萬いな数百萬のものが惨殺されている。アメリカ労働総同盟（AFL）の自由労働組合委員会は一九五二年十月、毛沢東政權は過去五年間に、一四〇〇万人以上を殺した責任があるという推定數字を發表している。もちろん中共が部分的に發表した不完全な數字その他から推定したものである。が、ほんとの数はわからない。この動乱時代は隣組の密告や、ちよつとした嫌疑から生命が簡単にうばわれた「人間喪失」の時代であった。この頃ジャーナリズムは、新中国ではかがやかしい社会革命がおこなわれ、「階級友愛如兄弟、工農團結是一家」ユニアイルシユンテイ、カノンシトアンチエーシーチアア（階級の友愛は兄弟の如く、工農は團結して一家となる）といううな、平和な世界が開かれているかのようにつたえていた。それゆえ香港やマカオににげ出したものは国民党の殘党や、腹のつき出た地主たちばかりだといわざるをえなかったのである。

中共政權を安定させた上述の諸運動は、一九五〇年末から一九五四年の始めまで、正味三年間つづいている。これらの運動のなかに生まれた言葉がある以上、そのタミノロジカル・スタディーは、これまでつたえられなかった中共の真相をあきらかにするはずである。



新中国紀行<sup>④</sup> 万里の長城。北京市の西北方75キロほどの地点にある。壁の高さは9メートル。周代末期（今から2500年ほど前）につくられた。

まず運動のトップをきったものは「土地改革」だ。これは省略し「土改」といわれている。この運動は地主の土地を没収して土地のない、または土地の少ない貧農や雇農（農村で土地がなく、

人に雇われてくらしているもの）に分配する運動であった。毛沢東は江西ソヴェート地区にいた頃すでに「土改」を行なっている。抗日戦争中は地主を激発させないように、一時「土改」を停止していたが、一九四六年の夏、共産党の勢力圏では再びこの運動が再開された。しかし「土改」が全国的にはじまったのは「解放」（国民党の手から土地と人民を解放する意味で、革命の成功をいう）の直後、正確に言えば一九五〇年六月三十日「土地改革法」が生まれてからである。土地改革法は土地改革の大綱を示しただけで、その実行法はつぎのような大衆運動の形で行なわれた。

党ではまずその地方の幹部をあつめて土地改革の学習会を開き、農村諸階級の意味と、そのそれぞれにたいする党の方針をおしえこんだ。この学習がす

むと幹部はそれぞれ受け持ち区域の農村にはいつて貧農、雇農を中心に「農会」(農民協會)をつくった。農会はまた積極分子をあつめて、農民をそれぞれの階級に区分した。この区分は農民の運命をきめるものであるから、その手続きは比較的慎重に行なわれた。それは通常つぎの課程にわかれてゐる。

「講階級」 各階級の定義についての講習。

「評階級」 農村内の各個人についてそれぞれの階級別を評定する。

「審階級」 評定された結果の審査。

「通過階級」 審査の結果を大衆討議にかける。

「批准階級」 各個人それぞれの階級の最終的決定。

こうしてその農村内の農民がそれぞれ地主、富農、富中農、中農、貧農、雇農等に階級区分される。ただちに村民をあつめて訴苦大会という公開集會をひらく。これは字としては「苦を訴える集まり」という意味であるが、實際は階級区分によつて地主ときめられたものを「人民裁判」にかける集會であつた。その席上地主は、大衆の前に跪坐させられ、幹部にうながされて立つた貧農が、それぞれ立つてかれを糾断する。その結果罪状の輕重によつて、輕いものは「罰跪叩頭」(ひざまずいて民衆の前に頭をさげて謝罪させる)、「管制」(農民が地主の身柄をあづかり、直接行狀を監視してその「驕身」をはかる)ですませるが、やや重いものは「労働改造」(これは強制労働キャンプにいられて国営農場の開墾、鉄道敷設工事などの労働に従事させて「驕身」をはかる)におくつ

た。だが大ていの場合には会場の四方から「殺せ！」「殺せ！」という声がおこり、それが次第に大きくなって死刑の宣告で幕がとじた。そして処刑はその直後その場で行なわれた。毛沢東は「論人民民主專政」のなかで、「われわれは反動階級の反動行為にたいしては決して仁政は施さない」（我們對於反動階級的反動行為、決不施仁政）と断言しているが、幹部たちはこの言葉を「脊脊服脊」していることを身をもって示すために、民衆を駆って地主にひどい虐殺方法をとらせた。その際地主にたいして人道主義的感情や憐憫の情を示すものは地主側と見られたので、民衆は最後まで幹部とともに行動した。虐殺の方法も階級的憎悪をできるだけはつきりしめすように、色々工夫がこらされていた。その二、三をあげてみよう。

「大分家」  
ターフエンチアー  
ゾグースイトン

牛または馬四匹に処刑者の手足をしばって四つぎきにする。

「坐水桶」  
トシエー

処刑者を水桶のなかにおいて、上から熱湯をかけて殺す。

「凍雪梨」  
トシエー

処刑者はだかにして、身体を雪のなかに埋め、頭だけ出して凍死するまで放置する。

「望台湾」  
ワンタイワン

処刑者を高い木の上につるし、下から台湾を見るがいいといって綱をはなし地上におとし、これを死ぬまでくりかえす。

農民が地主にたいしてこういう残酷な刑を科したのは解放前に地主が農民にたいしてやってきた残酷な仕打ち——そのやり分については毛沢東が例の「湖南農民運動考察報告」で詳細に書いている——にたいする復讐の意味もある。が、農民の地主に対する憎悪の感情は中国ではソ連の



ように一般化していなかった。ソ連では地主軍と農民軍が戦い殺しあったのだ。中国では革命戦争でたまたまのは共産軍と国民党軍で地主と農民が直接戦ったのではない。それゆえ多くの地区では農民の地主にたいする憎悪感は党員によって急速かつ人工的につくられたものである。つまり農民は地主の処刑に興味をもつような理由を党によって与えられた。それは地主が殺されればその土地は勿論地主の家財、耕牛、農具、肥料、穀倉、ベット、椅子、机などすべて「門争果実<sup>トウツェンタオ</sup>」として分配される規定である。農民は「控牆脚<sup>ワチヤンヂャ</sup>」（土台をほりくずす）といって、前もって「闘争果実」がどの位あるか、地主が他にかくしているものがあるかないか、まで調査していた。闘争果実の分配がおわり、土地のない農民が土地の分配をうけて自作農として生まれかわること、これを「翻身<sup>フアンシェン</sup>」といった。そうなったのはいったい誰のおかげか、われわれは誰に感謝すべきか、「翻身感謝誰<sup>フアンシェンカンシエースイ</sup>？」「こういうスローガンの下に農民の政治教育が行なわれた。それから間もなく「慶祝翻身勝利大会<sup>チンツウフアンシェンシエリターホイ</sup>」というものが開催され、共産党への感謝の言葉がのべられ、農民は地主の家から没収してきた地券を焼いて、はじめて「土改」運動にピリウドが打たれたのである。

### 「鎮庄反革命<sup>ツェンジャフアンケム</sup>」

字義からいえば革命に反対する「反革命」者を弾圧する大衆運動である。これは一九五一年二月二十二日に発表された「懲治反革命<sup>チンチフアンケム</sup>」条例からはじまる。ここで反革命といっても、現実に共産党政権に挑戦する反乱分子ばかりを指したのではない。かつて国民党に関係したことのあるすべてのものが対象となっている。むしろその方が主なのである。厳格に

いえばこれはおかしな話である。それならば中国の「革命の父」孫中山先生や、かつて国共合作中国国民党員でもあった毛沢東、周恩来、朱徳なども一応問題となつてしかるべきだが、もともとこの条例が政治運動であるから、そういう法理は問題にならない。共産党政権に反対しそうな、社会的に力のあるもの、すなわち「曾騎在人民的頭上」(かつて人民の頭にたっていた) すべてのもものが当面の対象である。そういう人びとはそれまでになにかの形で孫中山先生以来の国民党に關係があつたからだ。

中共はその前年の暮に、正直に国民党との關係をのべれば「軽い罪はゆるし、重い罪はかるくする」といいだした。そこで過去において多少とも国民政府と關係のあつたものは進んでそれを告白した。ところが年があげるとともにおかしな民謡がはやってきたのである。文句は「天不怕、地不怕、只怕共產黨講寬大」(天地の間なものもこわいものはない、ただ共産黨が寛大をいうのがこわいだけ)。それから間もなく社会が急にさわがしくなった。どこの街にも「反革命」をかりだす弄堂居住民会が開かれ、「大張旗鼓鎮壓革命分子」(大いに旗鼓をならして反革命分子をやっつけよう) のスローガンのもとに、自分の周囲からかつて国民党に關係のあつたものを当局につき出したのである。こうしてあつまつた「反革命分子」については地主にたいする処置と同じような残酷な処置がとられた。重罪とみとめられたものは公開の「控訴会」ではせめられ、あげくのほてに虐殺された。これにたいして人民は——中共刊行物にのつているところでは——政府はあいつらを「よくぞつかまえた」(抓得对)「よくぞ殺った」(殺得好)「とてもゆかいだ」(大快人

心) といっていたという。

「三反」「五反」 つづいておこったのが「三反」「四反」「五反」運動である。「三反」と運動のあらしは三つの「反対」の省略で、具体的には賄賂反対、浪費反対、脱税反対である。

中共幹部の多くは陝西の山奥から大都会にできてきて権力の座にいたのであるから、たちまち都会の誘惑にとりつかれた。どこをみても欲しいものだらけであるが、それを買う金はない。

中共の幹部の給与は「供給制」「包乾制」「薪給制」の三つにわかれていた。供給制は「小灶」

といって特別の食事がつくだけではなく、住居、制服、日用品にいたるまで一切官給だ。党高級

幹部は大ていこの給与をうけていた。「包乾制」は配給米、夏冬二枚の制服で現物給与はうちきり

あとは月給でまかなう。「薪給制」は現物給与はなく、全部月給でまかなわなければならない。そ

れゆえ高級幹部といえども現金にはあまりえんはない。ここに着目した資産階級は、金でかれら

を買収し、脱税を許してもらったり、政府に高い品物を買わせたりした。もともとこういう関係

は、どちらからもちかけたのかはわからない。その頃「糖衣炮弹」(字義は砂糖の衣のついた砲弾)

という言葉がはやった。賄賂のことである。また「蜕化」という言葉がはやった。中共幹部が

「糖衣炮弹」にあたって腐敗することである。中共当局は実状の調査にのり出してみると、蜕化

した幹部があまり多いのおどろいた。そしてこれは資産階級が「幹部を腐敗させる反攻」であ

るといいだした。その結果としておこした大衆運動が「三反」運動である。この三反運動に「反

暴利」が加わって「四反」運動となり、その上に「国家の経済情報をぬすむことに反対」とい

一項目が加わって「五反」運動となった。「五反」の犯人——といっても中共官吏と一緒にお茶をのんだものまでも犯人にされた——は「老虎」<sup>ラオフ</sup>とよばれ、街々には「五反」の「打虎」<sup>タイフ</sup>（虎狩）がはじまった。その運動の主力となった「打虎隊」<sup>タイフタイ</sup>は商店員や職工たちによって組織されていた。「打虎隊」は査問会でかれらの主人の店主や雇用主の資本家をとるかこんで、「五反」の事実について告白をせまった。資本家が自白することを「交代」<sup>チャオタイ</sup>といったが、打虎隊にかかれれば「五反」の罪をおかしてもおかさなくても「交代」しなければ家に帰ることはゆるされない。資本家は官吏と行動をとにしたことはなにからなまでに「坦白」<sup>タンペイ</sup>（白状）しなければならなかった。

**思想改造運動** 五反運動は商工業者を改造して「公私合営」<sup>クンシホーユン</sup>（国家と資本家の共同経営）に導くによる移屁股 準備運動だったといわれている。ともかく一九五三年私营工業者にたいして学習が各地に開かれ、かれらの思想を改造しようとしたことは事実である。その結果その年のくれから一九五四年、五五年にかけて、私营商工業の大多数は「公私合営」<sup>クンシホーユン</sup>にかわってしまった。

以上の運動と平行して、知識階級にたいする大規模な思想改造運動が行なわれた。中共当局の考えかたによると、小ブルジョア知識階級は一般に労働を軽視し、超階級的空想をいだいているという。かれらはこれを思想的荷物（「思想包袱」<sup>スシャンベオフ</sup>）といい、知識階級にきびしい「学習」<sup>シェーレ</sup>を施してそれをすてさせようとした。これが「思想改造」<sup>スシャンカイツアオ</sup>運動だ。

思想改造の学習会では参加者各自が「自我検討」(自分自身の思想検討)を行ない、自分がいかに「小資産階級思想」「反動思想」「錯誤思想」(まちがった考え)をもっているかをさがし出さなければならぬ。そしてその結論(「総結」)をみんなの前に提出し、周囲の人びとの批判をうける。こっさり自分だけで自己批判しないで、自分のこれまでの思想のみにくいところを大衆の前にさらけださなければいけない。つまりわるいものを「斬首」して衆に示してこそ、ほんとうの思想改造が可能だというのである。

ここに金陵大学学校委員会の主任委員李方訓氏の「総結」があるから、それによって思想改造の実態にふれよう。

「……これを要するに私は個人の利益を非常に重視していたので、それがために親米的となり、米国を崇拜してきました。その上私は封建的家庭の出身で、帝國主義教育をうけましたので、反ソ的、反共且反人民的でありました。小さいときから米国に留学して出世したいと考えており、あまんじて帝國主義に投じ民族的立場を喪失しておりました。」

「總之、由於我嚴重的重視個人利益、所以親美崇美、更由於我出身封建家庭、受帝國主義教育、因此反蘇、反共、反人民。從小就想留學、向上爬、甘心投帝國主義、喪失民族立場。……」

色々な「総結」書をみているが、大たいこれと同じような内容で、それらは過去の自分(「旧我」)はかように多くの欠点にみちていたが、現在共產黨の導きによって新しい自分(「新我」)

に生まれかわることができたと思ふのである。こうして「思想改造」の学習を通過すると、思想がかわったことを、これまでの生活態度をあらためることによって実際に示さなければならぬ。このように生活をあらためることを「移<sup>イ</sup>屁<sup>ビ</sup>股<sup>グ</sup>」（しりをうつす）といっていた。

農業組織化運動―合 作社から人民公社へ この知識階級は思想改革運動と平行して、農民の思想改造運動が徐々に進

つと、の分田をうけた中国の農民は、それだけでは到底貧乏状態から脱することはできなかった。そんなせまい耕地でよい農具や耕畜をつかえば費用が割高になる。それでは到底農業の近代化はできず、農業は工業の近代化についてゆけない。そこで中共当局は農民に分配した小さな土地をあつめて大規模な農場をつくり、農民がそのなかで協力して働く形を考えていた。そうなれば耕畜や大きな農業機械を合理的に使えるからである。中共がこの方向にまず一步ふみだしたのが、「互助組<sup>フチュイ</sup>」である。これは土地所有権はそのままにしておき、農民を協同作業の組織に動員する制度である。これによって農具のないもの、耕畜のないもの、労働力の足りないものは、それぞれ耕作上の困難を解決することができた。だが土地が自分のものとなり、そこでとれたものの半分以上を地主におさめることがなくなり、全部が全部自分のものとなるというので、農民の生産意欲はもりもりあがってきた。農民のなかには協同作業には興味をもたず、自分だけでやって利益をあげようとするものが多かった。これを「單幹<sup>タンカン</sup>」（自分ひとりでやる、農業の個人経営）といい、このような思想を「單幹」思想といった。中共幹部は「單幹」思想を「自私自利<sup>ツレツリ</sup>、不團結<sup>ブツエンチエ</sup>」とき

めつけ、そういう傾向のつよい典型的な農夫の名をあげて思想闘争の目標とした。「王水盛思想」<sup>ワンスイシェン</sup>「雷玉思想」<sup>レイユーステン</sup>「李四喜思想」<sup>リスシスシテン</sup>にたいする闘争がそれである。王水盛というのは江西浮梁県西郷の貧農で「土改」のときの功績で二十畝の土地を分配され、郷長にも任命されたが、田畑の収入が多くなるにつれ、党の工作をなまけて、田畑の耕作にもつぱら力をそいでいた。雷玉は河南県の貧農、李四喜は湖南の雇農で、いずれも王水盛と同じような生活態度を示し、そのために闘争の対象となったのだ。

互助組ははじめのうちは農繁期の協同作業がおわるとともに解散する臨時的なものだったが、次第に常設的なものになってきた。そしてやがては相互の田畑のあぜをとりはらい耕地を一カ所に集中して協同作業に都合のよいようにするようになった。そうなると收穫の分配が問題である。しかしそれはやがて合作社という出資組合をつくることによって解決された。合作社はもう個人の土地所有権にかまわず全耕地を統一的に使用することができたので、理論的には生産にとって非常に有利なわけである。この組織はさらに一步をすすめ土地や耕畜も合作社の所有物にしてしまい、收穫の分配は各自の出働した労働日数によって行なわれるようになる。それが「高等合作社」<sup>ハーツォアシェン</sup>である。かように農業経営の組織を高度化して行くことを「農業集体化」<sup>ノンイェシディサ</sup>（集団化）といっている。この運動の頂点が一九五八年の「人民公社」<sup>レンミングシェ</sup>運動であることは周知の事実である。この「集体化」運動が個人の自由意思を尊重して行なわれたか、それとも、強制的に行なわれたかは議論のあるところ。日本では「集体化」は生産増加にむすびつくので、中国の農民は大よろこ

びでそれに参加したという説がもっぱらであった。中国でも「集体化」は「自願互利」の原則にもとづいて行なわなければいけないといわれていた。だが実際にそれが守られた形跡はない。互助運動の組織には三つの方法があった。一つは郷長が勝手に名簿をつくり、かねをたたいて人をあつめ、一緒に労働させるという方法である。これを俚謡風にこういつている。

「挨戸編組、敲鐘起床、吹哨集合、站隊分工、紅旗一揮、大家労働」（戸ごとに人をあつめて編隊で、かねをたたいて一斉におこし、らっぱを吹いて集合させ、隊ごとに仕事をわけ、紅い旗を地にさしてみんなで労働する） こういう言葉があるかぎり、「自願互利」の原則、つまり各自が自発的に参加したといえることはできない。

第二はまず農民に互助組の呼びかけを行ない、労働模範が先頭にたつて互助組を組織する方法、

第三は県から「工作组」（タングヰウ）を派遣し、「基点村」（チエンツェン）（中心農村）をえらんで、その環境を調査し、そ

の農民のなかから積極分子をえらび、その周囲に大衆をあつめて互助組にする方法である。これは「從小、到大、從低到高從臨時到固定、從農忙到克服限制」（小から大にいたる、低きから

高きにいたる。臨時から固定的組織にいたる。農繁期から制限のないものにする）。中共はこれを模範的な

方法だといっているが、実際にはこの方法では人があつまらなかった。では実際に行なわれた方法はどうかというと、やはり「かねをたたいて人をあつめ、鐘を打って一緒に食事し、みんなの

田はみんなて耕やそう」（敲鐘集合、打鐘吃飯、大家的田、大家來幹）ということになった。農民のなかにそれに反対するものがあると、幹部は「政府が組織をさげんでいるのだ、組織



しないわけにはいかない、組織にはいらないうものは、誰でも組織の反対者である」(「政府  
チャオツツ、ブノシツ ツツツ、スイヤオフ ツツツ、チュレ、コアシツツツ」)  
叫組織、不能不組織、誰要不組織、就是反組織」(一九五二年五月十六日、漢口、長江日報)と  
しかりつけてやつと組織させた。こういう傾向は人民公社運動のときには極点に達し、「自願互  
利」原則はまったくかげをひそめてしまったのである。

「人民公社はひろ 公社における農民の耕作はもはや自分個人の仕事ではない。公社自身が小さ  
がり深まる」か な政府のようなものであるから、その一員たる農民の耕作は公務に等しい。

中国の農民がそんなにはやく個人主義の観念をすてて、「我は人のために人は我のために働く」  
(「我為人、人為我」<sup>ウオールエイレンウエイウオール</sup>)というような気持ちに変わるものではない。

今年一九六六年一月一日人民日報の年頭の辞で、中共はいよいよ今年から第三次五カ年計画の  
年に入つたことを宣言している。そのなかで第二次五カ年計画は一九六〇年に基本的に達成され  
たといひ、一九六一年からの五年間は、無計画時代だったことを告白している。この無計画時代  
五カ年間の初めの二年は経済調節期、あとの三年間は準備期だったといっている。そのあげく今  
年から第三次五カ年計画にはいったということは、この無計画時代に中共の経済がそれにたえる  
だけに回復したことを示している。この経済回復が主として物質的インセンチブによる労働意欲  
の復活によることは誰の目でも明らかであろう。とすれば今年から第三次五カ年計画を開始する  
といつても、この現状にもとづく従来の政策からおりるわけにはいかない。おりれば経済の破綻  
が口をあけてまっているからだ。いうならば中共はどんなに気はあせても中国語のほんとの意

味で「騎虎の勢」にのっている。つまり、虎にのっている人が下におりれば食べられるから、ただ虎にしがみつくほかはないように、物質的インセンチブを是認する經濟政策をつづけてゆく以外に方法はないということである。

読者は以上のように、用語からみた新中国の歴史が、これまでこの国でのべられてきたものとはかなりちがっていることに気づかれたであろう。中国の諸政策は、それを促進するキャンペーンに用いられた用語とそれに対する民衆の反応を示す言葉を研究しないと、真相はわからない。中国の「土地改革」「地主」「中農」の内容は、欧米または日本のそれといちじるしくちがっているが、そのちがい方をはっきりさせなければ、その土地改革政策に対するほんとうの評価ができないことは誰にもわかる。ところがわが国では終戦後「アメリカ一辺倒」の時期がつづいた影響もあって、中国の刊行物を広くよんで用語の意味をたしかめようとする人は非常に少なくなり、そういう面倒をさせて欧米流または日本流の解釈だけで簡単に評価をあたえている。もっともよい例は「人民<sup>レンミン</sup>」という言葉。日本でも欧米でも、人民という言葉は専制主義に対立する概念とよく結びついている。ところが中国語ではどうであろうか。この国には「人民専制」という言葉が大きな抵抗なく国民に受けいれられる背景がある。この点が欧米人にはよく理解できないところなのだ。それゆえ中共革命に多くの点で共鳴しているジャック・ベルデンのようなひともちうっている。

「中国共産党員の『人民』という言葉のつかい方は、西欧人の耳にはやや神秘的なひびきを

もっている。中国の皇帝は自分自身を『天の子』とよんでいたが、現在中国共産党員はかれら自身のことを『人民の子たち』とよんでいる。言葉をかえていえば、人民が神にかわり、共産党員が皇帝にかわった。皇帝は天の命をおびて支配していたが、共産党員は人民の命をもつて支配する。……こうしてかれらは絶対主義に道をひらく。なぜならば、もしも人民が決してまちがわないならば、その人民を代表する権力もまた決してまちがわないことになるからだ。」

この国の基本的なものに関する用語でさえ西欧や日本と同じ言葉をつかいながら、このような内容のちがいがあつた。たんにこの一点をとつてみても、この国の用語学的研究がいかに重要であるかがわかるであろう。

至誠堂新書29

中国のことばとところ

---

昭和41年2月28日第1刷発行

昭和44年2月10日第2刷発行

著者／鹿島宗二郎

発行者／出光宏

---

発行所株式会社至誠堂

郵便番号101

東京都千代田区神田鍛冶町1の9

(256)8121(代)／振替東京97579

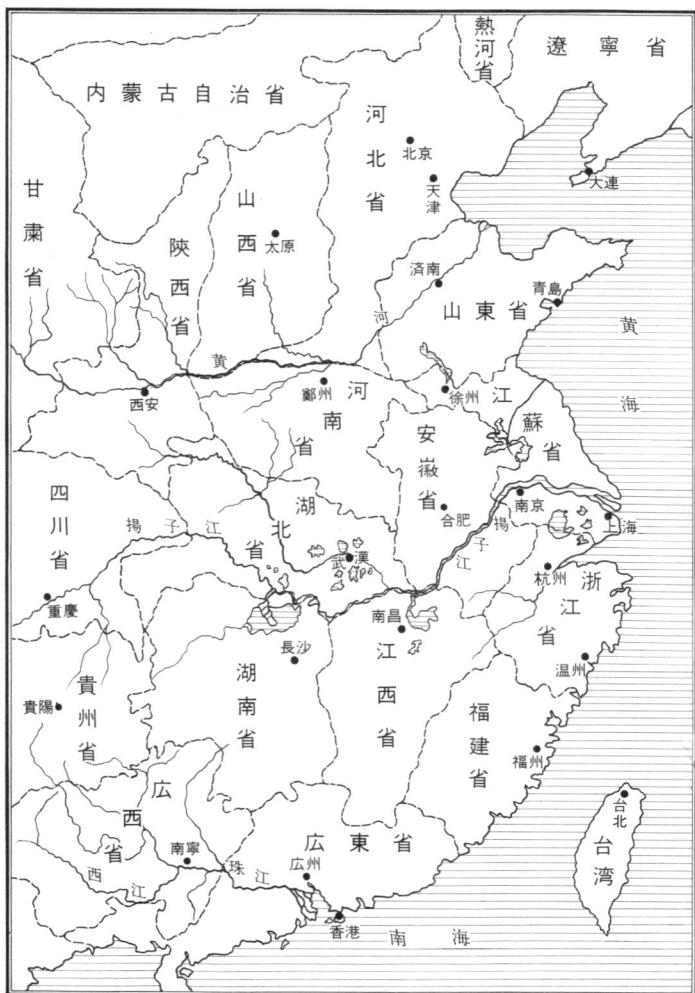
---

横山印刷／長生堂製本

---

換印廃止©

250円





至誠堂新書 29

250円

# 中国のことばとところ

鹿島宗二郎 著

この本はかなり欲ばった目的をもって書かれている。まず中国語というものを全然知らない人びとが読んでも面白く、読んでいっているうちに、しらずしらず中国語をおぼえてゆき、中国人と中国の現状に親近感をもたせるようにし、中国語がどんなに面白い語学であるかがわかるようにしたい。

中国語は文字があらわれてからでも四千年以上の歴史をもつ言葉であるから、そのながい歴史のなかでみがきだされた珠玉のような成語やことわざができており、そのなかに中国人の性格や習慣が浮きぼりされている。それゆえこういう成語やことわざもできるだけ解明したい。

いまや日本でも「官様文章」(政府声明などの公式文章)をなぜまわすだけの中国研究は、止揚されてよい時期にきていると思う。そのために役立つ一つの方法は用語的研究ではあるまいか。そういう意味で本書は、中国語を通じて現代中国の実態をさぐりあてようとする、この国はじめての試みでもある。

著者序文より

